

○日は温かならん事を思ひ、月は明ならん事を思ひ、智は多からん事を思ひ、實は多からん事を思ひ、形は美ならん事を思ひ、口辯ならん事、耳は聰ならん事、眼は明ならん事、鼻は利ならん事を思ふ、人情なり。然れども之れを己れ一人の寶として何の樂みあるか。樂みは獨りの名にあらず。樂みとは必ず相手あり、之を用る處あり、見る人あり聞く人あり喜ぶ人ありて、樂みとなるなり。聖人の樂なるものは、更に是より大なり、神の御旨にかなふ事、人としては公衆と共に苦樂を同ふす、人の知ると知らざるとに用なし、山の如く海の如く、細にしては水の如く風の如く空氣の如く、神にして只我をしるのみ、是れを之れ樂みとはせり。なほ極言す、己れに一物なければ、天地皆我物なり、己れに一物あり、此物最大無限の邪魔をなして此天國に入らしめず。一物とは、心中一物なし、所有品又一物なし、恰も廣き野の中に裸躰して四期の氣候にも無頓着に直立すとせば、いかなる人にも眞の精神は發起すべし。

顔回一簞一瓢以て樂みを改めず、回にして改むれば樂みにあらずなり。回は神の存在をしるものなり、回の樂や小なりと云ふべからず。いかにせば此感覺を得るか。感は心に邪魔を取去るの急なる事、一點横はるものあらば感應なし、一點罪ありもしくは欲望あらば、到底神を見ること能はざるのみか、神をしる事もなし能はざるなり。もし夫れもろくの汚れと罪を悔改めて、毫厘神にまみゆるに恥ぢなきに至つて、靜に眼を開け。神必ず眼前にあり。誠に一秒一瞬神速、其形あり又形なし。神の所在を見て天地の大なるを見、天寶を我ものとして大氣を呼吸し河水井水に呑む、是れ我快。

蠢爾たる惡俗社會に居る、クソ船に居るよりも惡醜なり苦痛なり。船は海洋にあり、逆れんとしてのがる、能はず。クソ船の中、又神を天に仰で、獨り精神の快樂をおもふのみ。

要するに情慾深き者は、天より寶を與へず、只己れ憤闘して謀略術數の獲物のみ、人を殺して得たる寶のみ。此くの如く不潔の寶は寶にあらず、神はもとより與へたるにあらず、人も與へたるにあらず、私曲竊盜強迫より得たるものを寶とは云はざるなり。盗んだものはもとより寶にあらず。其物のために罪せらるればなり。罪を寶とせば、誤解迷信の極とするなり。

キリスト曰く、左の手にて物を人に與ふる、右に知れぬやうにせよと。ありがたし。無心にして與ふる方の事は、是れにて充分。尙進めて云はゞ、與へられしものも亦天物なるが故に、次の人に與ふるにも、又同じく心に淡泊に解して可なり。もし夫與へられたるものなるが故に、自己の所有物として吝かに、貧者にも與ふる能はず、餓死するを見ても顧みざる程なれば、是己に與へし恩人の意を害し、所謂天物使用の法につまづくものなりとす。然るに世人、與へられしものは大切にせざるべからずとして、此金品に付ては特に慈善心をも失はねばならぬ、貰つた金品を更に他の人に與ふるは偽善なりと。但し貰つたものを妄りにするは、もとより亂暴な罪人にして論するに足らざるなり。茲に只與へられし人も、亦與ふるに付、左に遣るに右に知れざるやうにすべし、此くして與へる心の公明にして清風と明月との如しである。

〔右此日朝七時七分記す。朝めしになり、夫れより雨中谷中に行かんとす。三國橋は長船となり、時に谷中の

竹澤氏に逢ふ。同人は魚を賣りに行くの途中、よりにて傳言を頼みて引返し、車にのり、古河町の東方字らいでんに島田宗三氏をたづぬ。氏は畑に行けり、雨ふりても歸らず。留主居の人は云ふ、昨夜も遅く畑より歸りました、宗三さんの勤勉には驚くの外なしと。夫より悪魔の富めるもの、家を訪ふて、麥蒔準備をすゝめたり。悪魔の作りたる麥も人は之を食ふ、畑は悪魔にあらざればなり。

后一時、船戸町土信田榮次郎方に来り、疲れ出で、晝寐する。一時間后、二時より二時間に前書を記書す。文章亂暴首尾めつれつ、よろしく人によめるやうに短く御加除被下度候。』

七月八日後八時

正

逸見様 安部様

木下様 石川様

外諸君

二伸

鳥は飛び、獸は牙あり、爪とぎあり。人は鳥獸其他の長所を兼ねたり。人は羽なきも飛ぶ、空を走れり、牙なくも、とき爪なくも、あるにもまさりけるほどに。人は鳥の如くすがたも長所も一樣ならず、きばつめなくとも獸の如き其形ち其働き一樣ならず、俄に無學の徒ののべ盡す能はざるは、人の性の長短のまち／＼なるにあり。たとへば鳥のすがたの一樣に似たりとする、鶴は足ながし、鴨みじかし、もし之を一樣にせば悲み憂ふるとの言葉の如し。人におけるは實に千萬無量なり、裸躰を厭はざる温暖地の人種と、氷界に近き地方の人種の

區別の如き、温暖地人種は衣を重しとせざるも、寒地の性質は衣類を重品とせん。寒地に生れてもし暖地を學び衣を捨てば忽ち凍ゆ。暖地にして寒地の服を着れば忽ち病まん。天は必ずしも裸躰のみを以て教へとせず、厚着のみを以て教へとせざるべし。其身邊の適度に應用するを以てせり。今所有物の金品を貧者乏者の必用の方面、其用に惠與するは、最も喜びとせん、是誠に此世におけるても報を得、天の父よりもほめられん。然れども若し他人の濫用を増長せしめば、神之を喜ばざるのみならず、社會に害毒を流す事甚し。金品は蓄ふるの難きより、之を散するの難きを覺へたり。積は易し、崩すは難し。積は山に登る如し、崩すは山を下る如し。危険のほるに少く、下るに多し。

〔以下未だ熟せず、よろしく御加除あらん事をいのる。尙聖書を讀んで進まんと欲す。〕

○食前の祈禱

神は多くの天地を生ませたまひて、萬象を化育す。人に命じて神秘をさぐらしむるため、人に多くの材料を其需用に充つ。人聖なれば神に感じて自覺す。凡人は聖に問ふて知を益す。人の性優劣大小あり、强者の弱者を凌ぎ優者の劣者を壓するなく、優るものは多く材料を得、劣者少く材料を得、大なるものは多く、小なるものは少く得るを、天の性のまゝと云ふ。優者大者、劣者小者を凌ぎ壓せず、相互適合の分配を過らざれば、之を人の道と云ふ。もし夫れ強きもの優るもの大なるもの、弱く貧しく劣り小なるものを凌がざるにあらず、虐げざるにあらずといへども、是天の父の誠めを知らず教を知らぬものなれば、知るものは此間にありて之に斟酌

を加ふ。義者の言行は法となりて、双方の中間を調和す。茲に於て人道亦行はる。天は我に教るに眞理を以てせり、我は其力を得ん事を勵む。已に其光にさらされ其澤に浴せり、以て道と與ふるものに報ひ、道を欺くものに報ひざるの理義を詳かにして、以て食す。茲に數人の飲食を共にするものあり、一人にして二人を食せば一人は飢へん。一人にして二人の席を占めば、一人居る處を失ふなり。數人にして誠によく之を證すべし。若し夫れ之を適法程度調和調度適度斟酌鹽梅等、誠實に讓歩して眞の中のものよろしきを得。今の此數人に行はる、ものを、多數に行ふの道とす。然れども人の情傾き易し、中は行ひ難し。故に先づすべてを人に下り一切を讓りて、すべて人に使はるゝまでに覺悟せば、其或は中を得るに近からん。キリスト教へて曰く、人の上たらんものは先づ人の下部となれよと。食亦自ら其中にあり、味ふべくして以て食す。

○馬鹿にされるとは思ひつゝ、譽められるとうれしい。

○胃部正しければ不正物を容れず。神は正しくして罪を許す。

○端書を買ふ錢もないので急ぐと、車にのる。

○明日は清かるべしと云ふなかれ。

○妻を叱るものは、即ち其妻に叱らるゝの人々ならん。

○樂觀の境遇に居て悲觀の境遇を忘れざるは、是れ君子なり。悲觀の苦痛の地に居て天を樂むものは、是れ義人なり、又神の存在を知るの人ならんか。

○嫉み心に妨げられて、よい人を譽める勇氣なく、

○憎まるゝを怖れさせて悪い人をせめず、却て此人にへつらひ、

○酒と衣服を飾る外は、人のためには一錢たりとも、

○賄賂を多く取れば器量なりと譽め、

○甚しいかな、よい人の短所をば拾ひ、悪人の長所をばほめ、

○外形飾り盡して内容亡び盡せり。公共心の欠乏。國の存立、何れにか得ん。

○愚に陥るなりとして弱き者を助けず。弱きを助くるは身の害なりと解き、強きにへつらふは利益なりと思ひ、ますゝ強者を助けて弱きを虐けるを自家の便方とす。夫れ天下の生産は誰れの手に生ずるや、皆此弱者の手に成らざるはなし。今弱きものを殺さば、生産絶へてのち強者亦自滅す。

○善者ありといへども、智徳の士に逢はざれば教へをうくるを得ず。盜賊多しといへども、早く法官に逢はざれば召捕へられず。凡そ人類上の不幸は皆此一に歸す。

○樹に害虫あり、葉を食ふ。早く此虫を除かざれば樹枯るゝなり。次に虫も亦葉を食ひ盡して死す。害虫の死する時は、已に樹の枯るゝときなり。國賊の自滅する時は、國已に亡ぶるの時なり。國賊は害虫の如し、之を征する速かなるを要す。

○神は廣き範圍に害虫をも造れり。而して此害虫亦他の害虫を食ふて人の材用を助くる用ありと雖も、人は狭き

必要よりして害蟲をころし、其宜敷程度をえらびて人畜生存のために、強弱相助けて互に共産をさまたげざるべし。之れ人道上の中庸にして、神の天地を司るの中心とは大に範圍の廣狹あるのみならず、循環の遲速、運動の優劣あり。只人は人類上の中庸を選び、人道に過不及なからしめんとする牽制力は、互に主張を異にし必用を異にし満足を異にするの中庸にあり。天地の中心は全く性質の異なるのみならず、神と人との區別の止む能はざる處なり。

○只人たるもの、神により神をいのり、天地間の中心を司れる神の存在を知りて尊敬するほどに至らざれば、人類上の中庸だも得る能はざるなり。

○強てたとへば樹の如し。樹は神の造れるものなれども、假りに木にてたとへば、神は幹にして人道は枝葉たり細根たりと云ふも可なり。幹に附帶せざる枝葉は枯れる如し。又渾て枝葉と細根なければ、幹も亦枯るゝに至る。神は人によりて尊し、人は神によりて息く。神によりて生命の長きは、幹によりて枝葉繁茂するが如し。生命無限。只神は人のみの尊信によれるものにあらず、萬象森羅禽獸魚山川河海無數の星辰陰陽寒暖天地間の一切、皆神の造れるものにて、天地間のすべては皆神のものなり。故に人悉く死せりといへども、神の死せざるは勿論、他物も亦死せざるなり。渾ての人死せりとて、天地はかはらざるなり。

○只人は神あるの理をしり、神の力神の徳をしり、神を敬し神の教の如くつとめ、人類相互をして神を尊ばしむるの感智意を具備せり。故に人は何んのために生れたるか云はゞ、萬物に秀で、神の次ぎにありて神の存在をしり、其内にいと尊き神祕をさぐり得るの天職を帯びたり。是他の物他の性に秀でたるなり。神は此人類には多くの材料と需用を充て、生活に不足なく、調査研究、其身の生れたるは何んのために衆に秀でたる幸を以て生れたるか、人は進んで止むべき性にあらず進んで早く神に近付くを以て、最上有功として、日夜此方面に向つて片時も怠るを許さず、是神の人を造れる所以なり。苟くも人としては、假りにも過りて賤しき小さき害鳥害蟲を食ふて神の命にたがふの類に陥るなけれ。今の世の上流に居る人々は、以上の害蟲にだも及ばずして、此類の劣等に陥りたるもの多し。大聲叱呼して此人々を救へよ、人類を去る事甚だ遠し。害鳥尙且つ害蟲を食ふにあらずや。人類にあらざるものを以て、人類の上に置く、萬民の悲惨此時より甚しきはなし、國の存立何れの處にかある。

○人類上の中庸

人類の中庸といへども、少数人の心にて定むるものにあらず。是を希望よりせば、人類希望の範圍内の中庸、即ち世界の輿論、もしくは數ヶ國のよろん、一國の輿望一縣一郡一部落の輿望、即ち其中心點を人類の中庸とは云ふなり。然るをもし夫れ其身統一權を有する帝王にもあらずして、一己の識見を以て妄りに中庸なりなど、喋々す、危し。其眼光は豆の如く、其識の淺き事細流の如く、此輩の見る「中」は極めて偏小の「中」なり。恰も寫眞の遠近の如し、小兒を欺くべし。近きは大なり、遠きは小なり、而も遠近の心なき小兒は、見て遠きを小なりとせば、其過ち大なり。偏見の中庸は、小兒が寫眞に遠近を判する如し、聖人も亦中庸には病めりと

云ふに非ずや。難ひかなく。故に強て中庸を求めば、極端を云ふのみ。兩極端を捕へ得ば、必ず中心生ず。兩端を得るは、中を得るの一つの方法とす。未だ一端をも得ずして妄りに中庸と云はゞ、是常に中を失するの
人なり。

(己酉七月二十八日、芝二丁目石坂音吉氏方休息中書す。)

○又予は、從來我身に害を與ふる人といへども、他の人生に益を與ふると云ふ名を以て來れば許して遇したり。故に屢々此人々に欺かれたり。其數頗る多し。是感知乏しきもの、道理、眞理を信するの過ちにして止むを得ず、さくべからざる弊なりとして顧みず。欺かるゝ事の屢々なる所以。而も人道は一周して去る、のちに天道至る。天道循環、前の欺かれたるは欺かれたるに畢らざる事も、亦屢々なるあり、或は欺れたるまゝなるあり、未だ一周し來らざるあり、遠き未來に一周し來るもあらん、遲速はあれども、必ず一周し來つて欺かれたるは解けるなりと信す。誠に面白き循環とす。されば又欺かるゝも樂みの一つならんか。

○悔ひ改めざれば清からず。清からざれば心に曇りあり。曇りありて神を見んと欲せば、青き眼鏡を透して白きものを見る如し、沉んや誠に神を見んと欲するものをや。

○いつも神、我に教うるにあらず。神の我に教うるは、我心の神なる時のみ。故にいのり、故に斷食、故に靜かなる處、森林澤谷の人遠き處よろしからんか。

○之に反して、市街の電車中の如きは難し。狂謠絃聲はイヨク騒がし。

○人の刑罰を設くるは、益鳥の害蟲を食ふに似たり。人は鳥獸にあらず、何んぞ刑罰を用ひんや。但し鳥獸蟲類の陸に棲むものを見る、同類の規定は共愛生活の法あるあり、又なきものゝ如きあり。

○人亦鳥獸蟲類を尊んで、益鳥の害蟲を殺す如くするか。人は人の道を學び、尙且つ其上に神の在るあり、神の命によりて人の道として行ふ、是れ人の道なり。何を苦んで刑罰を設けて、益鳥の害蟲を殺す如き愚に陥るべけん。救ふべし。

○神を尊信し人を信愛するものは、早く絶叫して、刑罰の體刑を廢すべし、沉んや死刑をや。

○蟲、樹に生れ樹を失せば、蟲は盜食をしらずして死す。人、地に生る。地を失へるか、又生れて地を持たず、地に生れて地に食むの道なきものあり、而も人は盜をなすことを學べり、以て人の作せる地上のものを盗んで食ふの智識あり。但し盜まざれば食ふ能はざる時あり、職業なく雇主なきとき、ちんせんのとれぬとき、いかにして食ふか。盜まざれば死なん。盜の流行して止まざる所以なりといへども、盜めば即ち刑罰に問ふ。却て是れ害鳥の益蟲を食ふに同じ。鳥獸にして之を聽かば耳を掩ふべし。鳥獸尙且つ恥づるの行爲、人にして今世之を行つて恥ぢず。人道の滅亡。人道滅して、而して國の存在を認むるを得ず。國とは人の存在の名なればなり。人の存在なければ、もとより神の來り教る處なし。其實、神も人も存立なしと云ふの外なし。今にして國の存立奈何を論ずる、愚の愚なるもの、殆んど過去の夢のみ。嗚呼遲し、予も亦天地に恥づるなり。

○人一代に成功せんと欲せば、自ら好んで生命を縮むるものなり。

○未開の世、天は尙三聖を出せり。後物質進歩の文明に至らんとするに及んで、未開の聖に用なきか。世界人類の始めは尻に尾ありたれど、衣類をまとひ佇立するの進化以來、今其尾の必用なしと云ふと同じく、三聖の物質の進歩に對するは、進化前四足時代の尾の如きか。否な、三聖は人類の尾にあらず、却て頭腦たるにあらずや。聖の必要イヨ／＼急なり。

○馬鹿にされるとは思ひつゝも、ほめてもてはやされると、うれしいよ。是れ人生弱點の一。格言一笑。

四十二年七月二十九日記

○四十二年七月二十九日。此日、十二時、東京より古河町に着。直に新郷村川邊村。本郷より小野袋、夫れより麥倉に行き、片山飯塚山岸三氏に面して、古河町田中屋に來泊す、夜十二時半。

○七月三十日。古河町より麥時相談のために、野木の明神前と煉瓦場に來り、谷中恵下野に來泊す。

○同夜、島田榮藏氏に泊す。夜半猫の鼠を捕り來りて、子を呼ぶ、泣て子を尋ねて見當らず、悲鳴止まず。故を問ふに、三疋を他家に養子にくれたり、親猫之を知らず、鼠を捕へ來つて、子に食はせんとして子居らず、悲泣止まざるを見て、予も亦猫のために同情して泣けり。親子の情にせまるは神に近し。獸尙且つ然るを見る、況んや人類たるものをや。孔子曰く、犬馬も養ふ事あり、敬せざれば何を以て分たんや云々。

○八月一日。朝、東京日暮里より北千住に、車代三十錢は取られたるならん。古河町より新郷川べ利島三ヶ村巡回して、夜る十二時、古河町田中屋に歸る、車代又九十錢を拂ふ。合計壹圓貳拾錢の車代は、殆んど人に感動なし。今朝恵下野雷電祭に金貳拾錢の燈明料をさぐ、人心大に感ず。之を見る、感ずると感ぜざるとは、遠きと近きとにあり。凡そ此くの如くして、東京の運動は地方人之をば知る事も少くして、東京に行くは見物に行くものゝ如くおもふなり。

○奇怪の變化

島田氏の孫三人あり。二人は男、一人は女なり、皆才發あり。中に付奇なるは、長女本年九歳いく子、去る四十二年四月より野木村の小學に入る、二年級たり。予が奇人とせしは、入校の已前五歳位の頃よりなり。予此家に入出入するは三十八九年頃よりなり。此長女いく子年三四歳なりと覺ゆ、眼光人を射、進退動坐法あり、予偶々戲に捕へんとせば、直ぐ其氣を見て逃げて毫も手につかず。弟二人の世話、鳥獸の世話、長幼自然の禮あり、其神機敏捷にして、予殆んど恐るゝ程なり。本日偶々休暇、祭日の例ありて息む。野木の雷電社に遊びに行かんと、其衣服の龜なるを厭ひ且つ悲めるを見たり。茲に於て予大に驚き、且つ此女子の器量の程度及其變化の甚しきに驚けり。是他に非ず、此變化の來るは教育なり。女子學生皆奢侈に走れるによりて此くは惡變せりと決す。初等小學にして已に此美性をして惡變せしめたり。悲むべき教育の風俗は、寧ろ野蠻に劣る萬々。野蠻の天性を其儘にせる時代に劣る萬々。物質進歩と反比例にして、其去ること幾千萬里。破道破憲とは、何

ぞ愚なる。今や天地を破壊せり、日本の天地を破壊せり。予等同志が谷中に對して、中央の爲政行爲を見て、破憲破道なりと云ふ、抑も後れたる愚の愚なるもの。即ち國に對しては、十日の菊六日のあやめに異らざるなり。今にして之れ回復を圖らんとせば、天地より、其形勢より、改革新築せざるべからず。人事測量を失せば、皆無用徒勞のみ。

○水野彦市氏死す。四十五歳にて死す、四十二年舊四月八日死す。

水野彦市氏は、三十八年春已來、瀦水池必用ならば土地を起業者に貸與すべしとの説を持ち、四十年一月、郡長警部長藤岡町出張、谷中人民召集收用に應ずべき旨嚴重に命じたる時、同人は御入用とあらば小作料を以て貸渡すべしと主張して、命に應ぜざる事は、同行一同の證する處なり。此時高田仙次郎氏は、献地すべしとまで主張したり。此二件は縣會四十二年度の質問議員碓井氏より、知事に對する質問中、此二人の事は論證して記事にあり。

○竹澤釣藏氏年三十三歳、御母せき子五十三歳、釣藏妻とめ子三十五歳、釣藏弟末吉二十三歳、とめ子菅笠を作る妙藝あり、一女子を生み三歳、合五人。母は川邊村駒場三軒より來る、高橋文藏の長女なり、谷中下宮北古川竹澤仁助に嫁す。仁助は明治二十九年十一月十七日、五十二歳にて死す。其妻せき子其時四十歳なり。釣藏性正直、母に孝なり、貧苦の内よく同志のために働けり。四十年六月二十九日、母釣藏に用事あり、字惠下野に行き、歸路惠下野の堤上の細き竹の子一本を折る。警官之を捕へて訴へんと迫害す。せき子答、可然取計へ

よと。警官其言の正しきを感じて止む。

○去る三十八年七月中、縣土木吏縣會議員等、無斷に北古川に示威運動を試む、最後に栗原清藏未亡人たよ子四十歳位、子供四人長女さく子十五歳、次女たつ子十四歳、長男安藏十一歳、三女きよ子十歳の家に至り、官吏議員等之を侮り、警官を同行して猥りに家宅の調査に従事す。字民數人大に怒りて泥棒々々と叫ぶ。官吏等逃けたり。同一の行爲は間明田彥次郎の家より着手、七戸目に右栗原に至る頃、大勢集りて泥棒を追出す。泥棒村役場に逃け込む。人民は水野彦市の水塚に登り、泥棒々々と叫ぶ。間明田竹四郎、鎌を携へたるを以て警官之を取上げたり。後部屋警察に召喚され、説諭を加へて、鎌を本人竹四郎に下渡す。

○四十一年舊正月十二日竹澤友彌死す、六十一歳。

四十年七月五日、家屋を破壊せられ、直後に風雨連日止まず、小屋掛け未だし。簑笠にて樹の下にかゝみ、食物ぬれて健康甚だ害されたり。十一月、友彌病を得て室穴に臥す。其親戚藤岡町高間竹澤角三郎來り、友彌を我家に引取り治療せんと云ふ、再三のみならず。友彌答、「我れは死すとも此地を去らず、無法無政府の現在、何れの地に至るも人民の保護なしと信ぜり。救濟の名の下に人民の家屋を破壊するの強制に對しては、死すとも此處を去らざるなり」と。終に病癒へず、四十一年正月十二日死去す。その妻かよ子今年五十七歳、當主長男房藏四十歳、嫁ます子四十四歳、長女せん子十九歳、二女さよ子七歳、長男房之進十七歳、二男定右衛門十二歳、外房藏の弟榮吉二十二歳。

○房藏の弟幸四郎年三十四歳、妻死す、繼妻二十九年貫ふ(渡邊寅吉の娘ふじ子幸四郎の妻となる)。村税のため不法財産差押、俵を封印さる。其俵を水塚に運びて幸四郎妻と象鼻に移る、妻病んで家に歸る、熱高く、妊娠落ちて死す、此日寅吉の父も死し娘も死して狼狽、友彌房藏等嫁を引取る。時に暴風雨高く浪高くして漸く引取り、死人を洗ひ、墓場は藤岡町寶光寺に埋む、途に竹澤角三郎方に棺を休息せしめたり。

○友彌は古川の舊墓地に埋む。此日同姓竹澤勇吉、右友彌の死を届け出づ。巡查榊某埋葬地を糺す。勇吉答、舊墓地なりと。榊曰く今官地となれり、埋むべからずと。然れども墓地を賣上げたる覺へなし、其筋に願ふたる事なし。四十年、土地收用法なりとして此墓地は一坪三錢にて收用せられたれども、祖先の骨及び靈は其儘地下に存在せり。

○竹澤勇吉、四十九歳、家屋破壊は四十年七月五日、妻ひろ子三十六歳、長男庄藏十九歳、長女みよ子十七歳、二男角三郎十六歳、二女ゆふ子十一歳、三男元三年五歳。此家、審査會の調べよりは裁判官の調べて増加せし事九坪八合。裁判官の來るは破壊の十日許り已前、家屋調に來りたる時に増坪となれり。又村税差押は竹澤友彌にて止め、竹澤勇吉に至らずして止めたり。村長鈴木は竹澤友彌方の差押をなして出縣、三日の後、田中正造を告發す。豫審判事、正造を召喚す、三度取調あり、數月のち宇都宮に公判は開けたり。此無法村税差押は、近隣の人を立合はせず、警官のみの立會にて、多く田畑土地を差押へたり、但し買收に應じて移住するものには村税を免除せり、而して其課税の多大なる事驚くべし。

此く殘忍なる行爲は、村民を威し追出さんの計に出づるのみ。其證據、爾來村税取立中止となれり。之れ或は田中正造の公判中、盜賊呼わりありて之に答ふる能はず、終に村税は中止となりたり。此村税差押は、納税者の半ばを押へたり。すでに落合熊吉は村税五十圓以上の割當となりたるに、是等一切を自然の沙汰止みとせしは、何等別に理由の存せるか。亂暴も筆舌すべからず。友彌は此等の感念に憤り、たとへ死すとも、其理非を分明せざれば止まずと云ふたり。友彌は魚の仲買を業とす。鮒は部屋村の石川の石川榮吉に、なまづ、うなぎ鮓ぶびの大がらは古河町に賣る。先月即ち四十二年七月は、一ヶ月百五十圓を仲買せりと。

○四十二年、間明田仙彌五十歳、妻たき子三十八歳、長男登市十六歳、長女ふさ子十三歳、二男平吉十一歳、五人。四十二年七月某日、警官家宅侵入、主人仙彌をかつぎ出す。寢て居て、月星ならで、大雨大夕立大嵐は素より、竈の中に蛙も居れば蛇も入る、是れ水害に追はれて諸々の蟲類が、塚の樹や岡や島へ、浪に揺られて逃け上りての光景なり。家屋破壊の當時より引續きての大雨にて、簑笠のまゝ、落成せざる假小屋の中に佇む。二度の食料すら調へる處なく、焚火は嵐に吹きちらされ、火は雨に消へ、井戸は汚されて呑むものなく、にこれる水をも呑まざるを得ず。巡查は毎日々々立のけくと迫り、威し來る。行くべき處はなし、進退維極り、先づ假小屋を拵へんか、綺麗に持ち運び去られて、假小屋を作る草も竹もなきまゝ、有合せの小舟に假りの屋根を拵へて、濕氣多き小舟の中に假棲ひせしま、病氣の様子。此頃古川の婦人は殆んど皆食を食ひ得ず、男子亦同斷。正造大に驚き、東京に走せ、京橋越前堀和田劍之助病院長に告ぐ。和田氏曰く、『白晝の暇は都合し難

し、夜る行くべし。もし病人出来せば報知すべし、其時は行きて見てやるべし。正造、議員と辯護士及救済會に用あり、四日間滞留、谷中に歸りて人民の男女を見る。皆氣嫌よろし。其故を問ふ。答ふる處をしらず。案するに、十日斗り已前より毎日天氣よくなり、水清くなり、小屋の中に雨ふらざればならんと考へ、頃は八月上旬の事なり、右の次第を和田病院長に報告す。

○去四十年一月上旬、栃木縣警部長植松金章、郡長、藤岡町に出張、谷中人民呼出し、内閣の認定書によりて説明し、買収に應ぜよと。且つ曰く、法律施行の爲には、雨のふる日に人民を庭前に引ずり出す事も出来る、其時驚くなど罵る。仙彌之を含み、家屋破壊の日、不快なりとして家を出でず。警部怒り、之を引出せと命ず。巡查數人押し入り、直に手をかけ、四人にてかつぎ出せり。仙彌の妻たき子夫仙彌を助けたれども力足らず、大勢の巡查は終に仙彌夫婦を引ずり出す。僅に負傷を負はせざるも、病人體のものを虐待せし事、凡そ此の如くして、直に家屋を破り、悉く材料をば運びざりたり。

鑛毒を以て村落沿岸流水に緣因する人民の田畑は勿論、其衛生をも害したり。人民之れが被害を免かれんと請願せば、其人民の多くを毆打負傷せしめて、六十人を檻に入れて、負傷の癒るをまちて罪をしらべ、名を兇徒と呼びたり。救済辯護士の多數之を助く。裁判は破れたるのち、沿岸に巨大の沈澱池を作らんとし、名を遊水池と云ひ、又潜水と云ひて、終に治水を名とせる、堤防費を以て堤防を破り、田畑家屋を買上げ、又國家の土木補助救済の金を以て人民の家屋まで破壊し、其施行の日病人を引きづり出したり。家屋をくだき、材料を持

去り、雨露に病人をさらしたり。但し仙彌病ありとは云ふ事なし、病ありと云ふは卑怯なればなり。救済金は家屋侵入を犯すの警官を生ず。實に天地も崩れたり。無政府を去る甚遠し。政治の有無はもとより無用なり、此天地は崩れたるの天地なり、日本に棲める人なきは此時にあり。已に人なし。無人の島か。否な、無人の島にかゝる慘害なし。やはり天地の碎けたりと云ふの外なし。

○四十年一月内閣にて西園寺總理大臣の名にて谷中を潜水池と認定すと公告せし官報を携へ來り、栃木縣四部長植松金章、下都賀郡長、保安課長、藤岡町役場に出張、谷中人民十七人を呼出す。此時四部長より説て云ふ土地收用法云々。人民は一言云はず、但し無用の言を云はざる心得なり。間明田仙彌答て曰く、潜水池に必要ありとせば貸遣はさん、田畑其他を貸すべしと答ふるや、四部長何思ひけん、怒を含み、收用法施行地上物件取拂のせつは、雨天たりとも家屋より引出して家屋を毀つなりと。郡長口を次ぎ、今警部長の云ふ通りなりと迫る。衆一言も答へず。

○仙彌の家屋は七月某日、家屋破りに來る。仙彌は以前の申條、貸し渡すべしと云ふ。又た先きに縣官が雨天なりとも人民を抛り投げて家屋を毀つ云々と云へる一條に付き問答す。此問答中、二時間の猶豫を與ふ。仙彌敢て需めず、ほりりなけほりり出す云々、明かになりたらんには家を明けわたすべしと答へて、動かす。二時間の後、四部長來り、巡查五六十人立針の地なし。水塚狭く家小なり、塚の上にも四五十人、塚の下にも二三十人、他人を近づけずして、大聲巡查に命じ、それひきづり出せと。言ひまだ盡きざるに、巡查の手は右腕を掴

む。次に數名一度にかゝり、巡查大勢にて、押す、引く。妻たき大聲、無法の事をするなど叫ぶと雖も、力弱く寄り付くを得ず。終に押し引き、掴み出だされたり。

已に仙彌塚より押し落さる。時に菊地茂氏來り、コレ何等の處爲か、今日こそ菊地茂、仙彌の代人となりて此大暴虐を糾さんと叫ぶ。警部等耳を掩ふて逃けさる。代つて人足來り、屋根に登り、棟よりめくる。小なる仙彌の屋根、忽ち黒き棒と化す。又忽ち押し倒す。又忽ち材木其他は、船にて西方に運べり。

○大なる困難にはいよく大なる幸の材料のあるあり。重病ければ醫師研究材料多し。借金多ければ子孫の難儀多きほどに、研究材料多し。衣食盡きて惰眠を貪るものなし。火災水害風災震雷及強盜に直接して、憤闘心を起さざるなし。現世の火災水災風害は皆人造多し、憤闘の機會と材料の豊富なる、凡そ此類。

○君主專制は汽車の如し。人民もしレールの上に居らば、殺さるべし。立憲政治も汽車の如し。然れどもレールの上に人居ると云ふ事を告ぐれば、汽車の止るの規定あり。然るに古への聖人は、汽車の如くなりとも人を殺さず、必ず救ひの網を汽車に設けたり。今は之に反して、人を汽車に殺す事を自業とし、又自得とす。今の法律は矢玉の如し、遮らざれば必ず人を射殺す。民聲叫べ。

○小兒相争ふて石を擲つ、ガラスを破り瓦に疵く、以て他人の迷惑を顧みず。法律家之に似たり。法のために人民あり、人民は的の如し。法律は矢の如し。法律は彈の如し、人民鳥獸の如し。但し命令の力は法律より強くして、訓示の力は命令より強し。今の政治は、訓示を以て憲法法律の上に置きけり。

○美人の鼻の高きは、一二分にて人目に映す、形の見易き凡そ此くの如し。人心の高下に至りては、百尺千尺の大差ありとも、肉眼に見へざれば、此高下優劣醜美を判別する、常に難し。愚人よりせば到底分別し得ず。

○淺間より富士山四千二百九十尺高し、新高山は更に一千八百八十尺高し。ひまらやは——而も地球上の高下は形に見る。神の高き、人心の高き尊きは、形に見る、難し。故に人をして解し易からしめず、其愚なるものは終に神なしとまで云ふに至る。可憐かな。

○酒造家あり、其主人は雇人のために香料を別樽に充てたり、其酒十石あり、雇人は常に之を呑むを樂みとす。然るに雇人は香料の減ぜんを慮りて、やはり主人の貯へる酒をぬすみて呑めり、以てしらぬ顔せり。主人來る、香料を見るに減じ少し。與へしものをも、盗心ありて偽りて呑まず、ますく他の樽の酒を呑む。此くては到底天國に到るべからざるなり。天國は與へられし酒の如し。然るに尙謙遜を飾り、制度節約を外に飾りて、他樽の酒を盗み呑む。いかに酒に酔ふも眞の快樂にあらず、盗の快樂なり。

四十二年八月一日、谷中竹澤釣藏方にて書す。

◎四十二年八月四日。海老瀬村松本英一氏に泊す。同五日朝、同家のうらの別業座敷に至る。老母曰く、『先きの座敷は寒し、非常に寒かりし、亡老人は此寒に實に困りました。』と、『表の座敷は客間なり、客間に起臥するを得ず、忍んで居たけれども堪へ難く、此春英一にたのみて、此暖い方に引越しました。』と。習慣の怖るべき此くの如し、客のために主人不自由を忍んで、寒き處に残年八十四才に及んで死す。此固陋な

る、是れ學問の弊、可怖々々。此家宅の周圍は高き乾燥地にして、樹林澤をめぐり谷を隔て、風情あり。明月あり、納涼によし、宅廣く光暖に、冬寒からず、外觀よりせば寒暑に居常に適し、人は見てうらやましとす、而して其内容に入りてきけば此不便あり。是はたとへ謙退謹慎の風俗に出でたりとするも、一は其形の弊に流れて、眞理を没却せるの甚しきものならん。

之を美德とせば最上の美德なり。之れを弊の徳とせば、安からざる處多し、考ふべきなり。汝を慎みて他を愛するの良心とせば、最上の美德なり。造りと形とせば、眞理を去る甚だ遠し。夫れ人生は自由を尊ぶべし、己れを枉げて人を敬す、茲に至つて極なり。汝の自由を害せざる限りを、眞の自由とは云ふべきなり。汝の自由を少々けつりて人の自由を愛するは、法律の精神なりといへども、甚しく自家の自由を害する事松本氏の如きも、やはり其形に傾けるもの、如し。愛や敬や、嗚呼又難ひかな。松本氏秋蠶を飼育す。談話中、凡そ二十日間にて上簇（まぶし上りと云ふ）、三日にて繭となり、六日目にてさなぎとなり、此時うぢとなり蝶となるの區別立てり。うぢとなるは疵あり、蝶となるは疵なし、まゆをなめて這ひ出るのは二十一日目なり、蝶となりて出で、直に交尾す。其日に種を産す、凡そ三日間にて死す、蝶は只交尾のために生るゝなり、卵を産むために生るゝなり。

○古人曰く、口より入るは人に害なしと。但し蛹のうぢとなるは、食物のために病ひを得るならんかと云ふ。然れども食物のためならば、うぢにも化するを得ざるべし。其他いろいろの病ひあり、蠶中に倒れるのが多い。

繭中にて死して黒く腐るあり、さなぎとなるありて、うぢとなり蝶となる。蠶は動物中白血の種類なり、白血動物は夜食す。うぢと化し、蝶と化す。うぢは捨てられ、蝶は生命永し、研究すべし。

○キリストの言葉に、口より入る云々は、問ふものに付ての答なり。問ふものあまりに愚なる痴なる無必用の問に對して、最も近き分り易き答へをなせしものなり。夫れ口より入るものは人に害なしと云ひしなり。未だ之目より入るもの耳より入るものは害なしとは云はざるなり。

○言葉を咎めて理屈を立つるなかれ、人の言葉を以て天理を妨ぐるなかれ。

○八月五日。埼玉縣北埼玉郡利島村の飯積坪野中清八氏方に泊し、股引襦袢の洗濯をして貰ふ。

○八月六日。蠶種風穴談あり。人にしてもし此風穴に居て老ひたらんにはと。風穴は春蠶種の秋蠶に至る迄の間保存し得るものなればなり（此名を風穴と云ふ）。予等天の風穴に半世を老ひて、後出で、飼育せらるゝ、世人之を呼んで晩成の人と云ふ。世人の多くは幼にして學ばず、老ひて悔ゆ、其性の凡庸たるを證せるものなり。若きときは春の如し、人として春夏をしらざるは、風穴に塞がれたるなり。然れども聖人は蟲にあらず、けして此風穴に居らず。孔子十有五にして學に志し、釋迦十九歳にして山に入り、キリスト三十歳にして教を傳ふ、天賦の天才は人造の風穴に入れられざる、此くの如し。

○教に曰く、終りまで遂ぐるものは天の父の報を得んと。夫れ然り、人もし終りまで欺かるゝものは、終りまでさとらず。蠶毒水害地方人民、已に參拾年欺かれて尙之を覺るの智慧なし、之を何にたとへん。人にして無感

覺のものは、何を説くも耳に入らず、目にも入らず、目なき耳なきものには、いかに説くも無益なるが如し。然れども説くもの教るものは、益ある處のみに向つて説くにあらず。神は益する處を選んで照らさず。益ある處のみ雨降らず、瓦石の上河原の上にも雨降り、不毛沙漠にも日を照らし賜ふなり。神の目、神の心は、是れ等の小區別によりて愛憎褒貶を異にせず、只一帯に廣く愛育せり。其内に只神の御心になほ天地の行動と働きを同ふせるもの、靈のみ、天にのほりて天の大いなる愛をうく。人の肉死して肉と共に亡ぶるは、肉の健康中存在中、靈先づ死するなり。死せる靈や、肉死せば則ち肉と共に死し、又は肉より前に死す。靈とは何ぞ。神と同體の性を云ふ。靈の後に傳はるもの、内凡そ二様に大別す、一は神靈にして永久の生命たり、二は人に傳へて永遠にもしくは數年數月の後に存す。前者は聖及善者の生命たり、後者は善惡の感未だ神に感ぜざるものにて、只人類の感覺に傳はるものなり。人の聖は此二者を兼ね。

終りまで人に忍ぶ能はざるを忍ぶもの、即ち天地と生命を同ふするものにて、其言行天地に似て其實行日月の如き、天に於ては畢りなきもの、人におひても終りなきものなり、神の如きものなり。

愛は其行爲の和合力なり、人にして容易く及ばざる處なり。然れども人としては神の行動なきものなし、必ず神の如き行爲あるものなり。愚夫愚婦も亦神の如く、神と行動を同ふせるものあり。然れども時としては行ふのみ、又愛の切なる點に行ふのみ。時としては何か感ずるありて俄に人を救ふなり。之れ惡人も亦且此善事を行ふなり。愛の切なるとは、汝の子を愛するの切なる時、又戀愛は男女のみにあらず、女女に戀愛し、男男に

戀愛す、戀愛の切なる、妻子父母をすて、此人のために死す、此情やもとより金玉を以て買ふべきにあらず、偏に神と其心を同體にせし時なり。人にして此心なきものはなし、而も何故に此心を常に間斷なく進行し得ざるかにあり。只聖は常に之を行ふ、天地の循環の止まらざるが如し。他は四期の一期、或は數月、或は一日、或は一時、或は數回、或は一回に過ぎず。善事已に然り惡事も亦然り、惡事必ず繼續せず、年に四期に二期、或は數月、或は數日、或は一時、或は一瞬時、俄然惡意の發するとき、又は深く謀り思ふて漸々之を實行するとき、千差萬別ありといへども、徹頭徹尾終生惡を遂行するものは、天下又一人のあるなし。人は云ふ、惡の蔓延は速にして、善は遅く且迂なりと。然りといへども惡は短命にして、善の壽は長し。

○人情に弱點あり、之を免かるゝ難し。一時善を爲す事をしりて、之を數時に行ふを得ず。四面の法あり、一角に向つて善事を行つて、三方之を遂げず、或は心付かず、或は忘るゝなり。是れ性の傾きなり、性の偏なり、性の癖なり。其一方に心を用ゆるの情誼汝の心に適ふ、適ふものに偏す、此偏する方は多情なり多熱なり、此一方は善なり知なり聖なり、而も他の三方三面を忘れて、或は三面に不義を爲し、三面に無禮を遂げ、或は三面のものを奪ひ盗みても此一方に全力を注ぎ、此一方には慈に恵に愛に仁に何一つ欠ぐるなし。實に此一方には賢たり、聖たり神たり、他の三面に對する瓦石の如く、此偏重偏輕が人生普通の弱點、免かるゝ難し。人生もし此弊に陥らず、ますゝ正義に進んで片時忘るなきを以て、即ち神に近づくの良道たりとす。

然るに何等心に正敷研究を爲さず、謹んで其端緒を需むるの精神もなくして、妄りに神はなきものなりと。抑

是何等の愚、何を以て之を譬へん、愚なる盲人の、萬物の見へざるを以て、萬物なしと云ふが如し。盲人尙心あり、心あれば心眼あり、目なしといへどもよくものを見る。是れ他あらず、見んと欲するが故なり。見んと欲せば盲人尙よく物を見る、甚敷は盲人にして目ある人よりはよく物を見るものすらあり。況んや目ありて萬物見へずと云はゞ如何。神を見んと欲せば、見んと欲すべし、欲せずして、神見へず神なしと云ふべからず。

○それ錢を得んと欲せば、先づ他人に雇はれよ。一日の報を得ん、即ち一日働きて一日の報を得て、其賃錢の顔を見るなり。未だ雇はれず働かず、一事一物をなさずして、報を得んとするものはなし。働かずして錢を見んとするものは、盗のみ、税吏のみ。盗や税吏や、尙且相當の勞あり、心身を苦めり。盗も税吏も、心身を苦勞して漸く錢を奪ふなり。かゝる小學生も尙よく知る處の見易き道理の存せるあり、而して錢よりも尊き、物よりも尊き、人よりも尊き天の神を見んと欲せば、其方面に向けて見ん事を盡さざるべからず。心を盡し力を盡し身を盡し、身を殺して見んと欲せば、必ず神を見るなり、又見ざらんとするも得べからざるなり。凡そ天地の中、人生の需め盡さずして至るものなし、盡さずして至るものは神の愛のみ。人盡さずと雖も、神の愛の至らざるなし。故に人は盡さずとも、神は見るなり。人は盡さずとも神見ゆべしと思はゞ、非常の誤解なり。

○夫れ大なる芭蕉の實は南洋の諸島、人なき處にもあり、人の需求のありとなきとに拘らず、實を結ぶものは先づ結べり、皆豫めに備へり。たとへば用意深き婦人、夫のために夫の慰好物を藏する如し。夫の需めあれば出して其用に充つ、もしもとめざれば空く藏めて存するのみ、もとめざるを恨みとはせざるなり。神は南洋無

人の孤島に芭蕉の實をむすばせて、人類其他のもとめを待つ、もとむるもの、ありとなきとに拘らず、もとむるものなしとて恨みざるなり。人生其實を食ふ事をしりて、未だ其實のむすぶ所以の大なる發達大なる愛の限りなきをしらず、そのたのしき心をば、物質其物の上のみ見て、其實のむすびたるを見付けては、之を人に贈る。人之を口に入れて、只甘しくと云ふのみ、生命の保安を以て樂みとするの所以をさぐらず、心付きもせず、ウカ／＼食つては徒らに其味の佳なると否とを論ずるのみ。さて其佳なると否らざるも、亦汝の好みの深淺にあるのみ、甘きまづきは汝の口に適するの厚薄淺深のみ。甘いまづいのと、其物質を賞罰して其物の造られる神の御心には心付かず。

○神は飲食よりも、尙人類の目を喜ばせ耳を喜ばせ、樂しましめ、鼻をも喜ばせ樂しませ、肉をよろこばせ、骨をよろこばせ、皮をよろこばせ、毛をよろこばせ、爪をよろこばせ、殆んど人をして喜びたのしましめざるはなし。神の愛や何を以てたとへん、何を以て言盡さん。先づ身體をうけて、天然の需用によりて今日ある所以なり。人生弱點に妨げられて其實の山にのほるなきは何の心ぞや。茲に父母より財産を子孫に傳ふるを以て、子孫易しと。嗚呼何たる愚。其父母は何のために此世に生れしか、其父母は何を捕へ何をあつめ何をたくはへて汝の子孫に傳へしか。父母のものは皆天のものにあらざるはなし、一物といへども其神より父母に與へ、其子孫其父母より得たるに過ぎず、恰も汝の身體を父母よりうけたる如く思へると同じ。汝の父母の身體は又其父母よりうけたり。即ちはじめ神の造らせ賜ふものなりとは、古來人のしる處。古來人のしる處にして今にし

て尙之をさとらず、愚なるかな。

○要するに起臥飲食交際、皆神に逢ふ如し。感謝すべし。感謝の外天地に報ひ奉るの道なし、感謝なる哉。或は曰く、人我を欺くと。人の我を欺くは、我未だ神に至らざればなり、我神の如くなれば、欺くに道なし、欺かるゝは我れの足らざるなり。其足らざるは、智の足らざるにあらず、神に近付く熱心の足らざるなり。早く神と一體、神となれ、神とならん、神となり遂げ得んと欲する熱誠火の如く、精神水の如く、其公平や風の如く空氣の如くして、誠に造次怠らず顛沛失ふなければ、誰れか又我を欺かん。我等が從來他人に欺かれたりと思ふことしばしなるも、是即ち油断怠りによるのみ。

○夫れ山をうがつものはあれども、山を失ふものなし。海を埋めんものありとも、其海を失ふものなし。人の心は山の如くせよ海の如くせよ。人は別に人を造るなけれ。造るは萬物皆神に委すべし。人は只神の造れるものを有無相補ひ、増減人の需めに易からしむるのみ。造るべからず、造りて益なし。恰も花をつくり鳥獸を造りて、何の用か。人の形を造るも無益なり、山水を造るも無益なり。是等の用は他の遠方の國よりの花鳥獸畜人物山水草木竹樹の、圖として見る丈の必用のみ、是を美術とし慰好物とせば殆んど誤るなり。國の地圖を見るに、風致とし美術として見れば、實用を誤るなり。

○夫れ生きたる人あり、生きたる花あり、生きたる美人あり、生きたる鳥獸あり、何を苦んで造りものして形に形を造りて、其形をたのしまんや。性と眞とをすて、物と質に傾けば即ち此のごとし。茲に一人の畫工あり。其妻美人なり。夫其妻の像を畫がきて常に之をながめたのしめり。年已に久し。而して畫は老ひずして年をへて美人なり、而して肉の妻は老ひたり。茲に畫工は妻を疎にしたり。時に家貧困に陥りて、畫を賣らざるを得ず。畫を愛するの切なる、妻の若き色濃き髪黒き時代の情愛を放し去るを得ず、終に生きたる妻を下女奉公に出し、徒らに畫を携へて、夫婦暫らく御別れ。夫の畫工は旅立ちし、而して此夫婦再會の期に至らずして、妻は老ひて死したり。而して後、夫の畫工は少し斗りの金錢をのこして、妻に逢はんとして家に歸る。歸るときは已に妻は死したり。残りしは只死畫一幅と少しの金錢のみ。後又貧に陥りたり。而も尙此畫を賣ること能はず、畫工も老ひて又た死す。のこりしものは一幅の畫のみ、眞理の本用をしらざるものは、此類の誤り多し。

○秋山に客に行けば、茸の外に紅葉白雲あり、又鹿の聲あり、天色天籟は御馳走の茸よりも盛なり。夏海に行くも亦此類なり。春夏秋冬、野外に行くも皆處として天恵天與あり、神様より賜る御馳走は多大にして限りなきものなり。而て之を大食するものは肥えふとり且つ永遠の生命となり、而も此好味甘美麗を厭ふて食せず、食するも、少く食せば、短命なり、少しも食はざるものは即ち死す。神の賞罰は此馳走を食ふと食はざるにあり。

○土地あり、耕さざるは天の喜ばざるところなり。人民あり、人道を耕さざれば天人ともに憂とす。加之土地を荒し土地に毒を流し作物を殺し人民の食を失はしめるは、更に天地人類のために奸惡の罪人とす。人を教るに

正道を以てせず、聖賢を誹り、現在の正人を虐けるは、又天地人生の容れざる罪人とす。

○人の階級は、神秘を自覺し得るの多少に在り。神秘の一ヶ條を得る、一つの階段を登るなり。二つを得れば二階段を登るなり。三四五六、順を追ひ自得し盡し實行し盡して、而て後聖たり。顔回、孔子を歎賞して曰く、天は階梯して登るべからずと。けだし人の及ばざるを云ふなり。聖にして初めて神をしる、而も未だ行ふ能はざるなり。顔回にして聖をしる、而もこれを行はずして早く死せり。蓋し顔回の行は無形にして見へるものなし、故に未だ行はざるに似たり。

○萬物皆我師。

人にして人に問ふは勿論なり。萬象皆我師なり、其内最近き師は動物にあり、鳥獸魚貝虫類みな近き我教師なり、謹で其教をうけざるべからず、況んや人たるもの、聖人の教におけるをや、恐れ尊びて其教をうけざるべからず。希くば、出來得べくんば、神を尊ぶ事なり、いかなれば、神は萬物萬性の父なればなり、萬象萬態の母なればなり。神や多くの天地をうみ賜へり。神の家庭は大いなり、溫和なり、仁愛なり。神は教て少しも倦まざるなり。神は愚なるもの、かたわなるものにも能く教るなり。人たるもの、さとりては又早く神の家庭教育にいりて、ゆるやかに育つたのしきを知れや。

○諺に曰く、近づく神に罰當る。予の曰く神に近づけば賞あり、神は賞罰を明にす、而して罰は神の當てるにあらで、身自ら罰するにあらざるなし。天地開けて已來、神は人に罰を當てたるとなし、人愚にして圖らざる不幸

あれば、或は我良心の安からざるを、之を神の罰なりと云ふ。且つ可憐、天の賞は、賞をうけて其人賞をうけたるを知らず、賞の功をば直に汝の力なり、汝自身の働きの結果なりと思ひて、神の力によりて得たる賞なりとは思ひ及ばざるなり。故に古來、神に近づくべからず、近づけば罰ありなぞと迄に誤りたり。思はざるの甚しきなり。又曰く、鬼神を敬して之を遠ざく智と云ふべしとは、立派な經書にあり、今日に至るも此語弊を學んで、或は神なるものはなしとまでに明言するものあり。東西聖人の言といへども過ちなしとせず、聖人も亦人なればなり。然れども神は過ちなし、學ぶにしかず。已に神を師とす。神の嚴ならざるは、師とするに足らず。神の嚴明なるを尊ぶ、之に適合せざる點あれば、必ず之に對する反響及賞罰褒貶を免ぬかれず。人生或は己れによきを賞と名づけ、悪きを罰と名く、人の付けたる名を賞罰とす、その感覺より名づけたるのみ。神は人に對し罰なし賞なし、人に喜びあるを人は賞とし、人に害を下だすを人は罰とす。罰を願へば忽ち至る、賞を願へば忽ち至る。信は賞あり、信ぜざれば罰あり。信ぜずして神に近づく、必ず罰あり。信するの益多くして賞多し。只此眞理信仰を解せざれば、終生神をいのるも一毫の賞なし。

心だに誠の道に適ひなば、いのらずとも、神や守らん。

此うたは誠に真にかなへり。乍去是れ人生の教にあらず。人生いのらねば遠くなり、君子三年禮をせざれば禮必ず廢れん、三年樂をせざれば樂必ず崩れん。神はいのるべし、人は信愛すべし。神はいのるに益あり、人は信するに益あり。祈らざれば發せず、信せざれば用を得ず。

○我六ヶ年に涉りて谷中村に居る、未だ何事をも得る處なきに似たり。然れども之れは大なる誤りなり。嗚呼、此谷中の趣味たるや、人民は太古の人の如し、又小兒の如し、呑み且つ食へば足る。其呑むや、我が家の井水あり、汲みて呑む。食ふや、耕して食す、誠に天然の樂なり。然るに何事ぞ、此自由を妨げ此天富の富貴を害するや。甚しきは其耕地と家宅を奪ふ、其何んの故たるを知らず。予は近日此村の内に、一戸特に家庭の凡庸ならざるものあるを見たり、滿五年餘にしてはじめて此目出度き家庭の、正敷穩に従順に確定せるを見たり。其人の名は染宮與三郎と云ふ。其一家の風儀を見て實に感謝に不堪。其他間明田兩家、水野兩家、竹澤三家、宮内一家、皆家庭の相當なるを見しも、獨り染宮與三郎氏の一家族に至りては、到底我々の遠く及ばざるかとおもふ處多し。かゝる目の前により教ありながら、今日まで茲に心付かざりしは愚なり、目なきなり、かゝる愚を以て神に近付ん事の思ひもよらぬ事かと思ふほどなり。染宮氏の家は荒れたる小屋なり。予が文章も亦未だ開かざる野外の如し。

○染宮與三郎氏はことし五十歳、家族は妻女、長女、長男、二女、二男、三男。從來與三郎氏は別に秀たる事もなし。只三四年前、四五才の今の次男が、予の通行するを見るや、家より走り出で、よく禮儀をなせり。一日此小兒、予を見る遅きために、あわてゝ走り出で、顛倒するを見たるなり。此くの如き事屢々なり。與三郎氏は只集會に缺席せず、同志をも誘導して來る、其來るも人より早し、其日にいかなる用ありとも必ず來る、けして缺席せし事とはなし。予が出席せるは時々なり、其時は此人必ず缺席なかりしと記憶す。其他は別に大

に記するほどの事なしと覺えしは今更誤りなるを知る。妻女は溫良寡言善しあしともに見へざりしが、今を去る六年前即ち三十七年の秋のころ、谷中村債と云ふもの五萬圓ありと誣ひられて居る村民の一部は、此金五萬圓を縣廳に献金せんとす。献金して、之に倍する金圓を以て堤防を拵へて貰はんとする意見の人々あり、已に其願書に調印をすゝめ取りつゝあり、與三郎已に之に調印す。栃木縣は此時已に谷中村買収に着手す。當時同村の有志は曰く、是は村債にあらす安生順四郎の借金なり、此金を献金せんとせば、安生自身献金すべしと。藤岡町の人森鷗村翁は曰く、五萬圓を献金して村民一方銀行に五萬圓を引負ふは、合十萬圓の債務を負ふなりと。人民此計算に驚き、青年各所に集合す。時に與三郎氏の調印は已に献金派に取られたりとの噂さ。青年等乃ち與三郎氏に至り、村債名稱は曖昧なり、献金は不條理なりと告ぐ。與三郎氏妻驚きて、取消しを良人にすすめ、直に調印取消を申込めり。與三郎氏の順良なる、其妻の分別者なる、此一事にても知るべし。人過ちなしとせず、只改むるの速かなる、夫婦共に常人に越えたり。夫れより村中の潰滅、日露交戦、堤防破壊、千難萬艱、四ヶ年を経て四十年に至り、谷中村殘留十九戸に對して家屋破壊の當時も、無抵抗に穩かに亂暴破壊に争はざりき、此邊は只他の正義派と別に異なる處なし。爾來又集會の節は、其前後に奔走の勞を取られつゝありしは、皆同志殘留民の深く感心して居る處なり。

○尙二ヶ年を経て四十二年六月、長女他人の雇となりて働き中、病氣付、古河町の親戚たる母の生家に歸り、厄介となれり。此始末を島田宗三氏より東京に知らせたれば、予歸國して見舞ひたり。幸少しくよく、尙十日斗

りを経て訪ふ。全快す。予別れて歸る。此病後の娘、あとより予を追ひ來る。予止まるや、娘はマッチ一箇を手にしてあはて、來り、予に呈す。是予の置き忘れたるを拾ひ取りて、驅けて來たるものなり。マッチ一つを此の鄭重。予此時思ふ、是れ家庭の秀れたるものなりと、其時漸く竊に心に賞したり。尙數日を経て予與三郎氏を谷中の假小屋に訪ふ。不在。長男が漁し得たる大なる鮒一疋を、おしげなく切りさき煮て出す。予は大に其の速かなるに服し、終に之を包みて貰つて歸り、島田熊吉氏の家に來り泊して、二人の小兒と共に食せり。其後亦與三郎氏を假小屋に訪ふ。予は又た杖を忘る。惠下野まで送らる、船子棹取りは例の長女なり。長女曰く、予の杖を忘れたるを立戻りて持參せんと。時に天氣かきくもり雨至らんとす。予は早く急げ野に送れよと云ふ。長女は予の意にまかせて、船を佐山梅吉氏の堤防に付けたり。已に雨は來れり。長女は別れ歸る。予は佐山にて雨間を待ちたり。佐山氏の長女俄かに假小屋より飛出して行かんとす。予何れに行くやと問ふ。答へに、母を迎へに行くなりと。予が曰く、迎に行くほどの急にあらずと、強て止めたり。已にして佐山氏の妻女到る。雨又來る。予聊か病あり、此午前間田桑次郎氏にて衣類二枚をかりて來たるほどなり。已にして佐山夫婦來り、已に雨止みたれば又島田榮藏氏を訪ふ。此間二十町あり、途に又雨に逢ふ。身體熱を發し、厄介となり、三泊。然るに予が島田氏に至るの翌日、與三郎氏朝早く來る。之れは予が忘れたる杖一本を持參せるものなり。此等善行なんでもない普通の事とするか。與三郎氏目に一丁字なし、而も此行あり、細に注意して見れば、中々に家庭の凡ならざるは自然に掩ふべからず。是より二十日斗り以前、即ち與三郎氏の長女は大病に

てありしとき、病人は古河町に厄介中、與三郎夫婦は惡魔に二回試みられたり。惡魔曰く、谷中殘留民茂呂松右衛門父子は金二百圓を縣より貰つて移轉せり、足下早く松右衛門の如くせば、現在の貧苦は救へんと。惡魔は與三郎の妻の弟をして、其姉たる與三郎妻を説かしめんとす。妻女は弟より此事を聽き、答へて曰く、宮内は何故に予に面會するを怖るゝか、我が弟をたのみて我を窺ふ、其意甚だ暗らしとして、之をしりぞく。惡魔退く。其より數日の後又同姓に染宮太三郎と云ふ人あり、其母と途に逢ふ。太三郎は富豪の人なり。太三郎の母曰く、予等の移住せる宅地を見よと。與三郎の妻、疾くに見たりと答ふ。老婆曰く、さればうらやましくはないか。又曰く、汝等の難儀はさこそ、我等の方に移り來れ、我家我宅は廣し、樹あり、竹あり畑あり、美ましくはないか。與三郎の妻答へて曰く、人の富みはうらやましくならず、我等は好んで正しく貧苦に居るもの、我等夫婦は人の害となることはせざるなりと答へたり。惡魔又退く。實に與三郎氏はよき妻と子供を持てり。此くの如き家庭の美しさはあり、而も人の見るものなし。我れ谷中に居る五ヶ年餘、漸く此美事善行の備はりたる人の家庭を見たり、何んぞ其見る事の遅きや。關係遠き世の人々の谷中に來り見ざるも又一理あり、予は此の膝下此くの如き人のあるを今迄之を見出さず、愚眼なるかな、予は竊に之を恥ぢ、今俄に之を紹介せん。因に曰く、孟子は之を笑つて曰く、目に秋毫の末を見て興薪の大なるも見へざるかと。己れの身は虱蚤に喰はるゝすら大騒ぎなり、天下の人民貧に陥りつゝあり、之が王の目に映せずとせば、王は目なきものなりと。予は此與三郎氏一家庭の漸く美しき事を今にして見たり。與三郎氏一家は天國の人たるを見たり。世人天國々々

と云ふ、而も天國は現在に見るべからざりしと、是れ大なる誤りなり。夫れ自ら現在に見へすとすて、は見へざるなり。見へざるにあらず、見ざるなり。今の世の人は、耳はますます聾せり、目はますますくらし。今の世の人はよい事を見ず聴かざらんとす。美事善行の前には目をとづ。諺に曰く、耳を掩ふて鈴を盗むと。予も亦久しく目ありて目なきにひとし。與三郎氏夫婦の家庭は天國に入りたる人たり、已に此人々ありて、五ヶ年其徳を發見せざりしは、予は目なし耳なし、愚人中の愚人と云ふべきのみ。

以上は近日予が接する染宮與三郎氏に付ての感なり、以てありのまゝを。

○尙殘留民十九戸については、各家の長短一つならざるべし、今より更に注意して各戸の美事善行を顯はさんとする。いかなれば、谷中人民は世の誤解甚だし。世人は曰く、人民は慾深きなり、愚かなりなど、例の流言家の惡口のみ社會に傳ばんして、谷中人民の精神苦勞及び其の公私に對する道義は、いかなるものかを知るものなし。染宮與三郎氏の一家は皆目に一丁字なしといへども、尙以上のべたる如し。谷中人民の智識は、極めて少し。財産は價格十が一にも當らざる相場にて奪はれたり。世の政治家宗教家及び義人仁愛の士よ、何故に早く來り、此窮困を救はざるか。多端のためにと云はゞ可憐次第ならずや。

○可笑、田中正造、明治三十七年七月、單衣一枚にて谷中村に來る。人民曰く、此人はむかしは議員なれども、今は生活に窮して此村に來るなりと。秋風立ち冷氣來る、正造衣を借りて着る。返辨を促さる、達吉の母より促さる。之を返し、神原勘之壘の母より借着す。又之れも促されて返し、加藤某の母より借着す、又之れをも促されて返す。冬にうつる。本島剛の母より借着して、返へさす。古河町惡戸新田針谷の妻より借り着、羽織返さず。此二品、行方を失へり。谷中は衣類羽織外套の行方を失ふ事多し、而も其場所の記憶なし。此の如き始末なれば、生活のたれに來りたりと云ふも、亦一理ありと云ふべし。但し奸黨はよく此弱點に乗じたり。

○相場と云ふ事に付、試に時勢の一を論ぜり。多忙中の亂文殆んど讀みあしからん。

統計表で見ると、已往の甲乙は分明であるけれども、其時の勢は、記憶にもなくして知られず。茲に六尺の堀あり、之を飛越へんとせば、先づ其態度はいかにするか、五六尺の前より態度を造るなり、統計表の上に見ると大に異なるのである、勢は俄に造るものにあらざればなり。一人で碁を圍むは、統計表の如くするを得。對手あれば此間互に勢を生ぜん、掛引あり、且つ權略を要せり、千狀萬態臨機應變なり。一人の戦は統計の如し、對敵なれば時勢を造る方の勝ちとなる(時勢を造るほどの勢力を要す)。人の造れる時勢に乗ずるは、時勢を知るものに非ず、自ら造る時勢にあらざれば、時勢を知れりとは云へず。時勢を造るは、平地に浪を起す如き人々の力なり、精神不拔大膽剛毅忍耐機敏察知感知先見心志決斷と果斷とに富みて、泰山崩るゝも驚かず。誠心誠意其目的と死生を共にし、常に死生を豫算の外にせるものにあらざれば能はざるなり。加之、以上の外更に難關の門あり、何んぞや、困苦貧苦節義言行一致主義貫徹に對する艱難が、貧苦と並び合せたる經驗の、數十百回に達して、百戰百敗、其研磨に得たる自得力堅忍となりて、夫れより發動せる良知良能の附合せるにあらざれば、以て平地に浪を起し雲を起し雨を降し、無形の内鬼神感泣、時勢を造るの人とは云へず。時勢を

造る達識勇敢の力あるにあらざれば、時勢に勝つ能はず。時勢に勝つ能はざれば、勝敗を論するに足らず。以上は時勢論の一。

○孟子の兵法に、天の時地の利人の和と云ふあり。今此語を假りたり。然れども以上は人爲の時勢に過ぎず、天の時とは此外にあり。天の時は讀んで字の如し、むかし佛のナポレオンが露に破れ、三十八年八月の大暑に露軍南滿に破れたるは、天の時に合はざるを以てせるの失多し。天の時を云ふ、誠に故あるなり。地の利とは、旅順攻伐日本軍の苦戦は、一步必ず一死、萬歩必ず萬死して漸く敵を降せり。コレ地の不利と戦つて勝てり。是れ他にあらず、當時日本未だ人の和を失はざればなり。露は之に反し、かゝる天嶮にありつゝ、人の和日本に劣りたり、故に破る、是等は皆衆の解する處なり。然り、然れども人の和は永久の和にあらざれば、愈々危し。多くは時に和するを見て、直に人の和と云ふ。永久の和は更に大いなり、堅牢なり。永久とは社會皆人の人たる本義を修め、國民の上下貴賤なく、強弱貧富なく、互に克く信するにあり。又公平無慾、誠の信愛にあり。愛は義を生み、義は信を生み、信は力を生みて、其力の合する、之を永久の人和と云ふ。茲に人あり、愛より生ずる信と義とに満ち、而も其肉躍り骨鳴るの兵卒萬を以てせるに至らんか、三十八年の役旅順は愚か、更に幾倍の敵城と雖も必ず怖れざるなり。ソモ、怖るゝは、彼れに劣る所以なり。彼は山に嶮による、我は信に義による。劣るも優るも精神の一つのみ。今ま三十八年の旅順の功を見るに、大體一朝の勇決と國體と命令とに服従せし一致の、僅に優る處ありて然るのみ。只強弱の争にして、日本未だ信義相愛一致の露に勝てり

杯とは結論する能はざるなり。神を敬せよ、人を愛せよ、神を愛せよ、人を敬せよ。果して之を用ひば百戰百勝の事疑ひなし、之を神戰と云ふ。士農工商の道皆然らざるなし。文武學藝技術又皆同じ。神の道、人の道、皆力を生ずるに非ざれば道とするに足らず。發動の力は信より重きはなし。愛の力は神の如し、信の力は氣力の如し。氣力、信なき者、何の力あらん。空信は危うし。空信にして天人の道を踏まんとせば、夢の如く、醉へるもの、如くして、暗夜に橋を渡るが如し、橋に穴あらば落ちん。信なきもの信薄きものは、又油斷多し。信なく信薄きもの、油斷は、多く衣服を着飾れば風邪を病む憂なしと云ふに似たり。

○衣服を厚く着たりとて、風引かざるにあらず。又たとへ薄着せりとて、其人必ず風引するものにあらず。風は油斷者に多し。氣滿ちたる薄衣の義人に、風引く事稀れなり。信仰油斷なければ、惡魔寄り附かず、もし油斷せば忽ち風引くなり、病むなり。希くは人生の根本義を確守せよ。

○君子危きに近付ずとは常識なり。君子も危きに近くの變則あり、權道とも云ふ。權は神より出づ。神行けと云はば行く、來れと云へば來るのみ、危きの完全のとは人心の私見のみ。然れども常識の一方よりして、普通人類の行動を云はゞ、君子危きに近寄らずと云ふなり。人好んで危きに近付くの愚なし、眞理に近付くの用あれば近付くのみ、安危又眼中になし。

○むかしの川柳に

芳原があかるくなれば、家は暗み。

是れ一方の眞理なり。又曰く、虎穴に入らざれば虎子を得ずと。人漸く芳原の眞理に達して一つの人情に通ずるとするも、他方面の人情に暗らくなり、早晚得失償はざるを云ふなり。得失の償はざるを面白く誠めたるなり。

○田舎の正直な少量な相場師が、悪魔の群に出入し、機計猾獪の輩と争ふは、狼と羊との如し。若し羊にして狼の股の肉を食取る事ありとせんも、狼は忽ち羊の頭より腹足渾ての肉を食取るべし、結局狼に食はれざれば止まず。猛きものと溫柔なるものと交らば、溫柔は常に猛きものに虐けらる、之れ常の事、何人もしる處なり、然れども予は更にのべん。

以上は獸と獸とにあり、人は然らず。人と獸と比せば、人よく虎に乗り獅子を玩べり、之は獸と人との區別なり。人に智識ありてよりは、獸に食物を與ふ。獸の慾は食のみ、人の慾は名譽にあり、錢にあり。人と獸と、慾の方面目的種類を異にせり。獸の欲する處、人之を欲せざるに非ざれども、人はよく之を獸に讓るの智恵ありて之を獸に與ふ、故に獸は他に望みなくなりて穩かなり。猛獸の猛獸たる所以は、食を需むるにあるのみ、食を争ふにあるのみ、其食常に勞せずして得らる、獸は更に猛るの必用なし、終に猛るを忘れて穩かになり、性となり、且つ己れに食を賜ふ人を恩人とし、己れを愛するものには何事も身をまかするに至るなり、誠に人と獸との異なる所以なり。然り、人生の獸類を去る遠からざるものあり、獸より甚しきものあり、人即ち人を食ふ、天下滔々之れならん。人の猛きものは虎狼と毫も異ならず。人に羊の性あり、猫の性あり、馬あり鹿あり

り犬あり鼠あり。虎獅を玩ぶの勇者却て人に食はる。又虎獅を玩ぶを見物する人々も、人類同胞に食はる。今世人、虎獅の猛獸をしりつ、同胞の猛獸をしらず悟らず、近よりて嚙まる。人の猛獸は虎獅よりも怖しきこと幾百倍ぞ。假りに其力の多少輕重を比せば、殆んど人と神との如し、輕重量るべからず。獸の思慮渾て人に及ばざる、誠に神と人との差に似たり。人の神に及ばざるは、獸の人に及ばざるより遠し、いよく遠し、けして比すべき者なし。只獸は互に相食む、人亦互に相食む。從獸あり溫獸あり猛獸あり惡獸あり。人に溫良あり惡魔惡黨あり。溫良の士は溫良の士を會し、時勢の力を養ふて、猛獸性の惡毒心を退治すべし、又教諭して溫從に返らしむべし。只溫從は、猛と戰ふを不利とす。猛は強し、溫は弱し。只溫は眞理に強し。眞理の力は神力となり、天地の間に充塞す。猛力は腕力爪牙のみ、其小なる事、實に食慾の喧嘩、喰ひ合、嚙み合のみ。又猛力は小兒の徒らの如し、溫良の力は大人の如し、比するに相當の言葉なし。大人は神の如し、小人は猫の如し狼の如し、少しく力ありとするも、虎熊獅子の類のみ、されどもよく教ゆれば溫良と化するなり、恰も獅虎を玩ぶに似たり。然れども是等の慾は金にあり色にあり、此兩者を與へば忽ち從順となるか、否茲に於て人と獸とは異れり。獸は慾に充てば溫となり、人の猛は慾充てばますます猛、多々ますます不良性となる。茲に於て獸を養ふと人を養ふと異なれり。獸には食、人には神の道、人の人たる道を教へて、耳に充ち腦に充たしむるにあり。飽までも金と食物とを人に與へば、いよく惡魔を養ふに近し。困窮者にあらざる猛き人に、食物と金品とを與へて我れに近けんとせば、近くも一時の近付きのみ、一時の和合のみ、當座の人道人和のみ、

誠に一時の調和のみ。一時の人和は危険の最たり。永久の人和人道は、金と金品とより出づる事少し、否、絶對になし。永久は教へのみ、信仰のみ。故に曰く、宗教信仰なき人類は、其半は獸性の如し、猛獸性の如し。嗚呼、憐むべし愛すべし、一は學んで神に近し、一は知らずして虎狼の如し。一は人にして神となり、一は人にして獸に落つ、憐むべくして憐むべし。人は各汝の性を見て、早く本義に歸るの道をたどりて、有力なる天與の大精神を發起して、大々的信仰上の大快樂を以てせよ、此大々的大快樂を快樂とせよ。左方に行けば花山あり、右に行けば火山あり、火山にのほりて何の益あらん(學術上の必用は別として)。人生の、春は花の山に行き、夏は野に出で、秋は木の實を拾ふ。紅葉白雲を着て樂める山々を見れば、何んぞ自身が紅き白きを飾る要はなし。冬の日の雪も、又花よりも面白く見へるなるべし。神とともに樂める此無盡藏あり、月も雪も花も、實も我身も、皆神と共に樂しむ嬉しさのかぎりとは、とてもく筆にも心にもおもひ盡せず、言ひ盡せず、盡せぬほどが樂しむ事の限りなきを證すべし。此外に何を苦んで物を好み惜み貯へんとするか。貯ふるも亦自然ならばよろし、雪のつもる如し、花のちりたまる如し、日の溫素のたまる如く、月のうつる如くすべし。積るものは溶け、散るものは實となり、たまりてさめ、うつりてかはらず、見る事聞く事皆無盡の快のみ。人におるて愛の事、何ほど人を愛するると自家の愛心を減ずるにはあらで、愛せば愛するほどますます繁殖し、我心亦無盡藏なり。さて人の肉體は無盡藏にあらず、心の働きは無盡なり。肉は死するも、働きは無盡にして生存す。然るに人類の多くは、只働いてつまるものか、只人を愛してつまるものか、是れ何たる損と。——人を

愛して我心減るものならば、時としてつまらぬと云ふ事もあらん。人を愛したりとて我が心の減るにあらで、却て増加するものである。愛して損と思ふ吝しくは、井の水をおしみ空氣をおしむと同じ事なり。おしみて用ひざれば腐るのみ、價なし。愛は空氣の如し、又水の如し、風の如し、人生缺くべからざる食物なり。風は空氣を贈り、地平は水を配ばれり、皆人生の用たり、最大用たり。愛も亦此くの如し、人生、愛なければ空氣なく、水なく、渴し且つ呼吸せまる。空氣水におるては、忽ちにして利害明かなり、是れ愚なる人民に賜ふ恵みの厚き處なり。更に進んで神祕をさとする程のものには、此理によりて、人の愛の人の身に必用なるは、空氣の如く水の如きを理に於てさとらしむ。其の人の力の多少によりて、神祕の淺深をさとする、深淺の程度は、自然に上下あり大小あり。山間人居らぬ處に美しき花あり、樵夫獨り之をしる。樵夫里に出で、里人に花ある事をかたり、多くの里人を花見に行かしむ。此事樵夫獨り見ると衆と見ると、いづれが樂み多きか。獨り見るよりは多人數に見せてともに樂しむの大なる事は、何人も解する處なり。今我心の内に愛の美しくしき花あり、之を人にしめして衆とともに樂むと、獨り我身のみを愛して人に及ぼさぬと、樂しみの多少何れぞやと云はゞ、問はずして衆とともに樂むにしかず。神の教によりて咲ける心中の花、心中の實は、之を獨り樂むよりは、可成多くの人々に見せもし、食はしめもして、人の心の中にも其花の種をまきて、人にも花をさかせて、互に心の花實を見せ、且つ食ふてたのしむは、恰も自家の畑に得たる果物を、近所となりの同志に贈る如し。人も亦人の畑の瓜茄子を取りて、之れを我れに贈りて、我れの食物をにぎはし、我の心を樂ませると同じなり。而も

世人果物の朋友はあり、花見の往來をばなせども、愛と云ふ心の果實を其儘賜るもの少し。天の造りたるまゝの茄子瓜花の其まゝを、人より贈らねば我は喜ばず、天の造りたるまゝに非ざれば、花實を貰ふもの喜ばず、然るに我心ありのまゝを人に贈れば、失禮なりと咎がむ。花は天真爛漫のまゝならでは人に贈らず、我心を天真爛漫のまゝに送らば人中々喜ぶものなし。巧言令色、飾りをつけざれば喜ばずとせば、之れ謂れなき愚なるかな。

宇宙大なる庭園あり、山高く海深く、草木鳥獸之に居り、一つとして人の心を慰めざるなし、何を苦んで庭園を造り、又人類をして鳥獸草木よりも劣れる其狭き家庭を學ばしむるや。花を冬咲かせ、夏天然氷水を呑む、人智の開化とは云ふなれど、皆自然にあらざる造作人造人爲の異例たり。人生、開化の本義とせるほどにて、何故に我良心已に神の道開けて、冬の日に花さきたるを見ざるか。夏の日の炎暑をもくるとせざる天與の納涼地を占領して衆の樂みを奪ひ、氷水の呑めざるは儲て置き、常の食料をも奪ふて餓死せしむるか。開化とは廣き意義を含めり。冬の花を造るや、夏の日に氷水を造るやは、狭き意味の開けたる進歩なり。人心の進歩公德、神の道より開けたる人道の花は、室咲きの梅花より大なり。小なる盆栽にあらで、宇宙尙狭しとせるほどの天地間の庭園、富士もひまらやも新高山も皆庭園山泉の一物なり。又一人の餓飢を救ふは北海の氷よりも大なり。怪むべし、一方には惡事進歩して、一方は惡事退歩す。進歩の急なる退歩の激なる、天地を代へて大差あり。人に尾の生へざるは、未だ神のすて賜はざるなり。神は飽までもすて賜はず。もし教へて改めざれば、

只尾を生じ、牙を生ぜしむるのみ。

○悔 改

人あり、物を食ふ、其中に毒ありとしらば、誰れとてか之に驚き俄に之を吐き出さぬものなし。もし已に食ふものありとせんか、俄に藥を以て毒を消し、もしくは下劑を用ひて腸胃を清めざるものなし。人は何のために此く食物の害毒を除くに急なるか。生命を失はん事を怖るればなり、生命を重んずればなり。ソレ生命とは食物の謂か。否、食物のみにあらず、生命とは靈を併せたるを云ふ。靈の要は、神靈より尊きはなし。故に人もし神靈を害する事ありと知らば、何故に早く之を悔改めて謝せざるか。悔改むるの急なる、嚙んだるものを吐き出し、藥を以て胃腸を洗ふ如くせざるべからず。然るに今の世の人の多くは、一をしりて二をしらざるか、パン即ち食物より尊きものあるを知らざるか。而も食物中の毒に付ては直に之を實行しつゝ、其食物より尊き神靈を害するものに付ては、悔改めて毒を吐き出す事に躊躇す、愚かなりと云ふべし。深き考へを要せず、食物は誰が拵へて人に與ふるかを見よ。皆神の賜ふ處ならざるはなし。米麥野菜栗柿みかん林檎葡萄いちご、其他の穀實果實の多様なる、生にて食せるあり、火にして食せるあり、其味の多様多種なる、酸辛甘苦鹽、味ひの厚薄、皆よく人體に適し人の生命を養ひて、且つ長ぜしめ且つ生へしむ。生命の長き事、山川草木の口なき手なき足なき者と、何ぞ選ばん。草木は人爲人造にあらず、全然神力の働きの此一部分に顯はるゝ結果なり、之れ何人にも見易き神の御働きの結果の實を嚙み、食ふて其味をしり、其味をしりて其

味の天地に爲せる本根をしらざるか。本根とは神より發動せる御働きの結果たり。誠に其結果たるを知らば、汝の口に入るものは、神より賜與せられざるものなしと云ふ事に決すべし。

已に之をさととりて其神を見んと欲せざるか。見んと欲するの心も亦神の賜ものたるを知らざるか。已に之をしらん。之をしりては、又いかなるものといへども、食物の上に更に重要な神威神權の存する事をしるべし。一つのパン容易ならず、一握のめし是れ誠に我生命たり。然れども人はパンのみにて生けるものにあらずとは、之神のあるありとの御言葉なり。已に人の生命又神あるをしりて、罪を犯せるもの人心の誤りを正さざるは、未だ人にして人となる能はず、恰も神の恩をしらざると同じ。誠によく之をしるものあらん。已に知りては、又急ぎ悔改めざるを得ず。之を改むる事、尙食物中の毒を吐き捨て、口中を洗薬をもて、胃腸を清淨にせざれば止まざるが如くすべし。

○人情と食物

又曰く、食物には毒なしといへども、其食物の上におひて心よからぬ事をおもひ出さば、食はざるべし。たとへば他の人の家に行きたるとき、主人の心面白からざれば、膳部を面前に見て、其身は空腹餓飢の如きも食ふに忍びざるなり。又貧者の食物を奪ふては食ふに忍びざるなり。又小兒の前におゐて、小兒に與へずして食ふは忍びざるなり。又死人ある家にて家族及近所の人の泣き叫ぶときは、飯を食ふも甘からず。皆食物の上、何物が一種特別の感想を起して食はしめず、食ふて味なからしむ、之れ皆人の解する處にして、普通人情にお

ても常識とする處なり。但し此心は誰が教へたるか。誰が教へたるにもあらず、人生れながら之等神の賜物たるを知れるは、皆人生の資格なり。神は豫め人類に、此神理をさとの力を兼ねしめたり。之果物に甘味を兼ね、鳥類に美聲を兼ね、獸類に耳鼻の力を兼ね、山川草木に天地の氣候を感知するの速かなる力を兼ねしめたる如し。而も人生は此渾てを兼ねたるために、渾て萬物の上にある。

今蜜柑の甘からず南蠻辛からざるあれば、是等は天賜を空ふせる變化物として、何人も此實を取りて食ふものなし。人もし神の賜たるをさとらずして人の味を失は、誰も又之を人として待遇するなし。人にして人の品位に居らざるものは、何んの位置に居るか。獸に似て獸にもあらず、鳥にもあらず、蟲にもあらず、一種變物の化物なり。又愚にもあらず智にもあらずして、只無法亂暴憎弱變化の動物たり。故に必ずや人は人たるの味を要す。

いかなる愚かな乞人たりとも、他人より食物を貰ふや、必ず喜ぶの色あり。又瘋癲白痴といへども、飢へたるとき食を與ふれば喜べり。瘋癲白痴尙且つ然り、然るを未だ瘋癲白痴にあらざるのみか、口能く述べ普通の常識をしると自ら誇る人にして、更に一步をもすゝめず、汝の上に神あり其神より我れ人の味を恵まれたるものなりと云ふ事をさとらざるは、そもく何にたとへんか。是等は瘋癲白痴にも劣る事千萬なり。

○親しらず子しらず

むかし往來の道開けざるとき、山の腰海のへり、狭き處を行く甚だ危険の道あり、里人之を名付て親しらず子

しらずと云ふ。而も之を通らざれば目的地に行く事能はず、他に通るべきよき道なきを以て、旅人やむなく此處を通行するを常とせり。普通の言に曰く、正道は平坦なり、常道は危道にあらずと。然れども予は更に述べん、常道必ずしも危道なしとせず、正道必ずしも平坦ならず、正道却て危道を踏まざるべからず、常道寧ろ行路の難きあり、危道と難艱の行程を行かざれば必ず平坦を見るを得ず。

人もし教に入るの門狭しとして、門に來りて歸らば、何れの日か天國に入るの道に出でん。慎めよ、此門に入るの人。つとめよ、門に入るの人。門の入口の狭きに怖るゝなかれ。第一、狭しとおもふは、我心の未だ其形の大なるためなり。それ心は無形にして形なし、就中清める心はイヨイヨ淡し、色も香もなし、無形にして且つ精白の最も無色なるものなり。此心を以てせば、狭き門は愚か、いかなる處よりも入る事を得べし、空氣の如く又風の如し、聊かのすきさへあらば、是れより入るを得べし。然れども凡庸人の心は、淡ならずして色香あり濁りあり、其形のために動くものは、未だ心が心の本然に歸せず、之れを形容せば其形龐大雜多なり、恰も種々雜多の荷物を負ふて細き狭き門を入らんとするものに似たり、其身體は入らんと欲するも、荷物のために妨げられて門に入る能はず、此人、此門に入る能はざるを以て此門狭しと云はゞ、是誤りの大なるものなり。

〔今日は四十二年八月二十六日なり、以上は后六時迄に書す。夜食を食つて又前日の缺けたるを少々づゝ補はんとすといへども、予未だ聖書に暗し。希くは、道をしるもの先きなるものは我に教へよ。我は近年世の惡魔

と戦ふを數年繼續して止まず、多忙、讀書に閑なし暇なし、先輩の士に付きて學ぶ能はず、遺憾幾星霜なり。もし夫れ幸に我をあはれむ人あらば、予が常に出没せる谷中地の畦畔に來りて我に授けよ、是偏に予が生命を救ふの道なればなり。予の口之を云ふは、予が身のために云ふにあらず、神の心によりて之を云ふなり。世人或は不遜と云はんか、自身のためにせず人のためなり、公けのためなり、天地のためなり、神のためなり。以下門に入るの事を論ず。〕

○門に入らんと欲せば、先づ入るべし、萬事をすて、先づ入るべし。但し輕卒に先づ入るべしと云ふにあらず。先づ決し、先づ其入るの心に勇氣を出すべし、急ぐべし。急ぐとは、而も輕卒とは異れり。

暗中遠く光を見るごとし。山間、夜る道を失ふ旅人、澤をへだて、光あるを見て、心は已に光のもとに達せんとするを決す、而して急ぐなり。此急ぐは、水の急ぐ如く、専心一意谷のそこを急ぎ流るゝ水の如く、他を顧みずして急ぐなり、輕卒とは全く別なる事を記せよ。心は靜に勇み進むなり、而も一步之に向つては又戻るなし。此時荷物あらば必ず重く邪魔なり、邪魔なるをさとれり、片時も早く光ある處に達せんと欲するのみ、谷を越え澤を越え、早く達せんとするのほか他意なし。聖人の門を見、其内の光あるを見ば、恰も此旅人の如きものなり、谷を越え澤を越え、藪の中猛獸の巢、常の道なき處に行く、必ず常の道を捨て、進まん。此たとへ未だ熟せず、更に一言せん。

門に至る。門狭きとき、荷物多く身邊を妨けたらんに、先づ其荷物をすて、尙且つ身體巨大にして入る能

はざれば、肩を狭めて入るべし。入るとき肩を磨し、痛くとも疵付くとも血たるゝとも、押して入るべし。而も尙狭き時は、勇氣を勵まし、其門を破りても入るべし。門を破りて入るの罪は、門より空しく立戻るの愚なるにまさるなり。門に入るの勇決は誠なり、誠は天の道なればなり。誠より生ずるの罪は、天必ずこれを許さん。もし夫れ誠なくして入らんとし、若しくは門より立戻るは誠なきものなり、門を破るの罪よりは遙に劣れりと云ふ所以なり。古語に曰く、精神一到何事不成、之れ儒教の語なり。然れども未だ此語を以て盡せりとせず。予は謹んで更に云はんとす、神に近かんと欲せば、普通精神を勵まし自ら勇みて眞髓を勵まして、先づ此門に入る。身をせばめ身をけづり身を殺し、又門を破りても入るべし。而も尙且つ入る能はざれば、死に至るとも門に入るべし。是れ死にあらず生の道なればなり、門に入るは、道に入るの門なればなり。たとへば日本兵が露兵と戦ふ、要は是人道の兇事たり、然れども日本兵進んで敵陣に入るの日は死して顧みず、神は喜ばざる此血戦、兵としては此行ひあり。況んや神に近づくの大義を踏むの勇として、何事不成。已に此肉體を惜まらず、身を殺して仁を爲す、況んや生命を神にさへけ神の命令の下に働かんとするもの、此兵士の勇氣に劣れりとせば、之を何とか云はん。兵法は門を破り、而も敵必之を拒む。神法は門を破れども拒まず、天下一人の敵なし。一つは形を多しとす、一は無形を多しとす。一は腕力に戦ひて門に入る、而も敵必之を拒む。一は正理を履んで聖門に入る、眞理之を拒まず、眞理必之を爲し之を遂ぐ。門を破るの二別此くの如く、道の相去る天地普ならず、聖はますく聖、愚はますく愚。敵の軍門を破るは、神も亦之を喜ばず。聖門に入らんと

して門をやぶる、人もし拒めりとするも神は喜べり、神必ず其人の手を取り誘ふべし。故に聖門に入るは神の導きなり、神の導ける道を行くに當り、たとへ拒むものありとて之れは妨げの人なり。神命を奉じて人と戦ふは戦にあらざるなり。いかにとなれば、神は人と戦はず、神と人との関係にはあらざるなり。右は天國に入るの門狭しとて實行を中止すべからざる義に付て述べ、我意満ちて筆足らず、只記憶のために意のまゝにす。

あどけなきおのが心をたどりつゝ、神の教へのまゝをそのまゝ。

○花を見る人は目に何を喜ぶか。もし紅きをよるこぼし、呉服店を見れば餘りあり。紫も亦同じ。然るに花にあらざれば樂みとせず。何ぞや、花は花の趣味あればなり。心の花を人に見する、いかにせば可ならん。曰く、實行にあり。花はもの言はずして愛嬌あり、心の花は言葉によりて見せるあれども、花は言葉なくして心を人に見す。人亦實行の上に見せば、言葉なしといへども、見るもの喜ぶ事花よりも尊くす。花の口なく物云はずして、見る人の喜びあるは、花其身の實行なり、飾り偽り或は説明して人に知らしむるにあらず。花は天心ありのまゝの實行あり、必ず四時違はず、天の時候にまかせ、其の身の爲すべき事を爲す、飾らずして美なり。詔はずして愛嬌あふる。花の實行や誠なり、誠あるものは已に此くの如し。人の心の花を見せんには、先づ花に劣らぬ實行の上において見すべし。見る人は、見るべし。人もし神の行ひを爲す、人必ず之を見ん。耳あらば聞き、目あれば見る、又見ると見ざるとに花は頓着なし、人亦此くの如くなるべし。見る人の有無によりて花は咲けるにあらず、花は只神の賜をうけてそのまゝを開き咲くのみ。花は見せるために咲くにあらず、只神よ

り慰められ、又神を慰めるのみ。人亦神より慰められて、神を慰むるのみ。此外に別に人道と云ふものなし。而も今の世多くは、人道とは人の人に對する行爲の道德を云ふ。予等は、神に使へる人の道を云ふ、人道の意義の大に異なる所あり。但し是は何人もしる處なり。只人に仕ふるは賤し、神に仕ふるは尊し。人に仕ふるは狭小にして惡事多し、神に仕ふるは惡事なく、且つ世を益する事最大なり。(八月二十六日午後九時半)

○聖人の門に入るの勇氣。

勇とは、心の底より出るものなり、即ち神の命をうけ、其命の誠に克く自得して、其眞理より發する力なり。勇氣は我に存する力なり。光は位置および存在を異にするときあり。光り我にあるとき、光は彼れにあるを見て勇氣おこるときあり、行ひ神に合し、勇を振ひ氣みちて光を放つ、之れ吾光なり。たとへば美人のごとし、彼れにあると我にあると存在一つならず。而も神は常に光あり、大なり、明なり。人の光は神よりうけて神と合し、神と同一に光るあり、キリスト即ち之れなり。其次は月の如し、日の光をうけて照されて光る、是聖人の行ひなり。聖の光は人類を照らす最も大なるものなり、然れども其渾てが神に合するにあらず、其渾てが神に合するものは、實踐上において只キリストあるのみ。キリストの光は他の聖人の光とは同じからず、たとへば光の強きものなり、議論を以て俄に其實價を圖るべからず。

○孟子浩然の氣を養へども、口に云ひ難し、只四大四剛直きを以て養ふべしとあり。孟子は天地間一神の大なるものあるをしる、然れども未だ之を説くの道を解さざるもの、如し。孔子は天徳を我に爲せりと斷言せり、即ち神の天にゐますをしれり。然れども未だ其神の力、神の徳を解きて、明かに至らしむる言葉なし。

孔子孟子の聖賢と雖も、當時政界の奸惡を悔ひ改めしめんとする日夜の苦心奔走に忙しく、無形の眞理を研究して永久に國民の生命を全ふせしむるまでの大計に至らず、只目前の事態を改革せんと欲して他に餘力なきがため、深く眞理に立入る事能はざりしものならん。

以上は今人のさとの處ならん。キリストは教をとくの歲月短きがために、吾意滿ちて言足らざる處、意滿つれども言葉簡單にして、常人の解するもの誤りなきを保せず。意滿ち言葉の過不及あるは、問ふ人の答によりてもろく、同じからず。予は未だ聖書を見ず、キリストはいかなる至言を以て教へたりや、其趣味に會するの時機なきものなり。然れども我友島田巖本三好津田松村内村新井安部石川木下逸見和田本多潮田矢島佐藤其他のキリスト信者ありて、常の言行凡庸にあらざるを以て、之を我が實行の學びとせり。又佛信者に高木田中加藤光山三輪田島等ありて、其圓滿の言義のある處を聞く。此間幾多の悔改めをキリストにうけたり。今正に此道に學ばんとすと雖も、現在の惡魔奸惡と戰ふの急なる、書に付き師に付き行くの餘地なし、萬一にも我を憐むの人あらば、我に來りて教へ賜へよ。

神の命の何人にも未だ下らざりしか。我に來るは私事にあらず、人事にあらず、専ら神の事なり。我に來り教るの命は未だ神より下らざるか。

○予が見る惡魔

人造人爲故意惡意奸佞詐術を以て、世を欺き民を苦むるに巧みなるものを云ふ、彼のその食盡き飢へて盗み、凍へて盗むの徒を云ふにあらず。公然國民の財布を奪ひ、公然膏血を絞り、幾千萬の蒼生を殺して毫も恥とせず、又之を罪とせず悔ひ改めず、惡事を繼續して國土の滅亡に歸するを顧みず、千萬人の乞食を増加せしめ、自家少數傲然、錦衣花奢肉林酒池放蕩色慾に飽かず、其散財は又人民の精神を腐らし、ますく不善の人民を蕃殖せしむる事、或は山を掘り、綿火藥を積み、穴深き處に火を發し、全山土崩瓦解し、砂石雨の如く民人を壓死せしめ、而て曰く、此地方は危險なり速に立退くべし、立退かざれば其家を破り又人民の田畑保護の堤塘を崩して水害を被らせ、或は人民の造れる堤を碎き、耕作地に浸水せしめて、其人民を飢へしめ、其衣食を薄ふして凍へしめ、水を以て塚を崩し、生業機械を奪ひ、惡水路を塞ぎ水を湛へ、風波怒濤の至るを待て水勢を暴用して居住に堪へざらしめ、又は破壊せる家屋に稅率を増加して課稅し、或は田畑に河川の法律を侵入せしめて川浚へと稱し、其土砂浚渫の名の下に田畑の耕土を浚つて、之を煉瓦製造師に向つて其原料土として密賣する等、詐欺盜賊の行動を以て之を政治と稱するもの、或は山を掘り金を出し毒を流し數十萬の良田を荒廢せしめ、又其土地人民を離散の苦境に陥れ、訴ふるものを拘留入牢毆打負傷せしめ、或は金を竊に不良の徒に與へて惡事を働かしめ、或は人民を買收して奴隸とし、或は田地家宅を買收して良民を四方に追ひ出し、或は國際戰爭中壯丁は兵に出づ、老弱留守宅を守る、其兵の家宅を破り又其財を買上げたると云ふ、名は買收にして其實奪略を主とする奸惡の輩を云ふ。又戰爭には多大の人命を失ひ、又多大の浪費を投し、綿火藥は山を崩し

たるほどなり、之敵に對する處なり。日本内地今戰爭なし、而も大河の中流に横へる石堤を造りて水を湛へ、田畑を不仕付とし、土地價格の下落暴落を機として土地を奪ふ等、之を奸惡と云ふ。四方遠近に惡漢を放ち、之れ等に多様の流言を放たしめ、事態の黑白を顛倒せしめ、或は新聞社員を買收し、學識を逆用し、或は技藝を買收しその學術を逆用し、或は法曹經濟を買收して事實を錯誤せしめ、渾て國民を欺くに努めつ、あるを、奸惡の徒と云ふ。無きを有として損害を民人の頭上にかぶせ、有を無として之を盗み、甚ひかな、害なきを有りとして多くの救濟金をむさぼり、其救濟金を以て人民の生命を刻み、或は堤防建築費を以て其堤防を碎き、或は人民の自費にて造れる堤を崩して水を入れ、居住及耕作する能はざらしむ、或は大河の洪水を逆流せしむる其逆流口を伐廣げ、逆流を甚大に至らしめ、多大の町村の損害を致して、尙且つ其人民を欺くに當つては多大幾種の國費を濫出す。之を人の奸惡とするも大且酷逆なり、之を組織上より發せる幾百千の科程と階級行動を以てす、惡事を働くも亦惡事をしらざるもの多し。之等の奸惡の大なるものは、其汝が使役する奴隸をも併せ欺くものなり。故に奸惡の大なるもの、奴隸には、正直なる役員多し、之を罪とせばイヨ／＼重き罪なり。

○我々同志の業

我々同志は、之等の奸惡をも説き諭し、自ら其罪を悔ひ改めしむる事をつとむべし。我々先きに悔ひたり。後者に之を教ゆるは義なり。之を慈愛仁愛と云ひ、我々は之を信愛とも名けり。約言せば愛なり。人は神の命によりて此重大の義務に當るものなり。之に當るの英なる之を勇とは云へり。聖人の門に入るの道は又誠に茲に

存せり。

四十二年八月二十七日午前八時書。原田方事故滯留時間を利用して。明日は谷中に歸らん。

嗚呼、來りて我に教るの人あらば、我に紹介せられよ。我は人に問ふ事を樂めり。我常に語るに、世界人類は勿論、鳥獸魚貝山川草樹、凡そ天地間の動植物は、何一として我に教へざるなければ、是皆我良師なり。アーメン。

◎四十二年八月三十一日。桐生より栃木に、古河町まで來りたり。汽車中、野州の原野廣き處を見れば、雜草茂りたる中に、まれに美しき草花あるを見る。

人妄りに人に交らば、徒らに袂をぬらすのみ。よき人はよき花の如し、まことに稀に見るなり。選ぶは花と交る如し、花のために露にぬるゝはうれし。古歌に、

此里の眞萩にぬれし衣手を、ほさで都の人に見せばや。

古人已に此言葉あり、況んや宗教家を以て任じ、世の革命を期する人にして、人を選ぶの急なる事を。

○予止むを得ず選舉に奔走せしを、知友之を咎めて云ふやう、此俗事此罪惡政治云々と、誠意心を以て我を咎めたり。當時は心にありて之を辯ずるに細かならず、今にして漸く自得明解を得たり、選ぶと云ふこと則ち是なり。

り。花を選ぶは已に然り、雜草亦然り、たとへ花の美なしといへども、藥となるあり、毒となるありて様々なり。人に毒にして他の動物には藥となるもあるべし、鳥獸蟲魚に毒にして人のためには藥となるもあるべし。各々専心に其長をえらば、何物も無用のものなし。

○政治の罪惡は、猛獸の害よりは優に大なり。猛獸は人之を捕へつゝあり、而して政治上の猛獸に嚙まるゝをば知らず、猛獸よりはけしと云ふ事をしらず、故に嚙み殺されて、——天地は絶対に猛獸無必用とは云はず、人あり之を制して人の居住に害なきを得ば足れり。制するの程度なり、よく人と猛獸との比準を得る如くせば足れり。

○花は仁者に似たり。よく月を宿らし、よく蟲を容れ、又よく人の目をたのしませり、心をもたのしませり。

○猛獸は奸惡の官吏の如し。

○谷中には、百人以上の衣住食なき、自由のすべてを奪ひさられたる無罪の人民あり。誰れか一人にても救ひの道に盡せる人をほしく、今まで僅に數人の此道に苦慮せるものを見たり。谷中の人々は、猛獸にあらず毒鳥にあらず、毒蛇にもあらず鑷毒にもあらず。

○今の谷中の人民は、兵役に従順なり納税に従順なり、國民としての資格皆兼備せり。智識の乏しきは罪にあらず。才能の乏しきは罪にあらず。物事の記憶なきは惡にあらず。人の爲に苦められて憤らざるは罪にあらず。官に苦められ水に苦められて恨まざるは惡にあらず、愚にして智ならざるは罪にあらず。勞して厭はざるは愚

にあらず。其他罪惡は少しもなし。

○三月、大雪ふり、櫻花ちり破る。兩極の衝突。

○悪人にあらずして衆にすてらるゝは、一夫流の人、天下の大局をしらぬ罪人なり。

○善人にして衆にすてらるゝ、衆皆善をしらざればなり、之れ亦一夫流の人と同じ。もし夫れ恣に之を行ふ時は、他人其意を解せずして善人も之に背く事あり、而も此背くものゝ不肖なりといへども、亦恣に行ふ人の過ちなり。善なりといへども至善の道に遠し。然れども世人皆眠れり、我獨り醉はず、且つ覺めたるときは、警鐘一番衆多の惰眠を驚愕せしむるの時あり。衆と異なりて我獨り恣にせるの時なり。衆を起すの時なり。右の一夫流と警醒者とは、兩者とも孤人の働きの如し。此兩者を誤らば、謹慎者と憶病者とを同一視すると同じ。又目なき蛇と率先者とを同一視するに同じ。

○火を放つものあり、風起り炎々多く家をやく。風勢一變、辛く其災を免かるゝものあり、其喜びにつれて、火を放つ惡事の憎むべきを忘る、之れ私情なり。火災の被害人への同情を薄ふするは、火を放つ罪人に厚き同情を致すに陥るを知らず。道の誤るもの、凡そ此類。

○噴火大風雨雪震及堅氷、皆植物と生物とを害す。天地の大なる、害するにあらずして害するに似たり。人の麥の穂を食ふは、即ち麥を害するなり、而も害するに似て天地の公道を害するにあらず。植物動物皆天命の下にあり。命ありて其仕合に逢ふ、不幸と云ふべからず。

○精神なき事業は、評判光りなし。精神少なければ衰ふ、精神多ければ盛んなり。精神火の如きあり、心水の如き誠ありて、而して後世ますます大なり。事業は形の大小にあらず、精神の強弱によりて大小あり。全身精神を以てせば、全く宇宙に充滿す。

(四十二年九月五日記す)

○付智慧は、恰も隣りから貰ふたる茶の子の如し。重箱の中空になれば、即ち空となる。

○生命は稗のぬかにあり。一旦は棄てたるぬかをも食するほとに至る、飢の人。

○人は年々相異なり、山川年々相同じ。年々歳々花相同じ、歳々年々人同じからず。山川の荒廢は人にあり、年にあらず、むかしに返すを本義とせり。花や山川は、千年のむかしに回る。人は一代に歸る、老ひてもむかしに回す。論語に其本に歸れと。況んや山川の如き、壽萬年を以てするものゝ改修は、人事の短きを以て左右勝手に爲すべきものにあらず。

○ア、うれしや、我は虚位と云ふ事をさとれり。今にして漸く之を自得せり。我誠に虚位ならば零點なり。我又何等一物なし。田中正造なるものなし、身もなし。身なければ形なし、心なし、是誠に虚心なり。世のあらゆる文字は更なり、自他も亦なし。誠に虚位にして貧し。貧しと云ふ文字もなくならん。茲におゐて、はじめて天國は皆我物たりと云ふ事をさとれり。うれしき御事にて候。

○たい松たきて魚を取る。火を持つ手、魚取る手。

○真理は大成、人の智は速成。

○正造の身は政治に死し、精神のみ生きてゐる。

○人身の事を知らず。又白き毛を黒くするを得ず。知らざると、能はざるとは、人の事に非ず、皆神の事なり。

○明後二十四日、芝慶應大學擬國會に。

明二十三日、故矢部新作氏の建碑記念會に。

昨二十一日、齊藤眼病院に。

○左の頬、右の頬。

一は、上位より見れば小兒の觀あり。

二は、精神ならば打ても碎けず。

三は、目的宗教改革にありて、他は一切無頓着。

○舜も昊天に號泣す。

○キリスト、何とて我をすて給ふやと云へるなり。神に盡せる事此くの如し。信仰の厚き茲に至る。信仰の完からぬものにて、此言の出るなし。

○食前のいのり

賜ふものは神か人か、愛か義か、常理か法樂か、恩惠惠與か貸借か賣買かを。又報謝答禮、感謝か返濟か。食

は勤勞より出づ。而して其勤勞は何の勤勞ぞ。人は神に働くを眞の勤勞とす。我若し我に働くを私慾の働きと云ふ。今此人より受くるものは、神に働いためなり。私慾の爲にして得る食物には、食前祈禱の言葉なし。私慾より得たるは、神より盗みしものなればなり。神よりして受くるは神に感謝し、人よりして受くるものは人に感謝し、其人眞に神の子ならば一つの神に謝して足るべし。食するとき、主人神を信ぜざるをしたらば、食ふを止めて、已に食せしものに對しては先づ早く報答するを努め、而して神に對しては、必ず後に、心靜かに感謝すべし。我は我心に之をしり、之を禮とし、歡喜安んじて飲食咽喉を下るなり。我神をいのり、幸ひ其行ひの眞なれば、物を食する、人の手を経ると經ざるを問はず、祈らずとも神は咎めざるなり。天地の間に水と空氣とを求めて食するは虚體なり。其虚心に至らば、其時我心は神の心に適へるときなるをしり、茲に初めて其時の神を見ん、眞に我心に見ん。故に眞に水と空氣とを飲食呼吸するが如きに至らざれば、食前の祈禱未だ通ぜざるものたり。故に我は其地位に達せん事を欲し、努めて其研究を止めざるものなり。人はパンのみを以て生けるものにあらず。アーメン。

○奢侈に對する言葉の一

眞に天國を望む人は、生前に働きの報をうけざるを幸とす。又我れ神に働くも、神必ずしも生前に報ふとは限らず。もし生前に多く報を受けば却て不幸の人なり。況んや奢侈に涉るあらば、是れ神の報をも兼併するものなり。奢侈は經濟の賊たるのみか、神の人に與ふる惠みを、人より奪ふて是れを一身に集め、併せて神の愛を

も奪ふの罪人となるなり。是れ神の人に與ふるを、横さまより出で、之を奪ふものなればなり。故に奢侈は、今自家所有の物料たりとも、神の前には賊の行となり、又人の前には不義不正の行となるなり。況んや人の上に居り、民の食を奪ふて奢侈に費すは、國の肉を食して奢侈を極むるものにて、猛獸の慾心にひとし、人の行にあらず。天は故に長く此人々に食を與へざるなり。之を國の亡びと云ふ。民はたとへ従順にして此人々に長く食物を與ふるも、天は之に與へざるなり。人として、天を凌ぎ民をむさほるは、神の片時も許さざる處、況んや永遠をや。人として我身を食ひ、又國として天を凌ぎ多くの人民を凌ぎて、長き生命を得るの道なし。人は國なり。今人の衆と肉とは國の血と肉となり。天が人に與ふるは空氣の理のごとし、空氣を奪ふ能はざる如し。國として人の肉を食ふは、我が身の肉を食ふ者なれば、其生命を失ふなり。皆古來公衆の熟知する處、別に辯論を要せざれども、重ねて茲に云はざるを得ず。但し我は人の美を好む爲に、終に僉服を喜ぶものなり。

○流 水

誰れもしる通り、雨は水となり山より流れ出で、里より海に行くものなり。もし途中低き處あれば溜りて、充ちては又海に行くなり。今渡良瀬川を見る、途中低き處なく、流水早く海に行かんとす、之を途中に喰止めたるを關宿の妨害工事と云ふ。

かくして流水を湛へて、利根川の逆流、海老瀬村の北に至る。渡良瀬川の洪水藤岡町の西北に滞りて、水嵩むこと八九尺なりと云ふ、以て邑樂の堤を破る等あり、よりて此度沼を造るを遊水池と云ふ。此遊水池は印幡沼ほどの水量容積あり。此印幡沼は藤岡町の北方を伐り落して赤麻沼に合す、其大なる一里と數十丁、印幡沼と伯仲せり。且つ風波の怒濤、水揚瓦斯あり、衛生植物養蠶に多少の害あり。又渡良瀬川は藤岡町の南を廻りしものを、此度は北に廻すので、流域に多くの變更を來し、怖ろしき人の生命を奪ふ蠶毒を、下都賀の南部人民の頭に注ぐので、人民は驚くまいか、腰をぬかして眼計りキョロキョロさせて居る。そこで縣會は此毒の沼を造る事に大賛成したよしなれども、縣會が何ときめても、國會が何ときめても、水の性は正直にて公平に流れるを主義として、縣會のきめた事に従はぬ。水は自由に高きより低きに行かんのみ。たとへ國會できめても、法律理屈威信々と威張つても、水は法律理屈の下に屈服せぬ。水は人類に左右されるものでない。水は誠に神の如きもので、人類、誠にへほな人類などのきめた事には服従はしない。夫故に水を論ずるには、敵も身方もない。議論して勝利を得たりとて、その勝利は議論の勝利で、水に對する勝利でない、川に對する勝利でない。河川は決して無理に極めた法律規則に従はぬものである。かの議員選舉の時の如き、一票の多少が勝敗を決定するものなりと云ふ單一の問題でない。水の心よりせば、賛成も迷惑なり、反對も御苦勞千萬なりで、水は曰く、「我は我自由あり、へほ議員等の得て知る處にあらず、我は古來の天然と習慣とにより、流れて海に行くなり、新に道普請も不必用なり、また休泊所も不必用なり、我は日夜兼行で海に行くのを便利とするものなり、休泊所の如きは御免を蒙るなり」と云はん。剩へ多大の工費を投ずるとせば彌々迷惑なりと、水自身も反對の位置に立たん。クレグレも水の利害は、議員選舉の利害の如く、反對地の、賛成地の、との區別はないの

みか、よいも悪るいも人類には分らぬ。分つた風して工事をなせばなすほど、悪るくするのみ、むかしのまゝにせばよいので、手を入れて悪るくせしは、古來からなり。近來利根川の諸工事以來、多く金を投ぜば多く悪るくなり、少し投ぜば少し悪るくなり、特に山をあらし毒を流して河川を荒したのであるから、その害を除くは、人類の罪惡を人類が除くのであるから、除くが急ぎであるけれども、更に又害を加へるは、除くでない招くので、害を無理に無法に誣て、害の押し賣りで、すこしも害を除くのでない。改修とは水害を除くの名である、害を以て人民の田宅を奪ふのでない。毒水を被らせて、毒瓦斯を被らせて、印幡沼大の、毒の沼の印幡沼を新に築造するを、改修とは申せない。

○鑛業を停止せずして、渡良瀬川の改修を爲すは姑息なり。土地の被害田畑の免租、亦姑息なり。然れども之を一時の事とせば、浚渫にしかず。

水は行政權の濫用に服せず。たとへば鑛毒民の多數を獄に投じて、同時に加害者古河市兵衛に五位を賜ふも、鑛毒は流れ、洪水は舊に倍し、山岳彌々骨山に化するのみ。山川は命令に服せざるなり。山河を荒すものは天地の罪人なり。

谷中に對する殘虐は筆舌に暇あらず、其殘其酷至れり、而も人民は服すべし。

水は正直にして堤なき處に入る、以て國土を亡ぼすなり。水の亡ぼすにあらず、人にて亡ぼすなり。山河の壽億萬を以て算す、五十年の古に回すは山河の一瞬間のみ、區々短生命の人民の淺薄智識等の左右すべきものに

あらず、日本今此理を解さざれば、西曆千五六百年時代のスペインの如き、山河荒廢の覆轍を履まんのみ。日本今や其轍を履めり、危き事噴火山下の村落を見ると一般なり。

銅山の産額三百萬圓にして、利益六七十萬圓を越えず。今沿岸年々三百萬圓の損害と、永遠の滅亡地と、年々堤防費一百万圓以上を増加せり、之を如何。尙人類の悲慘、一切枚擧に暇あらず。

谷中の堤を碎きて、水害を以て人民を苦め、耕作を害する三年にして、潜水池を造ると唱へて、土地收用法を濫用して、終に良民の家屋十六戸を破壊せり。去る三十七八年日露戰爭中、村落を破るに術數を以てす。外には日露交戦あり、内には行政府と人民との戰爭ありたり。幸ひ谷中人民愚直にして、此虐待に居て之を新聞紙に投書するものなきは僥倖なり。若し夫れ當時之を外國新聞に發表するものあらば如何、日本の行政は當年の敵國よりも怖ろしき次第なり。

抜くべからざるは己人の精神なり。高尚の精神を有するを己人と云ふ。己人の權利を有するを町村の權利と云ふ。法律已に然り、況んや人權をや。

谷中人民を見よ。已に其形を失つて、而して精神存す。精神の存在する處必ず生命あり。

明治四十三年

日記

(明治四十三年四月—十二月)

◎四十三年四月一日。明二日前八時三十分、平田氏(内務大臣平田東助の事)面會の筈に返電あり。

谷中と銅山との戦なり。官權之に加はりて銅山を助く。人民死を以て守る。何を守る。憲法を守り、自治の權を守り、祖先を守り、茲に死を以て守る。既に死するもの四人。死する時皆な言あり。

◎四月二日。平田氏に面す。予曰く、欺かれて又欺く。又曰く、民の心を以て心とするで無く、民となれよ。氏大に喜ぶ。一日二日、麴町中六島田氏止宿。

○谷中に入りし時、人道の一方にて入りたり。政治家にて入れば、却て此悲惨に至らざりしならん。

○裾を短くせしは歩行の爲めなり。然るに歩行すること少なし、されば裾寒きの損あり、益なし。

○飯食はせて其人の心を得たり、故に其人は我物なりとせば、十中八九宛てが違ふなり。

○予思ふに、老ひて肉落ち力減り智減り、心愚に入ると雖も、精神々靈依然たり。精神は却て太とく堅く正しき

ものあり。孔子曰、人の將に死なんとする、其の言ふ事よしと。宜なり、靈の發動のみなれば也。若し死する迄慾を離れざるものは、其の言ふ事よからず。

◎四月十四日。菊地茂君に逢ふ。予は天然の中庸を言ふ。又釋尊の中庸、キリストの中庸を言ふ。孔子は人類社會を兼ね、故に自ら中庸難しと言へり。キリスト釋迦は、克く常に安んじて中庸に居れり。

釋迦が民間に居たるは、人類界の眞理を得ん爲め也。之を得て、譯して演ぶ、即ち說法となる。見よ、材料の山海よりも多き、民間の活動、人心の離合、因縁果報、掌を見るが如し。今や人、釋尊を信仰して、而も眞理を言語に悟らんとす。木によりて魚を求むるが如し。可憐、衆生の悟らざるや久し矣。

故に曰く、キリストの十字架は中庸の中庸たり。天地の中心、人道の中心、無形、見るべからずして明かに見ゆ。凡人の肉眼、理想の最上に達せざる者、如何に工夫を凝らし如何に研究を重ねるも、中庸の道を知らず、研究ますく中庸に遠し、可憐哉。

○胸間の鏡は、己の心をうつさず、他物之にうつれり。我れ得て得失を知る。

◎四月十九日。巢鴨、新井奥、遂様方止宿。年七十にして朝寢を誡めらる。

○肉落、骨朽、神存。

○人に可、尙ほ神に仕ふべし。人より神に移るの道、たとへば財産を失ふて名譽を得、名譽を失ふて眞理を得。是れ人の神との境界なり。

○徳義の本は神に在り。人は自身を以て修むるを得ず。病の如し、一切を醫に委す。人事一切を神に委す。

◎六月十一日。古河町蔭山中學生、渡良瀬川に船鬪の稽古あり。人道の戦を學ばず、實踐なき者、單に腕力を學ぶ、危哉。

○養蠶教師あり、農作教師あり、工藝教師あり、萬般智識の教師あり。人を教ふる教師なければ、食のみ足りて人は飢ゆ。食は充満して餓死多し。

○我至る處の飲食甘まし。
貧しき者は幸なり。

○衣食住は身の生存なり。

身は神靈の生存なり。

衣食住の清きを要す。

世の衛生は身の爲めにす。

我が衛生は靈の爲めにす。

○ヨハネの水の洗禮は順序なり。

靈の洗禮は、靈を以て靈に與ふ。

◎六月二十三日。

今朝偶感

お祭に、毛もの殺すは、やめにして、我が身の肉を、神にさへけん。

○神若し我に許すに三年の壽を以てせば、新約聖書を讀み畢らんか。三河島村邊の農家に假屋あらば、時々一泊の宿に頼んでもらひたい。農民の事情にうとくなりましたから。

○我れ老ひたりとも、人力車の絶對不可なる事を、今回の病氣にて發明致しました。以來は簑笠と杖一本で歩行くときめました。

◎七月二日。風邪、快氣に至る。人は服のみにて暖きものに非ず。

○人はパンのみにて生きるものにあらず。パンや人體に離るべからず、而も位置を離せば無關係なり。住處衣服は食ほどに深き近き關係なしと雖も、離せば則ち身を破る。此三者は何より來るか。即ち森羅萬象より來る。森羅萬象皆な我に關せざるなし。身體は靈の衣食住所なり。靈の生命は天の靈地の靈と共に、死せざるなり。故にキリストの肉を奪ふも、尙且つ生命あり。

○天地は皆な我が身なる事を知るべし。山を掘り金を出して之を利とするは、我肉を賣て衣食に換ゆる類なり、我身なる天地を傷くるものなり。

◎七月三日。谷中村破壊三年の記念會あり。

○務めて繫累を断つ

足利より歸る時、車上服薄く寒し。此時車を下りて歩行せばよろし。然るに偶々雨降り來りたり。而も尙ほ車を下りればよかりしに、小包ありし爲に下りるを躊躇せりと覺ゆ。腕車三里、終に風を引く。キリスト曰く、杖一本の外何物をも持つべからず、二枚の服をきる勿れと。

○趣味

津田仙氏御夫婦、谷中人民を訪ふて鎌倉へ歸るや、小包を正造に寄す。郵税十四錢なり。開き見ればアチの干物五枚、手製の品なりと。なかみは一枚二錢のナマ干の鱒。郵税十四錢。其趣味深し。

○七月四日。旅順開放の新聞を見て、木下逸見安部三氏に祝辭を呈す。

○七月五日。昨日、木下氏の持参くださったる芝蓑を着て、荷物を天秤にして谷中に入らんとす。途中、青年來り、裁判用を告ぐ。予直に衣を改めて栃木町に來り泊す。

○經濟出納は、天地循環呼吸吞吐の如し、入れて出さざれば自ら斃る、出して入れざるも亦斃る。天順ならざるべからず。

○方今機關發達、今日古河町市場の茄子、明日午前北海道旭川にて晝飯のサイになると云ふ。知識既に此くの如し。之に伴ふに德義を以てせば、徳の流行する置郵して命を傳ふるよりも速かなるべし。今や徳は退歩して、茄子獨り汽車にて早く遠く行く。大酒大食、肥え太るのみにて却て短命する者に喩ふ。又た徒らに馬術に長ず

るも人命の重きを知らざれば、多衆込合ひの中を馳驅して怪我人を顧みざるに同じ。

○勢ある者に虎狼多し。中流には狐狸多し。下流には蛇蛙あり。我は是等と交はり且つ共に在るを得ず。然れ共虎狼に嚙まれ、狐狸に馬鹿にされ、蛇に毒せられ蛙に足を食はれんとする事多し。

○上下は位置なり、形の等差のみ。人類上下なし。何れの處關白生まれ、何れの下民に、聖人生まる、かを知らず、神は均しく恵み賜ふものなるが故なり。貧民を賤むは何の故なるを知らず。病人を穢らはしとするも亦然り。肉病は精神に關せず。貧者却て神に近きもの多きにあらずや。富める者は神に遠し。健康の身體は罪を犯し易し。肉のみの健康は野獸に陥り易し。

○夏の日もまだ盡きざるに、玉川の、草葉露けく、秋は來ぬらし。

○木下氏によりて東京町屋より芝蓑を得たり。此の蓑は古河町の商店にもありしものを、古河町のは前の合はざるものと思ひて、ワザワザ遠く取寄せたり。然るに古河町のも合はせれば合ふなり。合はせて見もせて、東京より取寄せたるは可笑し、恰も親と氣の合はざる我儘娘が東京へ行き、學校へ入りて、親兄弟や他人との交際を學ばんとするものに似たり。合はせれば合ふものを、家に在る時は合はせもせず、東京へ出て、學問上智識上にて父母兄弟姉妹との情を學ばんとす、可笑しき也。

訪ひ來れば、君はいつでも戸たて坊。たゞ松風の聲のみはして。

雨の日に、打たれた、かれ行く牛の、見よ、其のわだち、跡かたもなし。

人古く、神新らしと思ふなよ。日に新しき人ぞ人なる。

磯の神、むかしも今も、後の世も、同じ心の、雨風の聲。

○亡國とは、天下の善者悉く死したる時なり。

善者ありとも、柔善は光なし。

○天は國を亡ぼさず。

人自ら之を亡ぼす。

亡びざるは、天よく救へばなり。

人の常は亡ほし、天の常は起こす。

○料理の上手なる人ありしも貧乏なり。昨日魚を買ひ、今日菜を買ひ、明日醬油、明後日砂糖、其翌々日に至りて炭薪を借入れ、やうやく七日目にして料理に手を下だす時、魚は既に腐れ菜は枯れたり。年老ひて事業に手

を出す、其の失敗概ね貧乏料理人に似たり。

○足尾銅山は餘りに國家を玩弄して、被害民を苦しめ國土を滅亡し、尙ほ且つ私慾を恣にす。

○志士の心得

人を愛する事我身を愛するよりも切ならざれば、人また我を見て、下着一枚の愛だも起るものにあらず、是れ常なり。未だ古下駄一足ほどの愛をも加へずして、先づ彼より報を得んと欲す、焉んぞ志士たるを得んや。況んや民を欺き、一毫一厘の愛だも加へずして、先づ民の財産を奪はんとする、之を何とか言はん。世の勢力家たるもの概ね此の如し。

○野の花の、天の造りしまゝなる程綺麗なるはなし。人の心も姿も、天の造りしまゝ程清くうつくしきは無し。

たゞ野の花には垢つかず、人の身と心は垢つき、けがし、けがさるゝ。之を洗ひ之を拂ひ之を清めざれば、天の眞を顯はす能はず。少しにても飾れば汚れとなりて、天真かくれて見えす。

人の見るもの、神は見たまはず。神の見たまふもの、人は見す。

人に見易きは、神の目に見ぐるし。

飾は神に遠し。

○子を育つる父母にして、神の心にならざれば、皆惡愛妄愛となりて、爲めに我子をして神に遠く、人の道を失ひ、終に生命を縮むるに至らしむ。

○今年渡良瀬川、五月十二日舊の四月四日と申すに、流毒多量、孕める魚死して、河中一粒の卵なし。此月より機業大不景氣となり、漁業収入なし。谷中困民の難澁言語に絶へたり。

又農民は、年々五月十月の兩期は植付蒔付刈入の季節、繁多日夜を分たず、父子顔を見ざるの日さへあり。此時に乗じて暴官汚吏は、悪税及び不正の収入を圖る。農民狼狽中にありて精細の心なし。常に奪はるゝ也。

○風雨、天則あり。好い天氣わるい天氣と言ふは、人の心小なるが爲めなり。

○小兒泣寝いりて、母の乳の禮を言ふものなし。而かも母は厭はず倦まず。

○鑛毒なき時代の治水は、假令封建要塞の爲に河身を變更するも、被害は水害の一條のみなりき。昔館林城を築くや、西岡除川高臺と海老瀬の高臺とを要塞の郭内に編入せん爲め、秋山川を西岡に縮切り、渡良瀬川の分流を借宿に縮切りて梁田郡を造り、渡良瀬、旗川の合流を早川田に縮切り、東流川を才川の支流に則り形を大にして東下秋山川に合し、西岡除川を廻して藤岡の西部を迂迴せしめ、海老瀬の中央なる今の渡場に人工を加へて川幅を造り、茲に渡良瀬、桐生、松田、袋、旗、矢場、才川、菊川、秋山川の諸川を此一口に注ぎて、邑樂郡今の二十二ヶ町村中十一ヶ村は安全に、是よりして川崎、羽田、高橋、船津川、馬門、越名、高山、三毛、藤岡は被害となりたり。但し是は城塞の爲にせる治水の名なり。今は更に之に加ふるに足尾銅山の鑛毒あり。水害の至る所は即ち鑛毒地たるを免れず。

○わり飯味噌汁にて目方十六貫二十貫の物を擧げたり。後ち文明開化となり、肉を食ひ酒を飲み、二十貫以上の身體となりしも、無用の肉のみにて病多し。後ち酒を禁じて今日十二年、體重十六貫三百目になりて、身體また健なるを覺ゆ。

○谷中、蚤多くして眠に不堪。よりて袋の大なるを製して、内に身を容れて寝ねんとせり。袋は既に出来せり。時に感ありて之を廢す。

○お染久松の芝居は面白し。若し見る人々お染久松ならば、如何に悲しきぞ。

○入るに暗く、漸くにしてバナヲマを見る。見て出づ、出づれば天地本然、森羅萬象皆な眼中に落つ。前のバナヲマは見戯のみ。苦學、空に歸して而して後ち學成るなり。此理を悟れば又別に學ぶの要なし。釋迦の弟子、釋迦を耄碌せりと罵りしは、本來の無一物に歸したるを罵りたる也。

無趣味の趣味、言はずして言あり、形なくして形あり。動靜歸一、死生歸一、禍福歸一、無極際涯。

○八月三日。端書十枚を出す。

○或人の發句、

風の入るすきまも見えぬ櫻山。

世の人納涼の實を知らず。春は櫻の山、只だ多くの人入込みて、辨當や酒や食物に汚がされて、風流人の足を容るゝ餘地も無し。金と辨當を携へざれば、櫻の山へ行かず。又た暑中の納涼にも胸襟狭く、たゞ奢侈にのみ

熱中して自然の涼を容れず。農民獨り自然の涼味を田の面、畦の上に納る。

富者の不便なるや、金錢を以て納涼を買上ぐるの矜あり。家を離れて山海へ行くは可し。一日も金なければ、山に居られず海に遊べず。空氣の大なるあるも、彼等は金を以てせざれば快とせざる也。空氣をも、買はねば樂しめぬ貧しき心ぞあはれなる。

○窃に予が多年の樂の何なりしかを思ふに、人生を大別二とし、最も勢力なき弱き人々を合はせて、強者の暴慢を排するを樂とせる、予正造が行爲の十の九に居る。最弱を以て最強に當るにあり。

○食 前

人の我に飲食を與ふるは、此人皆な神の命によらざるはなし。我、人の爲めにす、即ち神の命にあらざるはなし。然れ共人若し我に食を與へて恩となさば誤なり。我れ人の爲にする事あらんに、我が働なりと思はゞ大なる誤なり。人は皆な神によらざるはなし。若し夫れ錢を以て食を買はゞ奈何。食物も金錢も神の物。神と神との交換。人は只だ其の命によりて、受授の職務を勤むるのみ。

○盗んで人に與ふといへども、物は神の物なり。知らずして受く、神に於て罪なし。

○八月十三日。暴風怒濤起る、前十時より十一時。

○八月十四日。野木村、野渡に泊。此日、米五俵割麥一俵買取りて、谷中に通知す。

○十六日。谷中に入。惠下野にて避難人に面會。

○二十三日。古河町出立、日暮里に来る、泊。床上尺餘浸水。

○二十四日。今朝、逸見御夫婦と、岡田氏へ行けり。

○二十五日。岡田神呼吸を訪ふ。

○飢ゑて死するものよりは、飽食に斃るゝもの多し。

○心の尊きを知らざるものなし。而も誠に心を尊ぶもの稀なり。

舊 作

空樽の、た、けば音の響けるぞ。内の鳴るのか、外のなるのか。

○人は天によらずして片時も生息する事を得ず。衣食住皆な之を天にうく。況んや生命をや。況んや又た生命保全の道に於てをや。

保全は靈にあり。靈は神より出づ。神の大なる事此の如し。汝等衣食住の事を知りつゝ、何故に其源を學ばざるか。汝等靈あるを知りつゝ、何故に其元主を尊敬せざるか。汝等は家に居れども家を知らず、衣を着て衣を知らず、食ふて味を知らず、空氣の中に居て空氣を知らざるものなり。

○水は自然なり。知者は之を利す。愚者は之を損す。

○日本、一人の治水家なし。

◎十一月。去十七日より風邪に罹り、古河町に三日滞在、谷中に三日滞留の後、人力車にて渡良瀬兩岸水量調査に出張。この十五日間、足利を中心として出沒。兩岸、西は桐生町、下は川邊村、十二里間の兩岸略々調べたり。因て渡良瀬川に關する利根川逆流の要點を得たり。あア、水毒の國土を害する、可怖哉。

◎治水は自然の地形及び地勢を愛すべし、山川を愛すべし。地勢は水勢の大則なり、況んや地形をや。地勢は多數人意を加へ得とするも、地形は毫頭動かすべきものにあらず。況んや古來其地形によりて村落を造り、數百年人民の生命こゝに存在せるものなるをや。

◎熊澤蕃山先生は、堤防建築が上手ではない。只誠實を具體的に顯はしたので、堤防を見れば、熊澤蕃山の徳性の一端を見るに足るのである。即ち堤防の一角に、蕃山の姿の一角が見えるのです。

◎私慾深く商賣的に古道具骨董を扱ふものは、たとひ年を経て鑑定眼力するどく、眼光の及ぶ所廣くなるも、愛玩の心遂に乏し。之に反して愛玩的誠心あるものは、商賣の利慾に通ぜず。我國の政治宗教は、商賣的にして愛玩的にあらず。人道は愛なり、政治は仁なり。仁は愛にして愛は則ち仁なり。此の二つの要素を失つて、いかで國家社會の存立を見ん。

◎我れ、明治十二年、改進黨によりて文明に戀々す。又た人心の難きを知る。

二十三年、鑛毒によりて萬年の害を知る。又た人心の正邪を知る。

二十五年、水害によりて是を治むるの難きを知る。又た人の心の難きを知る。

約言す、神の命によるの安全なるを知る。神にあらざれば予と共にせず。神にあらざれば予と共に働かず。心遠く離れて予に従はず。

死んでから、骨を拾ふて何かせん。かきあつむべし、生きてる言葉。

○行は常の徳。常の徳を積んで山をなすべし。若し報を得ば、山高からざるに止む。故に報の多きは却て徳を失ふ。

行のよきを徳とす。而も集まらざるに早く報を得ば、終生行ひの借のみ、借金のみにして貸金なし。即ち徒勞に畢はるのみならずして却て大害あり。

徳行は、人より報を得るものにあらず。皆な天、皆な神。

○歳月を空うし、國帑を空うして四海を困窮せしむ。罪是れより大なるはなし。

明治四十三年十一月三十日、小山宿にて。

○罪あるもの、人の罪を制せり。罪なきものは、人の罪を問はざるなり。

◎十二月五日。昨四日夜、寶積寺停車場に下り宿屋に行く。座敷なしとて斷はらる。なほ三軒の旅舎に就て一夜の宿を乞へども、斷はらる。茲に於て大に決心いたし、福壽屋と申すに入り、若し此家にも斷はらるれば、

最早他に宿屋なければ、丁寧に申込めるに、やはり断はられたり。正造途方に暮れ、若し姓名を明かさば宿を許すは勿論なれど、其れも残念なりと、尙ほ幾重にも一夜の宿を乞ふ。主人曰く、一二丁戻ると某會社の隣に安宿あり、其處ならば多分許すべしと。正造又問ふ、其家は木賃かと。我が言葉をさととりて、主人曰く泊めてやれ。正造座に上り、寒いから少こしあたらせよと、炬燵の側へ行き、先づ一寸姓名を告げると、主人大笑且つ驚きて、奥座敷に入れる。俄に訪問者も来れば駐在も来る。主人周旋、百事くまなく予の旅行を助けた。今朝來水害地視察、汽車の乗入り百事懇篤なり。前夜宇都宮にて猪熊氏に泊し、御自慢の謠曲鉢の木を聴きしが、予の徳最明寺に及ばすと雖も、此の旅舎の主人に佐野源左衛門夫婦のやうな點も見えて、大に喜ばしき思をなせり。

○町村の事。

町村、大に失せり。

支那の如し、聖人出づれば大なる程益々可し。

聖人は稀なり。又群賢ありとも、王は一人のみ。

之を小にするに如かず。小の小なるもの群賢を容るゝに可し。

民自ら平を得。

○島田、倉持の二氏、故あり八ヶ年庭園に手を入れず、樹木自然にのび、枝葉茂り、遊歩の人其蔭をくゞりて歩

くまでに至れり。八年の後、二氏家に在り、はじめて枝をすぐりたれば、庭園前年に十倍するの風致となる。

人も亦同じ。八年手を入れざれば人格は高尚になり、風采先年に十倍せん。若し夫れ終生手を入れざれば、恰も神の如し。

人にして神の行をなす、人之を解さるる也。人の解し得るものは神の行にあらず。神の行にして人の解し得るもの稀なり。神の行は、始めより凡人の解し得るものに非ず、只だ神のみ能く之を知る。

○失敗者は他の肥料となるべし。

失敗して爲す能はざれば降服すべし、降服して他の奴隸となるべし。されば他人を肥やさん。失敗を失敗とせず、之を研究の途中なりとせば、百折不撓終生同一の事業を學んで倦まざるべし。終に斯道に熟せん。熟して達せば、金石も亦透る。また他に降服するの限にあらず。

然れ共無能不才と病とあり。此人々は他人の肥料となるを耻づ可らず、急ぐべし。若し夫れ遷延時を失せば、他人の侵略に陥りて捕虜となる。捕はれて服するよりは、自ら進んで奴隸となり、他を肥やして多く果を結ばしむるに如かず。

◎十二月十日。

夜の感

世の人の、高き枕の夢のまに、都の花は、散りはてぬらん。

○部屋は農民多く、小作人多し。田畑くされて野菜も無く、行商來りて野菜を賣る。之を買ふの錢も無し。

水のあと、涙のかはくひまもなく、壁なき家に、冬早く來ぬ。

○今日の學士、老ひたる時は如何。

今の學士は皆壯年にして智識あり、能く國家を亡ぼすに足るの力あり、無經驗にして惡事を働く能者たり、勢力猖獗有爲の士なり。

然れ共元と公共相愛の心に乏しき者なれば、老ひなば愚に落入るの人なり。愚にして惡事を爲す時は、恰も二十年前の朝鮮の如し。今日の青年、是等學士の手に育てられて、しかも今の壯年者だけの勇氣も働きもなし。眼前腐敗の模範によりて元氣も勇氣もなく、只だ窃盜に陥るべし。今の壯年は詐欺の知識あり、奪略の術數あり、強き事強盜の如しと雖も、後の壯年は此の力量も無くして、窃盜を以て畢らんのみ。

日本も二十年後は漸く強盜見えすして、窃盜の世となりぬべし。精神一旦亡びては、哀れはかなき有様に陥らんのみ。

◎明治四十三年十二月十八日。昨十七日、日暮里金杉逸見斧吉氏へ來泊。

今十八日、逸見氏方クリスマス祭なり。

○食前の禱

天の父母、我が父母を生み、我が父母、神の命によりて、我を孕み我を産めり。肌と乳とを以て我を育せり。

其の愛、神の如し、又た天地の如し。我れ之を受けて恩とせず、其心、神の如し。

我れ水火を識別するに及んで、父母我が飲食を斟酌す。此頃になりては父母、神の如くならず。我亦た食慾を覺ゆ。

我や、長するに及んで、我飲食を制す。我れ壯年に及んで父母の制裁に安んぜず、或は暴飲暴食、時に病を受く。此時に當り、身を破り人道に反き多く罪惡に陥る。陥りて後ち悔ゆ。其悔や厚く、而も改むるに至らず。後ち大に悔ひて大に改むるも、年已に遅し。

晩年に及んで、知友の力ある誠告によりて、終に全く過を改むるに急なり。而して後はじめて神に仕へ神より食を受くるの道を知り、食するものは皆な神より賜はるものたるを明かにさとりたり。

茲に數年の實行を踐んで、いよく神の爲に働くものは、神より食を受くるなりと信ぜり。今日の働は今日の食に充つ。

天國は神の食を食ふの境にあり。人の食を食ふは、未だ天國と言ふべからず。希くは今日一日たりとも神の食を受くる天國の食堂に列ならん事を祈る。

今日は是れキリスト降誕の祭に會するの光榮を得て、天國に入るの心持してこの食堂につけり。祭主逸見斧吉君、同菊枝子君、板倉道子君、助手廣瀧梅子君、藤田辰子君、みな克く祭にあづかりて神の爲に立働くを見た。而も我々は來客として働かず、坐して之を食ふ。孔子曰く、我れ祭にあづからざれば祭らざるが如しと。

去れど我々の坐食、今日の坐食は、祭にあづからざる徒食の來客なり、神の御叱あらんことを怖る、なり。然りと雖も食するも亦たあづかるの一ツにして、關する所大なり。憂ふる所なく安んじて食ふべし。只今より神に背かざれば可なり。喜び樂み謹んで食すべし。アーメン。

○小兒、暖かなりとて衣を脱がんとするは天なり。

母之をとむるは人道なり。

人道よろしきを得ば、天を保す。

○予は田舎の農夫、近年は特に愚夫よりも愚となりけるを以て、會話常に念が入り過ぎて、相手の人々をして倦ましめ、且つ長きに忌まる。對手は東京市中電車電話よりも賢き働、速達敏捷即斷裁決流る、の人、田舎もの寄付く能はざる勢也。然れ共宗教的思想の事は、物質に薄く質素に厚きを常とす。地方の愚亦悉く捨つべきものにあらず。天然の足は機械的電氣の速なるに及ばすと雖も、天然を見るには、徒歩にあらざれば趣味少なし。

○昔し二十年前は、東京に來ると馬鹿になる。三日居れば三日だけ馬鹿になるので困りき。今は東京に來ても、神の社に止宿するので、却て發明になるけれ共、東京の社は綺麗過ぎ、未だ石に青苔少なく、趣味に異妙の風あり。所謂文明の神と野蠻の神との時代違を見る如し。神には野蠻も文明も無けれ共、神を見る其人が文明の智識あれば、文明の神を見とめ勝ち也。

○日本の名僧や、芭蕉の發句、利休の茶道は、其道皆な文明の藝道のみならず、其の一筋は神の心に背かざるもの多からん。又忠臣義奴の如き、其行縦ひ忠君を越へず區域狭しと雖も、其真心に至りてや、其の一筋は神の心に背かざるものあらん。一は文明により、一は實踐躬行による。言行の分野は天地の大差ありと雖も、歸する所は即一なり。但し神はかゝる細かき所のものに非ずと言ふ勿れ。此人々の中には神を知らざるもあらん。只だ當時の忠とか義とか孝とか武士道とか、井蛙の考のみにて、只だ實行のみ勤めたる人多からん。然れ共神に背かざるの行爲は、即ち神の子に近し。言行の廣狹風采の文野に論なく、神を知らず佛を知らず天地自然を知らざるも、其の行爲天真の心に背かざらんには、即ち天地を感動せしむる也。人の知ると知らざるとに拘らず、神は即ち之を嘉みして天に導きたまふならん。

○去る十七日朝、利根川の北岸邑樂郡千江田村の江口を出で、川俣村の停車場に至る。途中暴風西より急に吹き荒して、歩行危ふし。道路は近く泥土を以て普請したるばかりにて、下駄の齒立たぬ所あり、杖さへ烈風に奪はれんとす。笠も風に吹き去らる、恐あり。手早く脱ぎて、予を送り來れる人夫に託す。忽ち風また一層烈しく來りて予を倒ほさんとするにぞ、下駄を捨て、足袋はだしとなりたるに、態度一變、如何なる烈風も却て面白くなり、弱者忽ち強者と化し、風に向て詩歌すら朗吟し、田甫に布ける水害後の泥土の、寧ろ作物の爲め天然の肥料たる抔を見分しつゝ、心中窃かに喜ぶ所あり。倒れ流れたる村民の悲哀を思ふて喜憂交々多し。洪水後の悲慘の中、回復の道的一端を見る。人生の事、誠に心底の決定に在り。

◎十二月二十八日。日暮里逸見氏にて岡田靈に逢ふ。是れ予が三十七年春神田青年會館の演説に於て、學生に告げたる豫言に應ふの思あり。果して然らん。夜、古河町に歸着。

◎二十九日。古河町及び野渡の白米商に代金皆濟。

新年御題「寒月照梅花。」

寒月は、常に梅花を照らせども、珍らしそうに見るひまもなし。

寒月は、梅花を照らし句へども、はなも目もなき、闇の世の中。

○金は涌きもの、盡きるもの。

水は涌きもの、盡きぬもの。

人の精神、水の如くせば盡きぬもの。而も金々とのみに傾きて人情を忘るれば、盡きものとなる。くれぐれも人の心は水の如く清かれよ。

○世襲財産的宗教を改めて、「大學」に所謂民を新にし、日に／＼新にして又日に新たなりを以てすべし。而も世襲の弊の多き事言語に絶へたり。甚しきは他宗を罵るものすらあり。天下すら一人の力に及ばず、況んや神の道をや。かの凡庸の人間が、一人して神を負ひ佛を呑んだる如き顔するは、我慾の甚しきものなり。

○東洋をして今日の墮落に至らしめたるは宗教の力弱きが爲め也。佛や大なれども力弱し、是れ消極の一方なるが爲め也。キリスト小なるに非ず、積極を併行せり。進取貫徹十字架に至る。之を信するの地方即ち西洋は進むに急なり。

我日本の西洋に戀々として前進に急なる、而も外形を信じて原因を學ばず、結果を學んで根本を學ばず、心に弱きを學んで形に強きを學ぶもの也。是れ日本今日の滅裂を來たせる所以。

心、神に従ふ。神の見る所に耻ぢず。一室の内獨り神を信ず、心既に神に合す、強き事之にまされるは無し。日本今ま之に反す。悔改めざれば亡ぶ。

支那、孔子の敬の弊に流れて形容禮節厚し。形の穩かなる、鳩の如く羊の如し。而して内容また形の如きに至れり。すべて造れる禮容は大弊に陥る。

○心弱き人あり。寢小便たれの妻を得たり。妻は學者なり、寢小便を説くに天災を以てす。夫之に従ふ。此妻、小子を擧ぐるの後は天災を子に嫁して曰く、予は天災を免かれ、天災今や子供にありと。夫また欺かれて、寢小便遂に天災となる。明治四十三年八月の大洪水も、亦た寢小便の天災の類なり。官吏議員は此の才婦なり、人民は此愚夫なり。是れ亡國の亡國たる一斑なり。

○猿、粟畑に粟の穂を盗む。猿、粟のカラを帶として帶に穂をはさむ。人來りて逐ふ。猿逃れんとするも、穂に引かれて逃ぐるを得ず、捕へらると云ふ。人捕はれて又た其人に捕はる。人自ら汝の愚を知らず罪を知らず、

幾度か同一の愚と罪に陥る。此の獸心如何にして悔改むべきか。神を知らざるものは如何にして神を知るべきか。獸心に人知を授くるは難し。今の衆生に對する宗教師は、猿に神を教ふるが如くならざれば、其目的を達せざる也。碎身碎心以て當らざるべからず。

○正造よく忘る。

明治四十四年

日記

(明治四十四年一月—十二月)

○明治四十四年一月一日。谷中村、四方拜。會するもの二十二二人。

○水災問題の性質

水災は無經驗の問題にて、鑛毒の弟なり。火災は衆皆な經驗あれども、水のためしあるものは水邊の者のみ。一般國民の感情薄きを以て、病をして深からしむ。

○錢も無いくせに、又年よりのくせに、此の寒いに奔走すると誹る。然れども、否な、予は至る處の美術善事を見て歡喜に堪へざる也。夫れ美は醜の反對なり。醜を見れば、美必ず其裏にあり。

○深山、常あり。深山今禿けて常なし。大雨は大きく降る。

○一月十八日。本日、田沼町高澤孝八氏方出立。上多田にて萩原廣瀨田中三氏、葛生町にて吉澤光一郎氏を訪

ふ。車夫と二人分晝食をいたゞきて、會澤の石灰商山口氏を訪ふ。今は五十年前、父富藏、小曾戸に兎逐に來りて、名主四郎兵衛氏方にて御馳走を受けたることあり。今の四郎兵衛氏は其子なり、予正造は富藏の子なり。今日其門を通過するに就ては、父の爲に五十年前の御答禮を申す心にて、一寸石灰事務所を訪ふ。主人不在、恰も其妻其子あり。妻は亡萩原政吉氏の娘なり、三十五年目にて面會せしに、互に顔に覚えあり。嬉しさ十分なり。惜かな、四郎兵衛氏の在らざりし事。

小松原角之助、相子高助の兩氏予を送る。會澤にて奇石を拾ふ。小松原氏先づ之を肩にして山を登る。峠を越えてより相子氏に渡す。相子氏梅澤まで持ちつゞけたり。此峠は上り下りにて一里半、石は四貫目に近し。兩氏の丹心忘るべからざるなり。

○洪水に村荒れ多き寺尾村々長は、無論水害は前年よりも多大ならんと覺悟せしに、永野村との境なる要所にて正しく取調べたる結果、已往未曾有と唱へし三十五年の水量よりも優に一尺餘低きに驚きたり云々と語る。同行の巡查も亦怪しむ程案に相違の結果となれり。予は水源と申す談をなせり。人心の水源は最下級人民の下情に在り。水の水源は山に在り。智識の水源は小學に在りと語る。兩人服す。

○二十一日。日光、御幸町旅舎小林兼吉氏方休。

百間石堤崩る。大谷川は、水量二十五年に比せば、論なく大に少なし。

○二十二日。石那田は日光町より六里なり。車上、巡查まで同行、なか／＼高價の水源調査なるかな。

○二十四日。後四時、栗野町助役神山氏方着。直に問ふ、三十五年との比較水量如何。答、四十三年は凡二尺低し。

○亡齋藤清澄氏は予の恩人なり。尾さくの神職にて、明治十二年栃木新聞を發行す。予亦責任を以て編輯人の名を出し、刑罰の責任を引受けて罰せられし事あり。又資本三百圓を出して一個の株主なりき。

○此の夜、飯田に至り、門戸を見て、此の寒さを凌がん爲め、車夫と共にふるへて其家を訪ふ。家婦憐んで爐に近づかしむ。燈あり。予の顔を見て、喜んで、小林久次郎の娘なりと述ぶ。二十六年目に逢ふ。終に車夫と共に厄介となる事になれり。炬燵に火してあたらしむ。後ち夫歸り來る。主人は元より初面會なりしも、喜んで止宿せしめ、且つ暖かき取扱にあづかれり。

○神は必ず人の生命に豫算あり、決算あり、長短あり。人爲の害をもて自ら害せざれば長し。

○高德止宿の感

予今を去る二十六年の已前に此處に止宿す。野菜料理は蕨ぜんまいと油揚にて甘まかりし事を思出で、又た之を望む。主人笑つて今は無しと答ふ。出來秋出來春に皆な賣拂ふなりと云ふ。暫くして夜食出づ、恰も里町の宿屋の如し。布圍にも表敷あり、衛生法なか／＼整備せり。山村の開け、鑛山試掘借區地の數多、深山寸地を餘さず。物質及人智の進歩非常なり。而も其生活の難易を問へば、二十六年前の當時の方、内容はなか／＼

安かりしと答ふ。

○人心我慾、鑛毒濫流。

山林濫伐、鑛毒氾濫。

山林濫伐、河川大洪水。

山林濫伐、山々を崩し、

山林濫伐、河川山岳を崩壊して村々を流亡す。

河川愛憎工事は山林濫伐より来る。水害を減じ且つ豫防せんとして、互に競ふて對岸と戦ひ、終に流水を妨害して、大洪水に加へて更に水層を昂騰せしめ、區域一時に擴張す。如此加害者相聯結して加害益々成功す。

○溪流の細きを見る。仁人の汗するが如し。

村太夫、汗に涙を語れども、下手の聴き手も無きぞ悲しき。

○關東及東北の村落が國中第一に貧乏して居り、從來よりも貧乏して居り、近來特に飢餓に迫るは、形の上に見らるゝ程なり。之を關西中國其他に比せば、天壤の差とも申すべし。今日の關東が著しく亡國の容貌を現はし來れるは、之を全國の上より見て、恰も市街不景氣困難の内容が、場末の生活下情に現はるゝと同一なり。物質の疲弊と人心の變動とは本來の差あり。人心の靈に動あれば顔色に現はる。之に反し財政生活の困難は、手の先足の先とも言ふべき場末より現はる。市街の困難も顔色に現はれざるなし。然れ共市街の中心は財産に富

みて修飾備はりたれば、其内容の辛苦、外面に見えざるなり。夫れ顔面に粉飾せば顔色明かならず、關東々北村落の頽廢甚敷は、無修飾に真相を顯はして一目判然たり。此理未だ盡くさず、考ふべし。

○我れ、去二十七年の春、神田の青年會館にて、新學生歡迎の演説に曰く、東洋に聖人が生まれ現はるゝ也。但し其以前に一度日本は亡ぶ。其時までは個々専門に勵みて其道の聖となるべしと。翌日一學生來り問ふ、何の證據ありて昨夜の如き事を述べしやと。予答、只我心に思ふのみと。

○側らに人あり、群集して太鼓を叩き鐘を鳴らしたりとて、若し眠らんと欲せば、予は安々眠る事を得。側らに酒色に耽るものありとて、予は其娛樂を妨げず。之を教ゆるは、別の日別の場所にてすべし。彼れ狂する時は狂にまかす。心靜かなる時を待つて諭すべし。

○惡に抗する勿れ。益なく害のみ。惡をなす者常に惡にあらず、其心また靜かなる時あらん。其時に諭すべし。益ありて害少なし。

○古き袋に新しき酒を容るゝなかれとは、主の教へたまひし所なり。予老ひて古し、古き袋なり。新たなる教に研かんとせば、古き一切を棄て、學ばざるべからず。古きを棄てるに苦痛あり。苦痛なればとて、伐つて之を棄てざれば、新しき教をうる道にあらず、法にあらず。憤發して古きを棄て、新たなる道を聽きて然るべし。

○封建制度は今尙依然たるのみか、數百年の壓迫に對する復讐的方針にて、我關東及東北の地方を辱かしむ。徳川氏勢威を逞ふして國家を操縱せる當時、薩長土肥等有力なる諸藩も皆な涙を呑んで、二百餘年の星霜を経たり。今や薩長、國家の大勢を握る四十四年。此間徳川に近きものを憎み、自國出身の人々を偏愛して、關東及東北の勢力を奪ふに力めたり。特に關東を賤めり。彼等が關東を見る事、恰も工場の庭園の家畜の如くにして、殆ど人を以て之を見る事なし。四十年の久しき、東京人民遂に一種の習慣を成し、唯命是れ従ふを自家の便利とし、自由自主の氣風を失つて、權門に詔ふの徒のみ多く、其墮落の狀、觀る者をして先天的奴隸民屬の感あらしむるに到りて、尙且つ自ら之を耻ぢざる也。

○天災なし。

天は大なり。人事は小なり。
天心、大なり。人心、小なり。
天は無限なり。人知、限あり。
人を以て天を知るべからず。
天の事は公なり、公にして無限なり。
人は私にして、一感一知のみ。
故に人は天の神の心を知らず。

只だ人、自ら知らずして災に逢ふ。

其の災と見るは天事の變なり、天事の遷なり。

災にはあらざるなり。

只だ人の心にて災と言ふのみ。

天の大なる、災のものにあらず。

○今日の病氣の數々

- 一、文章がわるいと、見ない。
- 一、貧乏人の願出は見ない。
- 一、無勢力の意見はきかぬ。
- 一、正直な忠告は耳にせぬ。
- 一、主義より出る目的は嫌ふ。
- 一、國家も社會も目になくなる。
- 一、都合と私利と虚榮の腦充血。
- 一、下より出る詔諛佞言は、欺かれながらも面白く、尤千萬にきこえる。

其他病者百出は、今日政治上の病氣なり。藥では駄目。法律では駄目。只一つ精神療法あるのみ。

三月二十一日

下野 一野 人

○倦むなかれ。

人の世話しても、人は愚にして世話せし甲斐も無しとて、倦むなかれ。天の神は之を見て居らるゝ也。天の父より、世話せし報あり。神に仕ふるものは倦む事なかれ。

○中心點より割出すとせよ。

書せば、言へば、遠くなる。

一厘の差は千萬里。

議論學派の分離する所以也。

ものすれど、見る人なくば、ほごの神。くづ紙籠の、底の神様。

◎明治四十四年三月二十三日。麴町内幸町旭館中島祐八氏室止宿中。

今朝、尾行巡查中止の申出あり。七ヶ年の尾行を中止せり。

二十二日、二十三日、此兩日旭館中島氏室にて、河川巡視日記を略記す。

◎二十六日。信濃屋方にて、谷中土地回復要求の陳情書をつくる。

陳情書

「右谷中村買収は、足尾銅山鑛毒の沈澱池問題にして、治水問題にあらざるを、妄りに治水問題とせり。假り

に利根川の治水問題とせば、栃木一縣の自儘にすべきものにあらず。或は古來人民三百八十戸を圍繞せる谷中の堤防を破り、或は三十七年復舊工事費の支出を止め、故意を以て人民を水中に没する三年、而して後人民の苦痛に乗じて、三十八年の春より谷中買収に着手す。而も其名に苦み、法律に無き文字を造りて潜水と唱へ、日露交戦壯丁出征の不在中、老弱を壓迫して自治團體を破り、三十九年春殘留民が舊堤の修繕をなすや、土木吏多數人夫と共に襲來して之を破りたり。かくて前後九ヶ年の長き、人民を水中に没せるのみならず、良土殆ど一千町の耕作を妨害して不仕付地となし、四十年一月に至り、始めて内閣總理大臣侯爵西園寺公望より潜水池認定の布令となれり。然らば其以前に於ける栃木縣廳の行動、日露戰爭中の亂暴恐喝は、是れ悉く無法律なる事を幾重にも確かめたるものなり。

谷中の良土一千町に近し。年々天與の收穫二十五萬圓の上に出づるものを不仕付けとする、見るに忍びざる所なり。現當局者は、速に前當局者の罪狀を償ひ、先づ谷中一圓の土地を回復し、早く天下に謝する所あれ。谷中を回復せば、四隣郡村も亦回復せん。乞ふ速に谷中の堤防を修繕して、本年より相當の收穫を期せられよ。之を要求せん爲に陳情す。」

○利根川流水の滞りは、きたなき草稿を謄寫するに同じ。筆を急ぐ能はず。所々妨害工事多く、句々字々一々拾ひ書きすれば也。既にして清書成り、而る後謄寫せば、一行一射其の速かなる事恰も流水の如し。即ち知る、流水は途中滞るものなきを尊しとす。

◎三月三十日。芝口信濃屋より越中屋を経て、去三十四年〔直訴の時〕の車夫竹田彌三吉氏を訪ふ。

○虚心と空袋と同じからず。虚心は神なり。空袋は空なり、死物なり。

虚心は靈なり、生物なり。

靈心即ち萬物皆我有。

此心、明德なり。

○救世軍勞働部の青木氏曰く、勞働者賑やかなる時は穩かなり。穩かなる時は、内容穩やかならぬ事あり云々。

○法然親鸞の六百年忌六百五十年忌、二百萬の人を集めたり。今は策士の名僧多し、政略の知識多し。法然親鸞は京都に在らずして天國に在り、山村老婆の方寸に在り。京都に集まる者は、恰も燈火に寄る飛蟲の類のみ。あはれ、徒らに身を焼て死するのみ、何の極樂あらん。

○冠婚葬祭の悲

禮既に奢侈に流れ、不相應の費用を要して身の程を知らず、社會の義理に干渉せられ、本然を失ひて禮の費用過大となり、父母死して子喪に居るを得ず、子死して父母悲むの餘地なし。嫁にやる、婿を取るに、借金に財を盡し、冠して不義をなさねばならぬ負債に責めらる。而して之を禮と言ふ、豈馬鹿々々しからずや。

○真正に徒勞なし。

昨四十三年八月十一日、大洪水なりとて世上騒多し。當路及議員、視察に出でたり。然れ共貴族的行動にして眞實に至らず。予亦視察に出づ。公職の人々案外奔走少なし、故に予奔走す。是れ無用の如しと雖も、決して然らず。奔走せば得るものあり、徒勞にあらず。奔走せざるものは如何、得るものなし。一は旅費を吝んで物を得ず、責を盡くさず。一は旅費を使ふても得るものあり。公共上の奔走毫も損なく、益のみ。

○宇宙の大なるに感じて、西行法師も、

なげ、とて、月やは物を思はする。かこち顔なる我がなみだかな。

是れ感ぜし時、月を見たるなり。月を見て感じたるにはあらず。大御神の存在を崇めば、其のありがたき事涙の垂るゝばかりなり。

此理を知らざるものは、左の如くよむべきのみ。

大空の月見るごとに悲けしれ。我が故郷を思ひ出で、は。

此歌は、大空の事を知らず、月は只だ何處にて見るも同じと思ふまでの淺き思想なり。西行のは、感ずる時月を見たので、月をかりて我が材料とはせしなり、思深し。然れども、悲しむは未だ宇宙の極に到らざるもの、如し。

○眞理は劍光の間に存すとかや。

樂觀溫氣の間に靈火起らず。

○政府の不善は人民の不善なり。政府の腐敗は人民の腐敗なり。故に政府の悪事は、人民正しからざる反響也。宗教は此反響を大ならしむ。宗教にして反響なきは、名は鏡にして照らさざるに同じ。

人民善にして政府善ならざるはなし。人民善者多く、政府猛獣の行爲あらば、之を獵して善政を造るべきも、宗教が善民をして善民たらしむるの務に至りては、目を貫くの精神を要す。怠るべからず。

◎五月十二日。皇太子殿下の來らるゝとて、御厨警察部は田中正造に退去を要求す。是は梁田の中山氏方にて。

○人は萬物中に生育するものなり。人類のみと思ふは過りなり。況んや我獨りと思ふは過りの大なるものなり。

◎五月十四日。清水屋にて、

草露を、杖もて打たば、散りぬべし。玉くだくとも、月は宿らん。

○一身の善事を爲すは、他人と評議するに及び不申。

朝早く起きて働くは、よからずや。

今日一日、我身の罪となる事を致し申問敷。

他人の悪事を語らず。

我身の罪若しくはやりそこねをば、人に語りて改むべし。草々。

右明治四十四年五月十四日の理想

正 造

○人は萬物の靈でなくもよろし。萬物の奴隸でもよろし、奉公人よろし、小使よろし。正直なれば、馬でも鹿で

もよろし。人は萬物の中に雜居し、明よく萬事を寫し、和して萬事に反かす、其身のあやまちを改め、其身の元氣を發らき、誠を推して孤立せず、即ち靈たるに近し。是れ今日の考なり。尙ほ考を盡し、言葉を進めんとす。

○予は兄弟親戚の安否を問ふのいとまもなくして、徒らに日月の過ぐるを知らず。察せられよ。

大雨に、うたれた、かれ、重荷ひく、牛の車の、あとかたもなし。

○現世の必要は、高等不良國民感化教育場。

○法律なりとさへ一喝すれば服従する、是れ關東人なりと、薩長は言ふ。

○社會は日々に變化す。末。

神及人道は不變なり。本。

不變につとめよ、本を忘れず……。

聖人となるは、小學の教にて餘あり。

只だ實行にあり、信仰にあり。

一意了心、正心誠意に行ふにあり。

○従來は、表面に居て裏面の事までも絶叫したけれども、今は裏面に居て裏面の悪事を悔改めさせるので、悪事

を絶叫するものでない。

○陛下の御下賜金は、金の多少にあらず、難有き物と知れ。難有きとは、元と租税を出し、幾多の手数を經て、陛下に入り、陛下の玉手を経、陛下の理想を経、陛下の恩澤の名と實となりて、國民の頭上に降り來るものなれば、容易ならざるものなれば、難有きなり。

是れ農民の麥を賣り米を賣りたる収入金の難有きと同一なりとす。米麥を穫るの艱難苦節の若干を凌ぎて、茲に至るものなれば也。かの一攫千金の投機より得たる財寶と同日の義にあらざるは、論を待たざる也。

○進歩は芋を洗ふが如し。同様類似の古き談を、幾回もくくり返へすと、自然に眞理に徹底するものなり。誠に芋を洗ふが如し。

○予新聞を見ざる事三十餘年。故に予の談は皆な古しとて人は笑ふ。而も古しくと笑ふ人は、自ら行はざるなり。只だ古しくと言ふのみなり。予は之に反し、古き事を語る、行ふ事を語る。行はざる事を語らず。今の人は知るのみ、行には用なし。我は却て之を笑ふ。

○予一日、五十部の山中に、川島長十郎氏を別業に訪ふ。山深からざるも世塵に遠く、谷深からざるも、主人の趣味言外にあり。樹茂り水清く、茶淡くして甘し。一夜厄介となる。予、主人に告げて曰く、希くば予等の外また客の來らざるを。又曰く、多く戸口の増加せざるをと。人の多きを忌むにあらず、客の來るを厭ふにあらず、只だおへつらひの話多きものなれば也、耳と目を汚がす事多きものなれば也。神を養ふは、森林中に黙

坐するにあり。上知は人なき一室に正坐する時に發す。人を遠くるには非ず。騷がされ汚さるゝを怖れて也。

○八ヶ年九ヶ年十ヶ年目にて舊友を訪ふ。此間、人生の變化多く、悲慘に陥れるもの十の八九にして、幸を得たるもの僅に一二に過ぎず。實に怖ろしき有様なり。其一二を言はば、或は夫死して子供と借金とを殘されたるあり。其死因を尋ねれば概ね酒の上なり。偶々財産あれば必ず惡魔出入して、後家を馬鹿して之を失はしめ、或は相場に誘惑して、祖先積年の蓄積、一朝雲烟に化し、一夜乞食となして願みす。

○近年の水害火災、是れ皆な知識の作用なり、決して天のなせるものにあらざるなり。政治經濟法律技藝、皆な知識の作用なり。社會の全體が虚榮詐術惡意より出づるものとせば、是れ皆な知識の良否にあらざるなし。溫良恭謙なる智慧は、其人其物が即ち公益幸福なり、國家社會の幸なり。若夫れ人々、虚偽權謀、弱肉は以て強食を恣にして憚るなしとせば、是れ其學文其人格の素行なき學生にして、國家社會の不幸たり。

國家社會は一人より始まる。一人の言行、天地に背き人倫に反せば、天下皆然りとす。一人善なれば天下皆善なり。一人を重しとす。國運の前途を知らんと欲せば、學生の品行を見るべし。學生一人の品行は、よく天下を寫し得て掩ふべからざれば也。

○一人、國を憂へば、其國は其人の物なり。天の父は其人の物と見るなり。

○御厨村停車場の大野と申す茶店の老婆に、茶代を忘れたれば、橋本高十郎と申す知己に、十錢立替を頼みやる時、

お茶を賣る婆あに、十錢損かけた。罪は天地に、容る、せもなし。

○舊作を直ぼして、

降る雪の、やみかたなくば、つもれかし。やをら、ふみ立て、けたて行かなん。

○破れば破る、なり。修むるは、破るの義に反す。山を破り、河を破り、田園を破り、町村を破り、經濟を破り、國法を破り、人道を破り、すべて自然の成績及び法則を破りて、天地の構造に疵つけ、人類及生物を殺し、神も人も眼中になく、宇宙の萬象を損するもの之を破るとは言ふ。誰か改修と言ふ。決して許さざる也。何の爲に此の如き事をなす。一の足尾銅山の成功を思ふのみ。 六月三日しるす。

○山林濫伐は國家の自殺なり。天のなせる災は避くべし、自らなせる災は避くべからず。

○日本、正坐、靜坐、聖坐、靈坐を實踐せざれば死せん。若し夫れ之を實行せば、百病全治す。費用多き處眞理なし。眞理の存する所必ず費用なし。

○明治四十四年六月四日。昨日、岡田虎二郎氏に靜坐を學ぶ。座百數十人を以て充たせり。座中片山醫學博士夫婦ありて、質問あり、答あり。岡田氏曰く、「予の目的は七情の調和に在り、音樂の如し。その結果は萬事に及び、萬能の發展となる。是れ古人みな曾て言へる所、今予之をまとめ、一以て之を貫くにあり云々。」片山氏唯々として去る。

○人の壽、百年と云ひ或は百二十年と云ふ。人の生命はコンなものに非ず。人は死ぬまいと思へば、死なずしてよいのである。人の生命は他物の爲に滅るのみで、へり盡くして死ぬのです。へらざれば死なぬのである。生者必滅にあらず、生者必生である。

人また他物をヘラス。食ふ時、他物をヘラス、衣る時ヘラス、居る時ヘラス、歩く時ヘラス、此のヘラス時、形を變ず。形を變ずるはヘラスに非ず。人、形に於て死せる如きも、死せるには非ず、只だ形の變ずるのみ。生命は依然たり。音に死せざるのみか、愈々活動して天地の間に働いて居る。這ふ蟲の蝶と化して空中を飛びめぐるが如し。蟲としては花の露をなめる事の出来ぬものが、蝶となれば花に戯れ蜜を嘗め、或は風に乗りて樂々空を飛びめぐり、早き事一時に數里をも走るに非ずや。鳥の來りて之を啄み食ふは、他物に身體を奪はるるなり。人や萬物の靈たり。萬物に犯さるゝことなし。犯さるゝは油斷怠りなり。

○日暮里金杉に暖き和風あり、茲に至れば忽ち天國なり。茲を去て巢鴨新井翁を見る、亦天國なり。

○對 戰。

戰ふべし。政府の存在する間は政府とも戰ふべし。敵國襲ひ來らば戰ふべし。人侵さば戰ふべし。其の戰ふに道あり。腕力殺伐を以てするものと、天理によりて廣く教へて勝つものと、二つの大別あり。予は此の天理によりて戰ふものにて、斃れても止まざるは我道なり。天理を解し此道を實踐するもの多からば、即ち勝利の大なるものなり。道に二途あり。殺伐を以てするものを野獸の戰とし、天理を以てするものを人類の戰とす。人

類は天理を以てするもの也。野獸、言語少なし。意趣の通ぜざるより、是非を腕力に決す。人は人語を解す。人語あるもの、何を苦んでか腕力を以てせん。

今や人類、人の行を學ばず、つとめず。人互に獸を學びて殺伐を事とす。

世に非戰を唱ふるものあれど、凡そ戰ふの心なきものは常に食はる。戰ふの道を學ぶものにして、始めて宗教を成就するを得べし。

果して此道を得ば、天地和合し人類和合す。即ち戰なし、戰の用なき也。

◎十八日。朝偶感。

我を去り、我を生ず、而して後漸く我を去る。我を生ずるは成なり、小成なり。小成をなすに及で、小成破れ去る。

○高田仙次郎氏の嫁女、朝早く起きて小便す。小便所の前に竹の垣根あり、朝顔からみ葉多し。嫁女ちらし鼻をかみ、葉を一ツつまみて鼻を拭ふ。朝顔喜んで、花の笑ふを見たり。加賀の千代が、

朝顔に、つるべ取られて、もらひ水。

是は愛なり。愛にして智なり。愛情を其まゝに寫し出したる名句なり。高田氏の嫁女は、無邪氣にして無念無想なり。間然するを得ず。面白し、難有し。

昨夕、此高田氏に泊す。高田氏の妻女、病に臥す。嫁女、母の背をさすらんと膝を進む。母喜べり。正造、軒

下に設けたる風呂あたゝかに入る。嫁女來りて予の背中を洗ふ。予大に喜ぶ。背中を摩り背中を洗ふの慈愛、何となく心地よし。今朝、朝顔の葉一葉摘みとりて鼻を拭ふ。朝顔うらみ無し。花喜びて笑ひつゝ、咲けり。

悪しき心にて花を供せば佛喜ばず。僞を以て祈らば神喜ばず。たとひ表に禮節を飾るも、心に汚れあらば、何の喜かあらん。

○久々にて新井奥濠氏を訪ふて泊す。厄介となる。安眠す。殆ど深山に寝たるが如し。清風靜かに、身邊和らかに、神心清きを感じ。

○國民の智識習慣を押へるは悪し。又無理にすゝめるは悪し。只自由にして、よき道をすゝめるの一方あるのみ。徳を進めば知自から進む。

◎明治四十四年六月廿一日。巢鴨新井靈學堂より日暮里に歸る。

此日、彫刻家荻原守衛氏の友人畫家齋藤與里氏の事につきて、新井氏の篤き御取扱あり。此の荻原氏の件は、曾て相馬愛藏氏より木下尙江氏へ傳へられ、木下氏より逸見君へ傳へ、逸見君より正造へ傳へられたるを辭したりしが、後ち相馬氏に淀橋町にて逢ひし時、荻原氏は拙工にあらずと言はれしも、其時正造答へざりしが、後ち心付き、荻原氏を拙工として辭したるにあらざれば、若し左様に思召されては先方に大失禮、たとひ巧にもせよ拙にもせよ、我を信じて肖像を作せんとするは難有き事なり、我は之を厚く敬ひ且つ禮を以てせざるべからず。況んや荻原氏の如き高尚の人格特等なるもの、苟も我を愛したまはるに對して、無禮となるが如き事

あらば恐懼措く能はざれば、予は直に木下氏を以て御詫申上ぐる事となし、又此事を逸見氏へも申上げて歸國いたせり。暫く地方をめぐり、一二月を経て東京へ來りて聞けば、荻原氏は急病にて死去せられたりとの事に驚愕せしも、俗務多忙の爲め木下氏が御詫して呉れしや、其の運びの如何をさへ未だ伺ひもせず。光陰矢の如くして今日に至り、何とも恐入て居るのみ、思出しては恐縮して居るのみ。右齋藤與里氏の赤誠なる要求に付ては、愈々恐懼に堪へざれば、謹で其の御厚意に背かざらん事をつとむべきなり。

○神は物をさして教ゆる事なし。すべてを育するのみ。只凡眼者流は、物あり音あり聲あらざれば得難し。可憐かな。

○去る廿六年の頃、下野の郷里なる戸奈良村の石井五作氏を訪ひしに、父五六氏は既に没し、五作氏尙ほ年若なりき。座に文晁の畫幅あり、竹藪の茂れる中に一茅屋を畫けるものなりしが、其の竹藪の忘れ難く、機を得て再見せん事を願ひ居たる程なりしに、石井氏不圖火災にて、かの文晁も焼失せりと聞きて愛惜止まず、屢々夢にまで見たりき。然るに昨日、岡田氏の靜坐に列せる折、かの竹藪明々胸に浮んで如何ともする事能はず、偏に神を靜にして坐せり。嗚呼、是れ無念無想なるか、將た精神落付かざるが爲に然るか。或は名筆自ら天地の眞を傳へて、是れが爲に予が如き一點繪事を解せざるもの、腦裡にさへ、深く印して去らざるか。

○巢鴨町安部磯雄氏嚴父權之丞君、年七十七。昨二十二日朝、予早く同家に至る。嚴父及慈母とも早く起きられて、窓を開き、予のイめるを見て老人の部屋に入れられ、火と湯を賜はる。談話年數に及ぶ、予年七十。安部

老人は七十七。予問ふ、酒は如何。老人答、酒も烟草も茶も湯も飲まず、只だ水のみと。予大に感ず。予は未だ茶と烟草とをのめり、老に及ばざるを耻づ。よりて今日より茶をやめて水を呑む事とせり。但し人より下ださる時、多く渴きたる時は呑む事あらん、常には茶をやむべし。終に老の門人となりて、昨夕刻より冷水を呑み、今朝また冷水を呑めり。昨年夏、新井奥遠翁を訪ふて一泊せし時、朝起きの一事を學べり。後ち朝起きをなす、常の人の如し。予は從來朝寢なりしが、昨年夏來、新井翁の教をうけて憤發朝起を研究す。今回は安部權之丞翁の教によりて、冷水を呑むことに決す。

案するに、予少年の頃は冷水を呑めり。十八九歳の頃より之をやめ、年二十二の頃よりして茶を飲めり。事故ありて交際繁く、茶を多く呑みて病を得、胃痛となり、殆ど生命危かりし時に、事故あり入檻一年有餘に及んで、幸に胃病は回復せり。後また三年入檻して、胃痛は全治せり。而も茶を水に改むるに心付かず。却て肉食を習ひ、又酒を飲み、肉體肉太とり、總身貫目二十貫を越ゆ。年五十九にして、酒毒を怖れて之を禁じたりしも、未だ茶と水との交替に心付かざりき。前後五十年。昨日安部老人の健康非凡に感じ、回顧五十年前の少年時に歸りて、即ち水を呑むに決せり。さて水の一條は已に老人の門に入るも、烟草の一事を奈何せん。聖書に古き皮袋に新しき酒を容る、なかれとあり。染致せる悪習慣の可怖、此の如し。予大に悔ひたり。改むるは袋なり。肉食に造りし皮袋を改めて、野菜の袋を造りて、すべて人の食すべきものを食はんとす。

○東京市は人類百種の集合、上は貴顯より下乞食に至る迄、關係脉絡離るべからず、痛痒の感せざるなし。一見

感ぜざるが如きも、實は感ぜざるなし。感ぜざるはありとも、通ぜざるはなし。通じて感ぜざるは、毛の如く爪の如し。又た病の爲、片身若くは一局部の痲痺して神經の通ぜざるあり。形の貧富貴賤皆同感を本義本體とす。而して貴賤貧富多能多學多智多藝、皆茲に集め、一切に其趣味を益す。恰も摺鉢に味噌胡麻を摺るが如し、摺れば摺る程趣味を益す。東京は實に日本の天國なり。東京にして天國たらば、四方皆な之に習はん。東京若し濁らば、水源の濁るが如し。東京の人才濁らば、影響神速にして、日本忽ち大腐敗に陥らん。怖れて怖れざるべけんや。就中政治宗教の人々、其の責任の甚大なる、天に代はり地に代はり人に代はりて、責任を負はざるべからざる也。嗚呼。

○對 戰。(續)

人生よく戦ふべし。只だ戦の文字は戈の義なり、腕力の義なり、文字に拘泥すべからず。こゝに「戦ふ」とは、天道を以て戦ふなり、人道を以て戦ふなり。

道を以て戦ふは、戦ふに非ず、天理の貫徹なり、人道の貫徹なり、是れ神に仕ふるもの、履むべき正道なり。人、此の正道を履む者なきが爲めに、宗教家なるもの顯はれたり。衆を教へて倦ます。粉骨碎身、衆を救ふの外一物なし。天は人に日常生活に必要な糧を賜ふ。人と人との間に交通あり。其法其道にかなへば衆皆安し。衆をして其道を得せしめんとす、是れ人道なり。衆皆安全に業に務め安全に眠るべし。率先此道を開く、假令億兆と共に安んずる能はざるも、目的は即ち神の如し。萬事を擲ち家棄て親をも妻子をも棄てる如きは、難

きが如きも、先見者たる責任の上より見れば易々の業なり。何故に易しと言ふか。自分の物を棄つるは、他人の物を棄つるよりも易ければ也。キリストが十字架に甘んずるは、飴を嘗めるが如し。敢て好んで爲せるにあらず。災の到るや、豫め知る。知つて避けず、誠に水火を避けず。道の履むべきを見て、水火をも怖れざる彼の如し。財産妻子を棄て、働くの宗教家にあらざれば、能く目的を達するなし。人皆な徒らに迷霧の中に徘徊せんのみ。

今の人類に主人なし。盜賊の横行する宜ならずや。

衆多の常の業は、常の生活の用なり。

農は野に戦ふ如くすべし。

商は市に戦ふ如くすべし。

工は工に戦ふ如くすべし。

其他百般の技藝皆然り、只だ正を履むあるのみ。

正を履むに法あり。溫良なり、恭儉なり、謙讓なり、徳行の備あるを要す。

果して此道を以てせば、勞苦なくして世界は富み且豊かなり。何ぞ殺伐たる、罪惡たる戦争を用ひんや、用ふるの處なきを奈何せん 一方には天與の産業を妨害して國を破り、國をも人をも亡滅せしめつゝ、一方には多大の租税血税を誅求し 財を滅し人を滅して尙ほ且つ止まざらんか、是れ人類の世にあらず。

是れ予が無戦主義の戦を主張する概要なり。盡くさず、尙ほ餘暇あり次第に追述すべし。

○予は無學なり。故に他の長所を翼賛するを得ず。むしろ他の短所缺點罪惡を彈正して忠告すべし。他の缺點を見るは、無學もなし易し。短を攻めて直うするを得ば、結果は則ち長所を翼賛すると同じくして、寧ろ長所を譽むるよりも誠實なり、又た切にして實多し。是れ容易に人の言ふ能はず爲すこと能はざる所を爲し、且つ叫ぶものなれば也。然れ共予は人を憎むものにあらず、すべて忠告なり。改むれば則ち止む。

◎六月二十四日。正造曰く、七情調和、一情を恣にせざるを可しとす。而も情は一に傾くものなり。傾かざれば可なり。

○道を同うして、方法を異にす。

◎六月二十五日。正造曰く、天眼は誠の光なり。誠眼、正眼、精神眼、上知眼の力ある光にて皆な誠なり、天眼の術と云ふ。

○正造の演説を禁ずるの運動は、なか／＼克く行届きたり。然るに之を知らざる群馬縣新田郡九合村小學校教員の發起にて、同學校卒業者年齢三十八歳以下の青年矯風會の爲に、學術講話會を同村某寺院に開けり。此日正造何心なく足利より行き、先づ學校に入りて教師に面會し、次に村役場に判り村長に面會し、有志橋壁萬作氏を訪ふて休息、定刻を待て會場に赴けり。途に聞く、警察は二人の巡查を同村に放ち、正造の演説危険なり青年に聽かしむるなかれ云々と觸れ、又た此發起人の何者なるか、何の緣故を以て同人を知るか、何の必要あり

て演説會を開くかと、村中の重なる者に尋ねたりと。時あたかも農繁、加ふるに蠶兒眞最中に至る一兩日前にて、旁々參會者は覺束なかるべきに、圖らざりき、村中有數有爲の人物青年一百名内外。正造が演題は『賤が家の月』と題し、登壇先づ警察官の見えざるを残り多しとして、近方を探さしむ。警官見えす。正造は其れこそ危険なりと言ひ、賤が家の月を演じて、殆ど一時四十分に涉れり。終に臨んで曰く、『予年今ま七十なり、而も健康法を岡田氏に學べり。七十の老軀、健康を學ぶは一に精神の健康を學ぶにあり。而して効は著しく、今や一時間の演舌に疲勞なし、高聲減ぜず、是れ自らも驚く所なり。今を去る十年前、衆議院に於て長演説をなすや、心臓踊り、息切れ、汗垂れ、目暗らめり。十年前にして既に此の如し。正造肺臟は普通なれども心臓甚だ弱し、是れ此の息切れをなし疲勞せる所以なり。十年前の正造は此の疲勞ありしに不拘、靜坐の功能効驗は、今日の長演説に於て自ら其成績に驚く。諸君、年の老弱長幼に限らず、良い事は直に取て我師とし、我道の便とすべきなり云々。』にて壇を下り、同日、栃木縣足利郡御厨村に歸り泊す。後に聞く、發起人は其筋の尋問を受けたるものすらありと。

○曾て正造は、鑛毒問題の爲め、谷中村打潰反對に立てる爲め、去三十七年より警官の監する所となり、三十九年より三ヶ年餘の豫戒令、尙ほ引續き巡查同行尾行秘行あり、正造の事業を妨害して今日に至る。先日代議士某、正造の事に付其筋の人に計るによりて、東京にては之を止めたりしも、地方に於ては足尾銅山黨充滿するを以て、正造に對する妨害前の如し。

○我と道を同ふするものは、我と同じ。

我子を思はざるもの、いかで人の子を思はん。

小を破れば大事破る。

一人の乞食を救ふは、世をも世界をも救ふなり。

世界を呑む人は飢の。

小を詳にせば大なり。

大ならんとせば小なり。

衆皆勞を避けば衆皆苦死。

衆皆勞を取らば皆安住。

游泳は沈むの法を先にす。

近年日本にキリスト來り、積極的進取的精神靈動の氣象が新天地を開きてより、東洋古來の佛教驚きて、キリスト教撲滅を叫べり。此時よりして佛教徒が窈かにキリスト教の書を讀んで深く研究せしは、佛心一化の幸なり。是れよりして佛の消極的の一方はソロ／＼轉じて積極となる。但し積極は假借にして消極を要素とすと雖も、佛の面目こゝに改まる。

キリスト教徒は、教書に變化を加へず折衷せず取捨せず方便せず増減せず、昔より有り來りのまゝ、其儘を布教傳道するが故に、時に人心に適せず、時に人情にはまらざるは固より也。世に媚び諂ふ事なきはキリストの特色なり。古へに泥むの短所こそあれ、今に諂はざるは誠に天晴なりとす。此世に諂はざるはキリストの特色のみならず、古き日本佛教をして精神的進取的佛教に至らしめたり。キリスト信者の數は大ならざるも、形は大ならざるも、形の小にして無勢力なるが如きも、其精神に見よ、其骨髓に見よ、今は却て佛教をも勵まし、他教をも刺撃して、或は研究の材となり、或は他山の石となれり。此一事のみにても、キリストの光の程こそ難有き次第なり。

信長時代數百年前の佛徒は、戰爭をなして武門を苦しめたり。後ち年を経て佛力漸く世とよく推移し、果ては武門の機關となり、行政の一機械となり、佛力忽ち衰へて、寺院の外形のみとなりて三百年。此間の僧侶、言葉を造れり。その遁辭に曰く、佛は俗事に頓着なきを本意とすと、無爲にして世を離れ山に入り、一身を清くし、或は身を潔き菴に置きて、偏に南無阿彌陀佛を唱へば極樂淨土に至るに足るとして、毫も人事に關せず、政治に關せず、俗事一切をすて、本意なりとせり。是れ始め遁辭より出で、難きを避けたれば、忽ち良心腐れて此數百年間、心に佛なるもの無かりき。

徳川亡び新政に改まりてより、キリスト入來りて新に面目を照らせり、俗耳を驚かせり。キリストは勢に依らず、神と共に此世に立ちて働くのみ。故に動物禽獸と雖も、人より優る處ありて神の行と同じきものは、我々

之を欲し之を尊びて、重く深く愛せざるを得ず。又其形は人なりとも、其心其行、禽獸蟲魚にも劣るならば、人とは見ざるなり。神より見れば、只だ神の道を行ふ者を神の子とせん、何ぞ人と動物との別あらんや。されば人道とは人と人の事なり。禽獸に劣る人外の惡魔に對しては、人道を語るよしも無く、恰も豚に眞珠を投げ與ふるよりも愚にして且危險なり。キリストは人と普通動物との區別ありて、只だ天を尊び天を愛し神を崇め神に仕ふるの一法あるのみ。彼の他宗他派が、人畜を混同して徒に多數頭勢力多數金力をほこると、同日のものに非ず。アーメン。

右六月廿六日夕刻、日本橋小舟町靜岡屋にて書す。

○

今の宗教諸派の行を見るに、下級人民正眞なる人の生活にも及ばざる弱き精神なり。下級人民の生活を見よ。井の水を呑み、土を耕して食す。何の惡事をもなさず、朝早くより夜まで働きて、而も其得たる半以上をば他に取られ、僅に其殘餘を以て細き露命をつなぎ居るのみ。何一つ餘計の樂みとてなし。只だ無盡藏に備へたる神の公園にて、月や花のやさしき風致を見るのみ。見て、見たりともせず、月や花にあこがれもせず。花見とて別に目も手間も費すにあらず、自然眼中に落ち來るものを取りて樂みとするのみ。聖人と雖も此樂みの外は無し。否な、聖人にあらざれば、此樂みを樂むなし。

今の世の宗教は費用を要す。曰く、費用無ければ濟度する能はず、智識なければ濟度すると能はざるなりと。

此の二つのものを充て、濟度す。之を充たすの方法、罪たるなり。先づ罪を造りて人の財を集め、之を散じて濟度と言ふ。今の世の辛き税吏と異なるなし。

政治の害は、形に見ゆるもの多し。宗教の害は、無形にして見えざるもの多し。政治の害は、有形より推して精神を亡ぼす。宗教の害は、精神より出で、精神を亡ぼすなり。

他人の物を取りて之を他に施すを以て慈善とせば、皆な無用の慈善なり。政治も、眞の政治となり自然の租税となりての集金は可なり。自然集金の程度は、即ち政治費の必要程度なり。宗教費の如き亦同じ。自然に來るもの到るものを集むるを可とす。即ち然らざるを得ざるなり。

○凡そ罪をなすものとは、他人の困まることをなすを言ひ、又は天よりうけ得たる身體を自ら破るを言ふ。今ま自殺せるものあり。汝の心には申譯ありとするも、身體に何の罪ありや。罪もなく關係もなき身體を殺して、汝の申譯となすは何ぞや。夫れ身體は身靈の棲む處なり、神靈の家屋なり、又機械なり。神靈常に此の家屋に棲み、此機械を用ゐて、御旨の發動所とせり。たとへば貧にして自ら生くる能はざる、神は何故に之を救はざるか。神は救はざるに非ず。此身は神のものなり。神のものなれば、神も亦飢へたり。何故に神飢ゆるか。惡魔の増長、神を凌ぎて神をも飢やしぬ。教へて曰く、天に誓ふなかれ、地に誓ふなかれ。夫れ神の存在所までも破るは惡魔の仕業なり。

明治四十四年六月廿七日、小舟町旅舎靜岡屋に於て。

何故に悪魔を退治せざるか。人自ら悪魔を退治する事を怠れば也。悪魔退治に力を薄ふするものは、既に悪魔につかれたる人也。悪魔につかれて悪魔を憎まず。汝既に悪魔の奴隸たり。皆自ら悪魔を養成して神の教育をなさず。自殺の道是れなり。自殺は悪魔の仕業なり。國の自殺、亦悪魔の力なり。

故にキリストは教に先ちて悪魔を追拂へり。神の目には悪魔の見ゆるが故に、先づ之を追拂ふなれど、已に悪魔につかれたる人々は、却て之を不思議とせり。

右六月廿七日午前、小舟町静岡屋にて。

正造識

○悪い事してはならんと言ふて、止めさせ改めさせんとしたとて、止みもせず改まりもせぬものであります。本人自ら悪いと云ふ事を知れば、悪い事はしない。承知して悪い事するとは、未だ盡くさぬ談なり。本人神の靈妙に至れば、悪い事する處では無い、身ぶるひして避け逃けて、悪い事の近くにも寄りつかぬやうになるものであります。たとへば面白くなければ爲さぬ、趣味が無ければ爲さぬので、悪い事も面白い楽しいからするので、悪いにも十分趣味を含んで居る。其の悪い趣味が追々滅し盡くして無趣味となり、面白くも何とも無い事になる。面白くも何とも無いのを、好んで爲す者は無い。そこで終に悪い事は厭になる。いやになり、嫌ひになり、怖はくなり、憎らしくなる。かく自身より厭になる。何の悪い事をなすべきや。

○喜、怒、哀、樂、憂、憎、慾、皆な自ら修むるの要素なり。仁人は善い事をなすに喜び、善い事をなすに怒り、よい事をなすに哀しみ、よい事をなすに楽しむ。之を人の道、天のまゝなる人の正情と言ふ也。君子とも言ひ正人とも言ふなり。

一旦其身心、神となる日は、悪い事などは數の外の問題となり、善い事も別に珍しくつとめて爲すほどのので無い。爲す事は皆な善い事で、常になす事は皆な善い事のみとなる。其上流に至れば、善いとも思はず、思はれず、見るもの只だ神のみ天地の神のみとなり、人の知る事の少ない程善い仕事で上品なのです。知る人の多いのは、善い仕事の上品とは申し難い。神の外、人の知らぬものを以て、善い事の上品と申します。

悪い事の人に知れぬは僥倖と申します。悪い事して人に知れねば、人類界の刑を免かる、故に僥倖と申す。善い事して人に知れざるは、不幸に似て不幸にあらず。天は必ず之を知りて、天より多大の報あるものなればなり。天より賜はる報酬は辭退するを得ず。

○人は善い事をするの性に生れたるものなり。天の性に従へば心持よく、天にそむけば心くるし。夫故に善に進むは順風に帆前船の行くが如し。今の人、善をなすは難い事とし、たま／＼此道を踐む人を、義人とか、眞人とか、容易に爲し得ぬ事でもなす珍らしき人の如く言ふは、恰も牛の角を珍らしと見るが如し。善い事は人生天賦其のまゝのものである。孔子七十にして曰く、七十にして心の欲する所に従へども則を越えずと。普通人此言を聞けば、中々至難の事なれども、孔子には少しも難儀でないのみか、天に従ふの快樂に乗じて、手も足も心もノビ／＼として居るのです。少しも規則に縛られて居る心は無い。

わけのほる麓の道は、多けれど、同じ高根の月を見るかな。

古人

わけのほる麓の道は、多けれど、ま虫のすまぬ、山道もなし。

正造

◎六月三十日。静坐會場、楞伽山天眼寺より日暮里本行寺に移る。

此日、岡田主未だ座に在らず。信者座に満ち、已に動けり。岡田氏の座に在ると在らざるとに拘らざる也。神を信ず、神在ますが如しと。妙。此の如きは言語を以て説明するの限にあらず、能はざるなり。夫れ靈は通なり。靈は言なし。聖を以て言はしめ、又た萬民をして言はしむる也。

正造又曰く、眞理は人の教を以て知るものに非ず、他人の説明を待つて發明するものに非ず。キリスト曰く、祈と斷食とにあらざれば能はざるなりと。神にして尙然り。神を以て神を見る、尙幽遠なり。而も近きは即ち我身にあり。遠近大小明白無別。之を約せんと欲せば一物なし。

◎己の知らざる罪は、知らざるの罪なり。知らざるの罪と雖も、天を破り神を汚がせば、罪を神に得、天に得るなり。而も神は之をゆるし、天地亦罪として刑せず。其のすでに己れ知るの罪は、逃れ避るの道なし。然れども知るに二様あり。己れ悪いと知りつゝも、神には知られざるべし、人には見られざるべし、神も見ざるべし人も知らざるべしとする愚昧の罪は、己獨りの罪にして、たとひ神は之を咎めずと雖も、己の神は之を己の罪

とす。己の神は即ち天地間の神と同體なれば、己れ知る所の罪を悔改めざれば、神の前に出る能はざるなり。即ち人に面する能はざるなり。

◎七月一日。むかし正造、明治三十六年の頃、

たのしまば、布團も蚊帳もあるものか、のみ蚊にまでも、身をばさ、けて。

かく詠んだは可し。旅に出で、牛小屋に宿ると、蚤蚊の澤山にも四方より襲ひ來りて、終夜眠につくを得ず、困まりはてたり。世の中には、机の上で道理の研究はナカク、進んでも、實際は却て退歩したです。

○形のみ大きくて、大人君子のごとく、大宗教家の如く、其言天のごときも、其形には似ぬ小さな根性を持つに困まる。

形は小なる如くなれど、其精神、神の如く、主義主張は天の如きものこそ、是れ誠にキリストあるのみ。之を尙ほ小にしては、鑛毒民救濟従事の志士仁人なり。國家第一の暴力に對して、國家無比の細民、困窮極なき烏合の村々をめぐるて、あても無い人々に道理を話し聞かせ、殆んど泥に釘打つ如きものに、十年も二十年も盡くして少しも飽きも倦みもせぬは、小なるキリストの如しと思へり。

○予至る所、人の輕蔑を免かれず。是れ誠に然りとす。人は皆な専門なり。我れ専門の知識なくして、他の専門の人に逢ふ。學者が淺學を輕ろしむるは道理なり。故に一人にして萬方に當る、誠より外なし。藝術を以て各

専門に渉るべからず。誠は一以て貫けり。彼は藝術技倆を以て我を侮る。我は誠を以て彼を憐れむ。

◎明治四十四年七月四日。正造曰く、天の職を奉ずるものは、人造の新聞を見る必要なし。國として大なる問題は、衆皆之を唱ふ。予は之を天の聲、天の調らべなりと聞くもの也。予に於ては自然的新聞の外に、故らの新聞あるなし。琴瑟は人造の法律なり。天籟は自然なり、神の音楽なり。天籟常に在らず、故に人造の音楽を造り、神樂に用ゆ。鳥を殺し、鹿を殺し、馬を食らひ、樹を伐り、山を荒すもの、いかで天籟の尊きを知らん。此の如き人が音楽を造り、樂器を鳴らし、神にすゝめたりとて、いかで神を樂しましむべきぞ。神は決して受けたまはざるなり。

○私の爲めに光陰を費さず、私の爲めに心配せず。

正造に妻あり、年六十二歳、縁者のもとに厄介になりて久し。偶々疾を得、瘤の切斷の爲に出京す。病院に在ると一ヶ月の後、早瀬の方に來り居りて、上州桐生の縁者方に歸りたりと、今朝聞けり。其の病院に居る時も一度も伺ひ見ず。故さらにせしに非ず、多忙自然の結果なり。只少しも私を以て、公共の爲を中止するものに非ず。但し普通人道より見れば、殆ど不人情なりと言はれん。妻より見るも、人情深き人とは思はざるべし。

○只少しも私の爲にせざるのみ。

天の爲めにする光陰を多くせねば、天に仕ふる人にあらず。私に光陰を用ひて、天の爲めとは申せぬ。天の爲めにする光陰を空陰の如く心得なば、是れ大々の間違なり。天の爲めにせるものは、少しも無駄なくして、皆な

我身の食ともなり、水とも空氣ともなり、衣とも家ともなるものなり。天の爲めにして、天の報ひざるなし。

天には口なく耳なく目なきが如きも、苟も天に盡くせば、天は必ず報ひたまふなり。且つ報を大にせり。

天は無盡藏なり、故に富めり、豊かなり、其報必ず豊かなり。無盡藏より出して與ふるので、限なく大なる次第である。あゝ世上の慾張りも此理を知らば、必ず私を捨て、天に仕ふべし。即ち神に仕ふるの樂しく且つ働きばへの多いのは、味極りなき樂なり。慾ばりよ、早く誠にその私を捨てよ。慾より出で、は、私を捨つるを得ず。慾を去らば私を捨てるを得るなり。慾を去るは天に近づくの道なり。天に上り神に仕ふるの道は、慾を捨つるにあり。天に登るは、山へ登るより急なり嶮岨なり。雲の上へ登るので、身を軽くせねばならぬ。慾を捨て、私を捨て、我儘を捨て、傲慢を捨て、色々な私慾と云ふ重き罪の重荷を捨て、登らねば、登れぬなり。

○今の世の人は、天災を救ふ事を知れども、人爲の災を救ふに乏し。甚しきは人の造れる災迄も天災と名づけ、欺けば則ち救金を出だす。人造と言はゞ、救ふの心なし。之を西洋文學の進歩せる國柄とせば、事實の顛倒、天地位置を異にすと云ふべし。人造の害を救ふは人道なり。天災はこれを救ふに際涯なし。富士の雪、淺間の烟、之を奈何せん。

若し天然の洪水ありとせんか、人力の以て救ふべきにあらず。人爲を以て救ふは、人爲の害の外なきもの也。大地震、海嘯、大火、大洪水、皆救ふに道なし、只其跡を處理するなり。人造は豫め救ひ得るなり。豫め救ひ得るものを救はずして、救ふべからざるを救はんとするは何ぞや。天災は急務にあらず。而も天は災するもの

にあらず。災と言ふは、人より見て言ふのみ、天何ぞ災せん。人造は然らず、皆自ら爲す災なり。傍人之を誠め、且之を豫めせざるべからず。

○ 鑛業を停止せずして、關東五州の滅亡を防ぐ方法なし。

○ 議員物言はずして、政府が罪惡を行ふは自然なり。是れ君子專制にあらざれば也。

○ 初一念は神なり。

○ 妻病院に入り、又縁者の厄介となりて、東京に居ること三十日餘なり。予夫正造は、其近所に出没、二回も來り休泊せしに、一回も病人を見舞はず。是れ人道の爲に人道を破り、天道の爲に天道を破る。斯くして神の御心になふや否や。我が精神に於ては許せども、神靈は之を如何に見たまふや。

○ 悉く自然にせば、東京なら飛鳥山の芝の上、備後表よりもよろし。大きく言はゞ、不二の裾、海邊の砂の上の如きは皆なよろしけれども、豚の小屋の汚れも自然と心得ては大變。

○ 四十四年七月。

偶 意

正 造

誰が見ても、誰が來て見ても、不二の山。いつ來て見ても、むかしながらに。

○ 徳川時代、關東死して二百餘年、諸藩鐵砲一つ放たずして落城す。現代、民を壓抑して人民死亡す。若し外敵の襲ふあらんか、また早く降參せん。汝に出づるものは汝に回る。

○ 教育は學費の多少によらず。

死して持參し得るものは實なり。持參し得るものを貯藏せよ。甦りて持去り得るものを貯へよ。

○ 予は谷中問題以來茲に八年間、尾行巡查隨行してウルさし。實にウルさき思ありき。然るに是よりも幾層怖ろしき感覺あり、旅行若くは飲食にまで危険を感じ來れり。依て又た前のウルさきもの却て戀しくはなりける。神を信する者は此の如き事なし。ウルさくもなし、戀しくもなし、難易皆同じ、賊の有無に拘らざる也。

○ 神を知らざれば人は失望す。予が政治に倦める時は、神を知らざれば也。神を知るものは、即ち論語に、人の己を知らざるを憂ひず、人を知らざるを憂ふ、之れ君子なりと言へり。已に君子にして而して神あるを知るなり。予にして早く神あるを知らば、何ぞ人の知ると知らざるとに頓着せんや。予と雖も、人の知らざるを憂ひたるにあらず、然れども久しきに堪へず、之を捨てたり。若し夫れ予にして早く深く神を知らば、日本人の中に於て之を比せば、精神は菅原道眞の如くなるべし。進んで退かざるべし。是れ當時人は道眞の賢を知らず、神は明に知るなり。之を堅く信じて退かず。退かずして災を受けたるは道眞なり。是れ菅公の菅公たる所以なり。

○ 孔子は常に、行はれざれば其國其位を去る。是れまた可なり。孔子時勢に明かなり。神は孔子に時勢を知らしむ。孔子は神の命によりて去るものにして、自己を以て逃げ去るものに非ず。

キリストの、ヨハネ捕はるを見て去る、時勢なり、神の命による。此點は孔子の位を去りて遠く逃れ去ると同

右八月五日、布川旅舎にて。

◎八月八日。

○予は汝が富貴なるが爲に来るに非ず。常に予が交はる所の人々を見よ。皆な貧者なるを見られよ。而も其貧者は常に安全なり。富貴は常に危ふし。故に予の來るは、汝を危きより安きに救はんが爲めなり。

◎八月十一日。今朝、飯の膳のほとりに一疋の蟲這ひ來る。予扇を以て之を拂ふ。蟲死す。予大に我殘忍の心に怖れ、悔る事久し。其蟲をながめ居る。暫くすると、蟲氣復して這ひ出す。予の喜一方ならず、顔色常に回りにて、今度は扇子の風を起し蟲を逐ふ。蟲は軽くして小なれば、幸なるかな風にあほられて、飛ぶが如くに戸外に走る。予曰く、難有しく、其處を得たるかなと、獨り大に喜ぶ事、蟲の喜に同じ。あゝ、蟲も我も均しく生を天地にうけ、神の靈によりて心の働あるものなり。只彼は形なり、身體の組織、人に及ばざる遠きのみ。人は蟲に比して大に優れり。我より大に劣れるものに對し、苟も腕力を用ひて、妄りに殺す等の事あるべからず。人よりも劣るもの、中、蟲ほどのものは無し。人は萬物の靈の司にして、萬物の劣等なる蟲、蟲も蟲、羽も無くして地上を這ふ、蟲の劣等中の劣等物を凌ぎ、殺す事を敢てす。人の靈、何處にある。

足利の原田定助氏にて、不圖した出來事。

○おぢさんの前へ子供が集る。おぢさんの前に煎餅が澤山にある。多くの子供が集ると、蠅も共に集つて來る。蠅は逐ひ飛ばして子供にのみ煎餅をやる。煎餅のこぼれは、箒にたゞき掃つて、蠅にはやらぬ。蠅ははき溜に捨てるを待つて集まり食ふ。此の如き仕合せの世の中なり。蠅を追ふはよろしとするも、たゞき殺すは無理なり。

○恐怖心。

恐怖心は鳥魚蟲の類に多し。獅子虎の猛獸と雖も恐怖心を免かれず。鳥の鷲鷹また恐怖心あり。鮫大蛇の如きは、恐怖心もあれば又た呑嚙他害の心を有せり。然れ共此動物は、人類の如く諸々の性格を備へず。人にして若夫れ營に恐怖心のみとせば、鳥獸蟲魚にも及ばざるべし。

○人生働きの報酬は、なほ金錢働きの報酬の如し。

金錢を働かせて利息あり。働かせざれば利息なし。働かさへすれば報酬はあり、何程とは定まらず。働きの巧拙、身體の強弱、精神知識の多少はあれども、皆相當の報酬あり。報酬を得んとせば、働くより可きは無し、他に何等の道なきものなり。之を實行と云ふ。實行なき口のみの働は、鳥の價の如し。鶯は高價なり、人其聲を愛すれば也。金は人の働によりて出來る。出來ると、金のみ働かせて、己は奢侈にふける。金は窃に其主人を恨む。家來が主人を恨むと來ては、其家の永續なし。金は猶ほ兵士の如し。戦ふ爲に兵士を集む。將校放蕩にふけりて兵士のみ働かせば、兵士不平にして戦必ず失敗せん。金は働く主人を好む。ものくさき主人、奢侈の主人、愚昧の主人を厭ふて去り、他に正直誠實なる主人を探して、其家に使はれんことを欲す。只だ金の性來につき世の誤解を明にせん。

金が徳行の人を好まざるが如く見ゆるは、之を好まざるに非ず。是れ其徳行家の爲に犠牲となりて、早く自ら死するなり。故に徳行の人の家には、金は早く死して久しく居らず。然れども無形の中に主人を守る。金も亦犠牲となれば、天國に上りて神の前に立つ。無形にして肉眼には見へざるも、其主人を守ること即ち現在の如し。故に徳行の主人は、無形の財産家なり。

金の性は犠牲なり。名譽ある犠牲、名譽をも惜まぬ犠牲なり。犠牲の外に金銭の必要なし。商買事業に使はるるも犠牲なり。只人之を悪事に用ひば悪事に働き、善事に使へば善事に働くのみ。金は一種の宗教家にして、金は人を以て神とする特殊の宗教なり。金は、人の上に神ありと云ふ事を知らず。萬事の上に神ありと云ふ事を知らず。萬物は神の造り出せしものたるを知らず。金自身、神に造られたるをも知らず。故に金は神を知らざるなり。只だ己を苦使する人をのみ神として、其命令の下には、正邪曲直を擇ばず、唯命唯従ふなり。故に至善至美の事に働けば天國に上る。天國ある事を知りて働くには非ず、其働、天國に叶ふ時天國に上る。故に天國を知らずして天國に上るなり。此例、人に於ても往々にあり。其人未だ天國の何たるを知らずと雖も、其行にして天の父の御心に叶はゞ、即ち自ら知らずして天國に上る。之に反して、假令天國を説き天の父の事を説き聞かす程の人にて、其行未だ口に合せずば、口のみ神を見たりとて、決して天國に至りて實地に神を見る事能はざる也。去れば金の無心なるも、善事に働くことを得ば、則ち自身天國に到りて、能く其主人の榮華と生命とを永遠に傳ふるを得。

商賣上の取引正當にして、義理を缺かず、父母に孝をなし、神を敬し、人をも愛し、何一つ缺くる所なしと思ひ、終に自ら安心して聖人の前及び神の前に出づ。然れ共、此人未だ神の御心に叶ふ事を成し遂げざる也。何ぞや。未だ貧者の救の爲に、金銭を犠牲として働らかせざる是也。若し夫れ汝一人を守るを以て足るとせば、始より他人との交際も無用なり。他人と交際し、他人に好き人と言はれ乍ら、未だ他人の爲に犠牲となるの一事を缺かば、凡ての善き行も水泡同様なり。縦ひ善き人でも、未だ善を卒業せざる、所謂魂の入らざる木像同然なり。然れども此人にして今一段の發展をなし、精神の貫徹を以てして、犠牲の一箇條を卒業せば、神の爲によろしきに近し。甚しいかな、古來金銭を犠牲にして天國に上ほるの結構を知らざる。只此一を缺けり。是れ世人の迷誤なり。世人皆思へらく、金銭を失はゞ直に貧困苦痛に陥るべしと。然れ共苟も之を神の道に使用せば、神必ず金銭に代りて其人に報ひたまふ。而も世人の愚なる、只金を失ふと言ふなり。犠牲は失ふにあらず、寧ろ幾倍して神之を報ひたまふ。

故に天國に上らんとせば、必ず先づ財産を犠牲にし、我身をも犠牲にして、神の命令に働かざるべからず。未だ財産をも安んじて犠牲に捧ぐる能はざる者、いかで十字架を荷ふべけん。天國に入らん事夢にだも及ばざる也。キリスト曰く、富める者の天國に行くは、駱駝の針の穴をくゞるより難しと。誠に難有き確言なり。是れ誠に神の言葉なり。争ふの必要なし。天國に入らん事を欲せば、先づ之を實行せよ。金銭を首にク、シつて犬死にし、六文の錢を貰つて、子孫や朋友に永別するに至るまで、迷の悪夢未だ醒めず、現世活地獄の人

となりて尙且恥と思はずば、即ち禽獸にだも劣る事萬々なり。かくては人に生れて人にあらざるなり。

○陽はに見ゆる天地の大を知らざるもの、いかで此の無形の惡魔を見出すことを得べきや。危哉。

○天國は花ごさの如し。汝一人にて敷物とせば、是れ他人の爲を圖る人にあらず。只汝一人の座席を飾るのみ。之を他人に供して他人を坐せしめ、己は謙遜して筵の上に坐せざれ。是れ天國の行にして、其時其人は既に天國の人なり。

天國は易々として行へば易々たり。安々行へば安々し。大小相同じ。小は實行し得らるゝも、大事となれば實行し得ざるのみ。神より見れば大小なし、只人の迷心にて大小を見る。大小論するに足らず。輕重また比するに足らず。

○足らざる時の事を知り、足らざる事を知りて、而して後ち足る事を知る也。

世の學者は、足らざる時の事知らずして、心に足らざるに陽には足れりとして、心には足らざるに恥づ。

八月十四日、上野田にて。

○天地山川皆我に同じ。我に同じに到らざれば止まず。

人の貧は我貧。人の富は我富。人の憂は我憂。人の悲は我悲也。然れども、人の喜必ずしも我喜にあらず、人の樂未だ必ずしも我樂にあらず。

○谷中の周圍の村々、昨今年々の困窮、谷中よりも悲惨なり。此土地を見て、銅山黨之を買收せんとす。

作物の取れる土地を無理につぶして治水の策とし、堤防を高くするを治水の法とし、工費の多きを以て手腕とす。國を亡ぼすの巧なるものを、政治家の能力とす。

○八月二十日。惠下野の島田榮藏氏方にて、まぐろの肉の如き胡瓜の漬物を食ふ。此の肥へたる胡瓜は、肥へたる土性に生ぜり。

○人より報を得ば、神敢て報ひたまはず。

陰に報を得る人は、陽に報をうける權利なし。

淨財と淨情とを以てせば、君子の交なり、夫婦兄弟の交なり。

八月二十日、久喜の停車場藤田屋方にて。

○八月二十一日。女子無形學校論を原氏の奥様に語る。たとへば、正造は何して食ふやと言はゞ、是れ一つの職業は無し、何一つ専科の知識なし、人に雇はれんとする藝能なし、只漠々一角もなき無藝能なり。かくて徒らに高尚の理想にふける。此の如き者は社會の穀つぶしのみ。日蓮叫んで禪天魔と言へるは、是等理想家、所謂聖人の出來をこねを論ぜらるらん。聖人の出來損ねは實に社會の厄介なり。人は自力にて食むことを稽古するを要す、而して餘力を以て禮容に及ぶべし。然るに今の教育なるものは、生活上自活上一の手業をも學ばず、先づ形式禮容を修めんとす。首尾顛倒の甚しき、修身の整はざるも亦宜なり。今や各高等皮相の教育にのみ走りて、耕すものなく、織るものなく、作るものなくして、只だ他人の作りし物を着て食ふの人のみ増加す。甚

しきは、財産からく藝術の稽古に打込んで、うはすべりの虚榮奢侈に熟達する女子を卒業生と言ふ。飯を食ふの仕事、生活上必要の立居振舞は、女子精神修養の要素なり。仕事に働きつゝ、精神の修養をなす。其人の修養は根本ありて堅し。書籍上の修養は、車上の花見なり。

○人を馬鹿にするは、馬鹿よりも馬鹿なり。

◎八月二十二日。日暮里に着。逸見氏外村田木下外一人合四君に、久々に面會せり。正造曰く、日本としては泣くの外なし、社會としては超然として餘地あり。風景の佳絶は富貴の占領する所。天國は我々の枕する所、彼等は此地を占領するを得ず。呵々。

○神は、人の知らざる數多の罪をも救へり。人我心に悔ひば、神は之をゆるし、改めば神は喜ばん。善い事して損は無いのみか、後は天國へも入れらるゝ也。若し夫れ既往の事にのみクヨクして善い事に進まざれば、よしなき也。何時までも前の罪は償はれずして、浮ぶべき瀬に出ず。たとひ罪あるもの一旦淵に沈むとも、驚き悔ひて浮む瀬に泳ぎ出づれば、浮ぶものなり。一旦沈みても、其心を改め勵まして救を神に求めんとせば、先づ早く泳いで浮瀬に出でよ。瀬に出づるは改むるなり。既に浮みて身救はるゝに及んでは、又前に淵に落ちたるを問ふの必要なし。再度落ちざれば足る。只本人自身早く浮ぶ瀬に泳ぎ出でざれば、神も救ふ能はず。救はるゝは、我決心なり。沈みたるまゝ死するは、我が自棄なり。神は救ふの一方にて、決して人を淵に入れるものにあらず。神の助を得て救はれんと欲せば、頗る元氣決心、方針を改め、目的を改め、萬事を捨て、浮ぶ

の一方に一心を込め、力のあらん限り根性のあらん限り、死力を振つて叫び且つ働かざるべからず。只死生は命あるのみ。(八月二十二日)

○一昨四十二年の冬頃は、身體も心も疲かれ來りて、殆ど死ぬるばかりになりたるに、昨年八月頃逸見木下兩氏の勧めによりて、岡田正座殿の教を受けに同行す。久々に岡田主に逢ふ。氏は去明治三十三年の春、某分析家の處にて面會せし事ありと語られて、驚けり。後ち出京せる時屢々正座に參りて、身體回復せり。其のしるし様々あり。今は身體餘程健全に復し來りたり。(八月二十二日日暮里にて。)

◎二十四日。水野治水家(内務土木局長水野練太郎)に告げて曰く、水理は道德なり、道德は費用なし、費用を以てするは道德の眞理にあらず。

○昨二十五日、途上不圖、牛込矢來丁友愛學舎の人金井公一氏に逢ふ。氏の案内にて、道途歩を曲けて同學舎に至るや、忽ち學生七八人集り來り、予に話せよと迫る。予曰く、天地の大を見よ。之を見る、此の無學者たる予の研究材料餘りあり。別に書冊を見、又教授を待つ必要なき也。世人はかゝる實態の無限無數なる寶財をすて、徒らに是を寫せるもの、即ち古來の書冊にふけりて、多くの歲月と實態の歴史を空過せり。恰も美人の目前に在るを知らずして、其の寫眞を求めて高價に購ふに同じ。誤、是より大なるは無し。予は無學なり、新聞も讀み得ず、新聞雜誌を見ざる事、略々三十一年の長きに涉れり云々。西東一氏、予を戸塚村平民俱樂部まで送らる。同伴して俱樂部に至る。予は、南洲氏の兵に斃れ甲東氏の暴殺を豫言して的中せるに自惚れて、政

治改革に一身を犠牲にせんと決したり云々と告ぐ。

此日、予は學生諸氏に語て曰く、自分造りの天國はいけません。天國は造るものにあらず。天國は造らずして備はれり。問題は之に到るの行程のみ。天國に行くは正しきにあり。若夫れ天國を造らば邪なり。區域を畫し安逸に居住するは天國を造りたるにて、邪魔の城郭なり。神の爲せる天國は大なるものなり。大なりとて、其道を得ざれば到る事能はず云々。予が此話は大なる話なり。學生克く之を解し得たりや否や。予は賤が家の月の喩へをものべたり。話は切れぬなりといへども、要を摘まみたるを覺ゆ。

八月廿六日、平民俱樂部にて記す。

天地日月、森羅萬象、人類禽獸、皆我身なり。各々其地位に生活するを得て神あるを知らず、徒らに自然々々とのみ言ひ去らんとす。抑も何の力にて其自然は生ぜしか。滿面の神を見ざるもの、いかで自然の理を知り得んや。岡田氏の人間以上の行を見たりとて直には信ぜず。新井翁の神靈を見たりとて信ぜざるべし。夫れ己れ神に到らざれば、神の神たる、靈の靈たるを知るよし無ければ也。之を小にたとへんか、世に予を誤解するもの多きは當然なり、元より意に介するに足らず。靜坐して深く心を用ゆるに非れば、宇宙充滿の神徳といへども、見るに能はざる也。看よ、禽獸にして人の行意を知る稀也。禽獸尙ほ靈あり、稀に人の行意を知る。時に感じて知るなり。常に知るに非ず、只一事につき一時につき知るなり。而も知るは知る也、知る處は即ち人に合す。人にして神に合すと言ふも亦然り。神の全部に合するには非ず。元より全部を知るの力なし。只我よく神を信じ、其力強き人によりて神の一部分厘に合す、稀に合す、而も此人は已に神の幾部に同體せる人也。部分の多きは、或は聖たり、或はキリストたり。若夫れ獸にして人に合す、即ち人なり。人にして神に合す、合する所は人にして人に非ざる也、即ち神也。只だ廣狹上下數量光澤もとより同じからず。

眞理研究、實物研究、實に必用なり。鳥獸には文字の教育なし、只だ父母の教育のみ、皆な實物研究なり。而も人の心を知り、人の行爲を悟る。人には文字あり言語あり。而して神に近づくことを知らざるは何ぞや。道もと堂々たり、而して處々關門あり。僞るものは關門を通るを得ず。行くこと能はざるは自ら僞るが爲めのみ。神を僞りて關門を通らんとす。何回關門に到るも終に通るを得ず。僞るの心を去らざれば、百度するも千度するも通過するを得ず。關門を通過せざれば、天國に到るを得ざるなり。而して皆自ら僞りて、神が見へぬくと自暴自棄す。見て見へぬは無し。宇宙充滿の明德にあらずや。

但し神は大に過ぐ。我已に其大に包まる。燈臺下暗くして、動もすれば見へずと思ふの類多からん。宇宙の形は已に目に見へざるなし。形あれば靈あり。人の形を見よ、人の心あり。宇宙の理、大小此の理に出づ。宇宙の大を見て神の大を察せざるは、人にして獸にだも如かず、口惜き次第なり。

○正造の狂句、去廿九年頃、

大雨に、うたれた、かれ行く牛の、道は車のあとかたもなし。

然れども後の人、彼等牛馬の德行にして僞らざるは、我々にも勝れりと感じて、愚夫愚婦心を一にして、其報酬を石にて造り、之を通行の人に頒表す。大なりと云ふべし。

○あゝ、先輩先覺の諸士よ。早く身を殺して此の迷へる萬民を救ひたまへよ。諸士よ、人の人たる道を盡し、即ち神に近づき、せめて此身の一部分なりとも神となるの道に進め。即ち先づ此身を教育すべし。此身を教育するは、人を教育するの善法なり。怠るなけれ。精神修養とは夫れ之を言ふものなり矣。

明治四十四年八月廿七日、日本橋旅舎、客待時間に於て。

○又言ふ。嗚呼、此日本人中、禽獸に劣らざるもの果して幾許ぞ。宗教の目より見れば、日本人中、禽獸に優るもの殆ど稀なり。人類の悲惨なる如此。

○天地開けてより、己の生活を思はざるものなし。少しく進で一家を思ふ、是れ社會のはじめ也。尙ほ進んで村落を造る、是れ國家の始なり。區域を廣くして郡と縣とを造りて、國の中部に充つ。而して之を總ぶるものを上部の政府とす。皆な國の團體なり。然るに近年、町村民にして自ら町村の利害を思ふものなし。たとひ思ふものありとも、意思薄弱にして町村を保つに足らず。郡縣亦郡縣を思ふもの稀。國家の中部以下悉く常の民なきを見よ。政府議會、亦日本を思ふものなし。

去れば此人民は何を思ふ人民なるか。

己を思ふの人民なり。

己を何と思ふの人民なるか。

只肉體あるを知りて、神靈あるを知らざるの人民なり。故に己れ肉體の安全、家族の幸福を思ふのみ。己の外貌を飾り肉を太らし、己の財産を取集めるのみの人民なり。己の肉體の爲に私慾を働き、終には他人の物を掠めて其飢餓をも顧みざる、猛獸智識の人民なり。己の爲には私慾上の知識を有し、賄賂を取遣りし、又詐欺盜賊を働くに名を求め、社會的一家族の勢力を以て公益の名義を造り、政府も議會も己れの奴隸に苦役し、名術を巧にし、流言家を弘布し、事實顛倒、人民の手を應用して弱き人民を相食ましめ、混難紛擾其狼狽に乗じ、家宅田畑を奪ふの人民なり。栃木谷中奪略は此種の國民なり。

○無學なるものも亦幸なり。無學は學者の侮る所なり輕んずる所なり、故に幸なり。人は用意ありて人に面す。用意は用心なり、擊劍家の具足の如し。身を固め心を締めて而して後に人に面す。語に曰く大賓を見るが如しと。此用意頗る多し。或は曰く、道に聽て途に説くは徳のスタリ也と。皆他を敬して己を侮らしめざるの用心なり。予正造無學なり。禮容を學ばざる殊に甚し。幼少より百姓の家に育ちたれば、生れたる時の粗野其儘なり。且つ無學なり。人の子を侮り且つ輕んずるは當然の結果なり。故に幸なり。凡そ人の人に面するに當り、無用心にして面するは、小兒に面するの時なり。多くの人は、正造を見る時小兒の如くに侮りて無用心なり。素面にて逢ふ人が、真相を現はして正造に語るものなれば、正造を欺くこと割合に少なかるべし。小兒と小兒とは、互に僞りの少なきもの也。人も小兒となりて正造を見るが故に、案外磊落にして其實を吐露し、若くは

輕んじて正造に忠告の言を發し、若くは誠むるなり。是れ正造の無學を侮るが如きも、其實自ら憐れみの心と化し、正造を救はんと欲して、中心忠實の言を以て予に與ふるに至る。無學却て真相に近し。無學は一の幸なり。キリスト曰く、貧きものは幸なりと。すべての者此の憐みを受け、人各真相を以て貧者に接するものなれば也。空しければ空しからず。誠に空しければ、天地萬有皆我物也。豈に山間の明月、江上の清風のみならんや。無學者は此道に入り易き一の幸なり。無學亦貧者の一ヶ條なれば也。

◎八月二十八日。

○キリスト、人に生れて人にあらず、神なり。然れども神の全體を悉く合はせ得るものに非ず、神の大部分を無形中に學び得て、之を實行せる神なり。彼れの行動は人類界に在り。彼は神と人とを見、又草木に及べども、未だ禽獸を見ざるが如き、之を言ふのヒマなきが如き、是れ未だキリストの全身と同一なるものを表するの餘地あらずと云ふ所以なり。

其神業を述べ傳ふるに及んでは、人類の及ばざる事多し。誠に人類以上の言行なり。キリストを知らざるものは、五ツのパンを五千四千の人に與へたるを怪み、又た海上を徒歩せるが如きを怪んで信ぜざるものあり。偶知あるものは、徒らに之を理想上の比喩となす。知らざるの甚きもの也。是れキリストが神に合せる力の顯れたる部局なり。日月限あり。キリストと雖も、すべて神に合せるを公示するに至らず。然らばすべて神に合するに到らざるが故に、神にあらずと言ふか。否な、キリストは神なり。キリストは聖人にして神なり。大

聖人にして大なる神なり。

世に聖人なるもの種類亦多し。聖中の聖なるあり。聖に似たるあり。聖の亞なるあり。聖亦廣きに失するあり。狭に失するありと雖も、人類の智徳命數限あり、各方位精神の聖に達せるあるのみ。故に聖に大小あり。大智あり、大愚あり、厚薄あり。是れ人類を以て神に到るの行程なり。キリストの如きは、遠き行程を行きたるなり。他の聖人と唱へらるゝ人々の中、神の行の多きもの、キリストを以て最となす、實に他に比較なき別格のものなり。之を神の子と言ふ、元より可也。

キリストは存在中、已に神よくと叫ばれたり。幾ばくもなくして殺されて後は愈々聲高く、神よくと崇められたり。如何に善美嚴正の文字を以てキリストの人格を賞讃せりとて、言語や筆に盡し難ければ、唯々神として、仰で天の如く崇敬追慕の状態を叫んで、極端に信仰の精神を公表せしもの也。強ひて附會して神なりと唱へそめたるものには非る也。

然らば我日本は精神なきか。否。日本魂なるものあり、各自皆之を有せり。然らば其日本魂を復古せば奈何。否々、然らざる也。日本國の中和公共の心を失はしめ、眞實なる公益心を失はしめたるのみ。團體上の公共道徳心を失はしめたるあるのみ。人民相愛の道徳を失はしめたるのみ。日本古來の政治、専ら上に在り、人民之に信賴す。信賴二千有餘年の久しき、生殺與奪をも擧げて、皆之を上部の政治に信賴して疑はざるに至れり。信賴を受けたるもの責任を重んぜざれば、人民死するも犬死となり、財産を奪はるゝ者は油斷の人となる。是

れ誠實にして神を崇め、萬物を愛育して天を怖れ人を敬するの信仰なきが爲め也。されば日本魂ありと雖も、信賴根本の魂にして、自動的日本魂にあらざる也。魂を信賴す。然れ共汝自身の魂にあらず、他の必要に應ずる魂なり。日本は之を日本魂と言へり。果して然らば日本魂の必要は命令の下に必要なものみにして、國家の半面は存するも、半面は空虚なり。恰も谷中人民、日露交戦に出兵せしは、政治信賴の半面たる日本魂なり。而して汝の家財汝の自治村は、我の守る處なるに、而も半面空虚なるが爲に、出兵不在中盜賊來りて、汝の財産汝の自治村は奪はれたり。而も怪むもの稀なり。是れ心の空虚なれば也。

日本人。汝の魂は半面強硬なりとするも、其の半面は空虚なり。玉にせば大疵物なり。今や古への半面政治と異り、此の全面政治に於て、日本魂なるもの大疵物にして、殆んど半額の價だもなし。左れば價ある魂なきか。然り。

感、小舟町にて。

◎八月廿九日。全國の商勢、電話以來皆な相場的取引に到らしめたりと、遠江の國の商人の話。

◎世界人類の多くは、今や機械文明と云ふものに嚙み殺さる。文明は汝を食ふの惡鬼たり。故に惡器を製し、惡具を運轉し、惡意を以て惡機械を適用す。然れ共人として機械文明に強迫せられ、共に此悲境に陥るは如何。孟子時代は言ふ、獸を以て人を食ましむと。今は汝の製する機械の爲に汝自身其機械に嚙まる。文明とは是等の惡鬼をさして言ふの時代とはなれり。此災を避くる、奈何せば可なるか。天國に入るの妙實あるのみ。此人

生社會を捨て、片時も早く天國に逃げ込むべし。天國行きの研究は何人を以て教師とせん。曰く、人にあらず、神に學ぶべし。天國の道は、神にあらざれば教へざる也、知らざる也。早く神に付くべし。神が有るの無いのと、まご／＼して居ると、右の惡鬼來て、忽ち汝の血をすゝり盡し、骨と肉とを食ひ盡さん、已に天國に到りて、此殘賊なる下界を見よ。血は流れ、肉は離れ、骨は積んで山を成す。修羅の巷は、銃砲劍光滿面の負傷者を見て、救ふものすらなし。救ふに暇あらざれば也。

○昨日は教訓を車夫より受け、今日は藝妓より教訓を受けたり。先方の人格には拘らざるなり。予は予の明鏡あり。寫すは先方の自由なり。明かなるは我の自由なり。先方の醜美、我を奈何。(八月廿九日夕刻)

○人生、寫眞の如し。

太陽は尙ほ神の如し。

太陽は平かに照せり。

眞を寫すに上手と下手とあり。

動かせば、姿動きて正明を失ふ。

正しければ、能く光線に合す。

人の身心正しければ正しく寫り、

正しからざれば方正を失す。

人、神に合せんとせば、正しきより可きはなし。

心清きものは常に正し。

故に神を見ることを得。

神の、人に合せざるにはあらず。

止しき者は合し、正しからざるものは合せざるのみ。

神を見る、尙ほ難からず。

神を見ざる、難し。

止しければ見ざらんと欲するも、見へざるを得ず。

見ざらんとせば、正しからざるべし。

兩者の勤め、何の難き事かあらん。

神は真なり、常なり。

神は近き身邊に在り、遠きものにあらず。

○人を中心とせば、人として禽獸の群に入るは難し。人として神に入るは難し。人は人として畢らんか。否な。

神に入るの清きに如かず。

○古への治水は地勢に據る。

恰、山水の畫を見るが如し。

其山間の低地に流水あり。

天然の形勢に背かず。

若し之に背く、山水として見るを得ざるなり。

治水として見るを得ざるなり。

今日の治水は之に反し、

條木を以て經を引くが如し。

山にも岡にも頓着なく、

地勢も天然も度外視して、眞直に、直角に造る。

是れ造るなり、即ち治水を造るなり。

治水は造るものにあらず。

治とは自然を意味す。

水は低き地勢によれり。

治の義を見れば明々たり。

◎九月一日。

○一歳五億の歳出入を止めて可なり。

二十億の負債は、四年間に皆済して可なり。

凡國政は國議に決す、何の難き事かあらん。

只行ふと行はざるにあるのみ。

行はれざるにあらず、行はざるなり。

爲し得ざるにあらず、爲すの意なき也。

予は之を憂ひ之を悲むものなり。

○人皆安樂を好み。

安樂とは、勞せずして得る程の安樂なし。

今人は眞に安樂の道を取らずして、虚なる安樂を求む。

民の正直に歸するは、安樂の大なるものなり。

是れ勞せずして得る所の眞の公益なり。

毫も資本を要せざる也。

資本を要せざるものは幸多し。

キリスト曰く、貧しきものは幸なりと。

○兄弟相戦、父子相食む。今日の時勢なり。之を警官の必要に例へん。世に盗人増加す。警備を増す。増々多くして増々警備す。

全國人民みな警官とならば如何。警官、衣食に窮せん、必ず又た盗をなす。警官にして警官を召捕らざるを得ず。兄弟戦はざるを得ず、同類相食まざるを得ず。此例豈獨り警官と盗賊との關係のみならんや。政府と人民との關係、概ね此類なり。

○下女過ちて茶碗をこはす。天の神は此過ちをば咎めたまはず。若し叱るものあれば、是れ人なり。神の行をつとむる人は、咎めず罵らず。

○人の物を盗む。人未だ之を知らず。天の神は、盗取らぬ前よりして、其の盗まんとする心までを知りたまふなり。盗めば早くも刑罰の人となる。人の未だ召捕らぬ前に罪せられて居る。

然れ共神は無限の寛大なり、悔ひて罪を自白して、謝して心を改むれば、又直に之を赦るしたまふなり。人は知るに遅く、召捕るも遅くして、赦るすも遅し。神と人との事すべて此類なり。人は神の如くならん事を願ふべき也、力むべき也。神に到らざれば止まざるべし。

◎九月八日。昨日、舊八月十五日、大學三浦病室を訪ひ、日暮里に歸り、三河島に泊す。今朝、喜樂園を訪ふ。昨年八月十一二日浸水、床上一尺六七寸。之を四十年荒川の氾濫のみに比せば、やゝ一尺餘高し。左れば利根

川氾濫の量一尺となる。

○村落到る處、戦死者の記念碑の建て、あるを見る毎に、涙ならざるはなし。悪戯隆盛時代なり。修身時代に早く移さざるを得ず。

○正造、身體の破れを造る、七十にして回復を圖る。

○九月十七日。梁田より久保田、茂木、野田、奥戸、多々木を経て小中に来る。縣會議員選舉競争運動に逢ふ。到る處臭氣紛々たり。

此日、小中村を立ち、佐野を経て栃木町に来る。金半樓と申す古き旅人宿に泊す。店頭に鶏卵を賣る者あり。玉子に疵つけず、多數積重ねても一つも破るゝなし。若し腐れあれば、忽ち發見す。人類社會、此の如くなれば無事なり。

○九月十八日。栃木裁判、谷中問題開廷に付出張す。東京辯護士來らず、茂木氏一人。予正造及び島田宗三出席す、開廷一番、判事、正造に對し、其方一人の了解にて何れにもなるではないかと。正造答、正造に出来る事と出来ざる事の二様あり。憲法上の事は正造の取扱にならず、其他は相談の上ですと答。

谷中人民の出席少なきは、來らざるにあらず來られざるなり。知識生活の人々の誤解する所なりと述べ。憲法破壊の國賊ありてより、自治一ヶ村の死活は個人相互の單一なるものでないと述べ、又た國賊の言は責任を以て述べたりと答。又た東京辯護士の來らざるは、數十年に渉る鑛毒地方無報酬の辯護數十件、此長年間なれば

辯護士にも疲れも來て居る、已に茂木氏は僅に四ヶ年にて最早疲れたりと申せり。況んや多年間の疲勞は甚しからん。よくも此の義務を盡くして呉れる。けれども皆之を恩ともせざりき。但し辯護士の名譽職にありて窮民の爲に無報酬とせば、國家社會一般よりは厚く敬禮を拂はねばならぬ。被害民本人は貧乏にて少しも挨拶せず。此茂木氏にも四ヶ年間一錢一厘の報酬を上げざりし。然れども之を恩とせず。若し恩とせば、折角の誠も水泡となり申すべし。

國賊は捕縛して可なり、召捕つて下だされと、再びす。

判事宜敷之を聽取し、且つ他日を定めて閉廷す。

此日、正造は、此に居るやツが「民事被告席に居る縣知事代理の縣官某」人民の造れる修繕堤防工事を破つたやツでありますと、再びす。

○九月十九日。宇都宮市に到り、猪熊氏に泊し、今朝、新任知事岡田氏を縣廳に訪ふ、不在。

大空の上から見れば、皆白し。富士も、美人も、雪のたるまも。人生惡人なし。

大空の上から見れば惡人なし。

乾坤唯有本來人。

今にしも、毒蛇にべろり吞まるゝを、知るや知らずや、晝眠る人。

○國家政府の壓迫は尙小なり。我心の壓迫は大なり。

官吏の暴勢は怖るゝに足らず。自身の暴勢は怖るべし。

社會人道の没落は尙慰すべし。我心の没落は慰すべからず。

盜賊は尙避くべし。良心の盜賊は逃るべからず。

右辛亥九月十九日夜、燈火の下偶感。

那須郡太田原町旅舎中川屋方止宿中、正造記す。

○大嫌ひ。なまけ、放蕩、干饅飽、心にもなく口しやべる人。

○文部の精神修養今更の如し。「文部省、精神修養に關する訓令を發す」遲し。遲しとて敢て笑ふべからず。遲きが故に悔ひず改めずとせば、正造の如きは如何。年六十にして始めて眞に近づけり。谷中に入りしは六十三歳ならん。去三十七年四五月の候ならん、青年黒澤酉藏氏に呼び寄せられたり。六十二三歳にして始めて聖人の道に入らんとす。既往の政治的過誤は、茲に改まりたり。遅きこと正造の如きは殆ど稀なり。語に曰く、朝に道をきひて夕に死すとも可なりと。文部の修養論、たとひ遅しとて、之を粗末に心得るは愈々非なるものなり。

○九月二十一日。正造、佐良土の私立高等小學校聚星館生徒諸氏に見へて、一席のお話をなせり。要は實踐論にてありき。例證に曰く、黒羽川西の富豪植竹氏は、宅地高く那珂川の河岸に臨めり。石堤を以て要塞の如く城郭の如くす。那珂川洪水至るも毫も怖なし。堤上に納涼臺あり。那珂川は鮎の名所なり。晩夏八月、納涼臺に遊び、眼下に鮎を狩らせて焼きて酒肴とす。洪水却々魚を狩るの好機會にして又憂ふる所なし。故に洪水水量を心配する必要なく、主人も家人も皆洪水當時の慘狀を記憶せず。是れ愚なるが爲にあらず、心を用ひるの要なきがためのみ。去れば正造は植竹氏に就きて調査の目的を達せず。止むなくして川東の水車業の家に到り、巡查と共に水害當時の實況を問ふ。主人は、答ふと言はんよりは寧ろ訴ふるがごとくにして、細かに語り。是れ必ずしも智なるが爲のみにあらず、心を茲に用ゆるが爲のみ。是を例として、實踐家は實物研究の適證なりと述べたり。

那珂川は湯津上村の佐良土東方にして、昨年八月の洪水、去二十三年のよりは殆ど四五尺低し。因に云ふ、三十三年よりも三十五年の方低し。三十五年に比せば昨年は更に低し。

○明治四十四年九月二十二日。昨日、此湯津上村の佐良土聚星館と申すにて、生徒に對し一席の話して、時間うつりて宿屋に歸る、午後三時なり。雨俄に降り來りたれども、雨具をば栃木町の宿屋金半樓に失念したるまゝ、の旅行なれば、ハタと此雨にこまる。主人しきりに滯留をすゝめ、昨夜よりの宿料も取らぬと言はる。喜んで滯留することにして、先づ風呂などに入る。

此の那珂川と箒川とは、昨年の洪水々量甚だ少なし。之を去二十三年に比せば、那珂川は四尺餘、箒川は三尺餘も低き由、六十歳に近き人の答にて、予が今度の調査は稍々まとまりたれども、烏山まで行く心算なれば、兎に角烏山へ行くこと、す。

那珂郡小川旅人宿深感樓に休む。此二十二日朝、雨多し。佐良土の主人、滞留を勸むれども、何時やむべきにあらざれば、此處まで進み来る。此處にて巡査に別る。巡査は黒羽川西分署より來りしものなり。此處にて小川村巡査に代はる。

小川村より一里半にて七合村の大桶宿に出づ。數十年前馬頭村よりも盛なりしと云ふ。此處、佐良土より二里半、烏山へ一里半。荒物商高野かね子氏方に休む。車夫あれども足痛にて行かず。雨はしきりなり。宿を乞ふ。甘諾す。巡査、車を見つげに飛び出す。主婦高野氏曰く、昨年の水は少なし、河原畑に少こし上りたるのみ、煙草畑に少々りたるのみ、大洪水ではありません。

巡査大島氏、車夫見付け運動空しく、歸り報じて曰ふ、巡査が車を頼むと言へば、腹が痛いと言ふは例なり。巡査は規則外に賃錢を出すことを得ざればなりと。予大に困まりて、高野氏に泊すときめたり。向ふの空屋に入れらる。こゝは巡査の駐在所なりしも、巡査の定員不足にて今は居らず。されば今晚は此駐在所の留守居になれるなり。薩摩守忠度の、「行ききれて木の下蔭を宿とせば、花や今夜のあるじなるらん。」など思ひて、

雨の夜に、木の下かけを宿とせば、こぼるゝものは、先づ涙なり。

止みなくて、雨もる家に眠るとも、玉のうてなに、宿るうれしさ。

雨水で、手を洗ひけり、駐在所。

正 造

○此二十二日はいかに嬉しき日ぞ。佐良土にて杖と雨具を貰ひ、殊に二晝夜はたごを寄附されて、大雨であるから天氣の日まで無代價で滞留せよと言はれしも、雨は何時止むべくも知れざれば、恵みの言葉を辭退して、ソロソロ出立の支度をなす。同村の巡査に案内されて、小川村手前にて箒川を渡る。船錢高價にて二錢なり。川の小さなと似ざるなり。七合村大字大桶に着する迄、雨はナカク、大降り、衣類の濡れざる所殆ど無し。傍の菓子など賣る店に入りて休む。足甚だ疲る。荷物は巡査持ちくれたれど、濡れて心窃かに困り、人力車を雇はんとす。此家の小僧走つて車夫に圖る。車夫は足痛なりと堅く斷はる。是れ選舉運動に多くの錢を得たれば、無慾の車夫、大雨中に働くを厭ふてならん。終に巡査も見かねて、車夫の家に到りて懇篤に頼めども、きゝ入れず。巡査もあきれて、其のよしを正造に告ぐ。巡査の曰く、車夫の規定は一里十五錢なり、錢少き爲に僞りて病と言へり。巡査が車を頼みしは過りなり失敗々と叫ぶ。正造窮して、一夜の宿を此店に乞ふ。主婦憐みて甘諾す。炬燵に火を入れて、濡れ風呂敷をかかさんとして開く。中に綿入羽織一枚見へず。見へざる筈、

宇都宮の猪熊氏に荷分して置きたり。忘れたるにあらず、持參せしと思ひしが、却て忘れたるなり。若し車ありて乗らば、車上忽ち寒くなり、足は冷へて病を得しも知れず。其れより炬燵に足を暖めると、冷へたる足も漸く暖くなりたれど、忽ち腹鳴り下痢を催ふし、二度廁に行けり。但し痛みはなし。あゝ、此日若し巡査の命令行はれて車あらば、病を得たるや必せり。車なかりしこそ神の救なれ。又此の家の主婦早く甘諾して、予に宿を賜ひしは難有き事限無し。是れまた神の導なり。人間萬事塞翁が馬。此日大雨に打たれずば、かゝる人道の趣味を知らざるべし。大雨に身の苦みを覺へ、又之を見るに忍びかねて巡査の周施、及び休みたる家の主婦の精神、及び正造將に病を得んとして免れたる、危き事どもを數へ來れば、實に神の救多し。

七合村の内字火打坂、坂路峻にして、人力車も乗客下りて往來せざれば、通ずる事を得ざる所二ヶ處。此道は烏山町より、黒羽より、白河に通ずる古來關街道と唱へたる假定縣道なりきと。

○中學生及女學生、宇都宮市に帽子長袴、衣類また紳士の見世物なり。老ひたる父母兄弟、家に泥土にまみれ、塵芥の中にあくせく三食を忘る。苛税に苦しみつ、働くこと風の如し。(子孫必ずしも父母の艱難を知らず。地方議員また宇都宮市に遊ぶ。老ひたる古きむかしの政治家、河川を視察して、材料をあつめて後人の参考となす。後人必ずしも参考とせず。)

○予正造が生産地小中の人々、俄に文部の獎勵によりて、予の歴史をしらべんとて予に問ふ。予は答ふるもの無し。只予の心、予の歴史は罪惡の歴史のみと答ふべし。善事は一も爲す能はずして今日に至れり。今や之を悔改むるむにつとむるものなりと答ふ。

○去十八日、正造は、谷中問題は國賊の仕業なり、憲法大破壊の國賊なりと再三す。言々責任を以て、出席判事陪審官檢事及書記に對し、念入責任を以て云々すと斷言し、且つかゝる犯人は捕縛せられたしと述ぶ。(九月二十二日、再び記す。)

○予は無學なり、天地を師とす。

○不幸却て眞實の幸となる。五度牢に入りて健全となる。ツラ／＼思ふ、已往はみな罪惡なり。谷中に入りて知る。

○政治家は大勢を察す。我は勢力の罪惡を改めしむ。然れども予の已往は罪惡の言行のみ。一も二も善い事は無し。然れども今は之を改めんとす。

○人に惡人なし。

惡を憎む事甚しからざれば、善を爲すこと亦甚しからず。

善をなすこと甚しからざれば、仁を爲す事愈々難し。

之を外にせず、己れの罪にす。

○山に川に遊ぶものは多し。

樹を見るものと、水を見るものは少なし。

魚を見ると、きの子を見るものゝみ多し。

○可愛宿屋の夫婦の言葉。

あなた様は、こんな處に泊つた事はありますまい、さぞきたないでせう、と。

予、満面恥ぢて答へて曰く、予の家は假小屋なり、水の中の假小屋なり、鴨やあひるです、と答ふ。

主人怪しみ、水の中では、それでは夜るとまる時には木の枝の上ですか。

予が曰く、鳥は高い木の枝で枕するけれど、我は十餘年枕する處なし。昨夜は誠に安心して眠られました。

主人いよく怪しみ、夜眠れぬ程の困まる事は無いです、と。

此の無邪氣なる信切なるや、予の言葉は解せざるも、精神既に同一なり。嗚呼難有き此良民。(河内郡瑞穂村相澤、安兵三郎氏方)。

◎四十四年九月二十六日。

智識ある者却て予の心を害す。

無邪氣の人にて予の心に合す。學者却て合せず。合せざるのみならず、之を害す。

造るは天に遠し。

造るから解せず。是れ學者なり。無學無邪氣は心中一物なし、虚心平氣なり、明なる事明月の如し。此人々は常に神を見る。而も神の存在せるをば知らず。見て名を知らず。

見て知らず。

山野に出で、多くの色々な草花を見る。花の綺麗なるには、眼も心も奪はる。而かも其花の名を知らず。此人が花を楽しむは、自然の樂みなり。造りて楽しむにあらず。山に草刈りに來り、他の用事の次手に、山道を往來する時に見る。嗚呼、此人々の心と、市街に賣る爲に造れる盆栽流派と、何れが自然の眞なるか、問はずして明かなり。

盆 栽。

盆栽花流の學者多し。造るは自然を造る。造れば自然の如し。自然を害して、又自然を見せんとす。造る災は已に多し。此類多ければ社會は皆死せん。今の時は危し。

中和天地の位。

中和を致して天地位すと言ふ。以上の例、細事に似たれども、天地中和の真相は明かに見ゆ。

一 汁 一 菜。

一汁一菜の規律を破るものは、宿屋の御馳走なり。膳の上に鮎焼、鰻の蒲焼、鼻を動かす。已に錢は拂ふのである。ツイ食ふ。此位の忍耐が出來んで、惡魔の試を退ける事は出來ぬ。つとめよや、神の道。つとめよや、心の規律心の誠め。あゝ、慾か。已に錢を拂ふもの故に食ふは慾なり。食ふは、鼻より入るの匂にあらず、錢を拂ひたる爲めなり。鼻は只媒介者なり。根抵の心は慾なり。慾を慎めば、凡そ事の成らざるはなし。

右、桑島にて記す。

○縣會議長、旅籠十七錢で、四ヶ年間。此の宇都宮池上町富澤屋彦三郎氏方を訪ふ、二十九ヶ年目なり。去十七年より宇都宮に縣廳移り、富澤屋には十九年より四ヶ年間。滯留の頃の少年も年たけ、母も健康にてありき。

○上野松次郎氏を訪ふて、銚子方面の河川水勢地利を問ひ、夜食して歸る。あとより追かけ來りて、金五圓を與ふ。銚子行寄附也と。其れより富澤屋に到る。去十九年旅籠代一日金十七錢ヅ、の最極低價を以て泊し、滯留四年。但議長の二世滿四ヶ年、二十三年に達す。同年衆議院に選ばる。爾來二十年にして右十七錢云々の事を語る。主人恥ぢて物言はず。其十七錢は、當時日光詣りの村々の老婆連五七人の組合にて來り、宿料をねぎりに泊まる最下等の價なれば也。故に宿屋として今日は恥づる程なりと察せらる。然れ共其れは必要の履歷で、雙方舊知己たる所以なり。其れより昨夜遅くなり、旭町猪熊國三郎氏方厄介となり、今朝財布見當らず。夫人心配して使を走す。財布幸にして富澤屋の小兒の拾つてありとて、持ち來れり。在中の物を開封すれば金五圓也、ありがたしく。(九月廿八日、旭町にて改め記す。)

◎十月二日。栃木縣知事に始めて面す。予は始めて來る知事には、必ず面會を求む。今回も亦禮を同ふす。予は政治に參する二十年、十三年より二十三年の春まで縣會に六回し、二十三年より三十四年十月まで衆議院に六回す。大小議會前後二十年の久しき、予不肖無學なりと雖も、經驗上地方風土人情等に於て、遠方より來れる

地理不案内の新任に、成るべく便宜を與へて、善政をやつて貰ふは、嘗に地方の爲のみならず、國家社會無限の公益なり。知つて言はざるは義に非ず。用ふると用ひざるとは知事の徳不徳にあり。我事は専ら義を盡すにあるのみ。是れ故らに面會を求むる所以也。

昨日、廳に面會して告て曰、今や法律は治政に用なし、新に用なし、只頽廢挽回の方面に用あり。土木は他課を壓し、土木吏に非ざれば人にあらず。飽くまで精神修養を要す、修身修養を急務とす。修身齊家治國平天下の順序あり、階段ありて甚だ面倒なり、多くの歳月を要するが如し。然れども是は順序のみ。若し夫れ修身の一事、國民皆修まらば、國を修めざるも修まり、天下を修めんと思ふ時は、已に業に天下平らになつて居る。順序階段あるを以て面倒なりとは言ふべからず。政治の本、内地は町村を基礎とす。町村善く修らば萬事行はれん。然るに今は町村甚だ破れたり。之を復するに就て盡されたし云々。予は、下野の河川は大小河川皆視察して、昨年八月の洪水が我栃木縣に若干の損害を與へしかを見たり。又予の視察は水量の一個條のみ。而も到る處色々なる事實の目に入り、見ざらんとするも得ず。色々の風聞耳に入りて、聞かざらんとするも得ず。予は十五年目或は二十六年目にて下野の河川を一巡したり。イヤハヤ、驚入る事共多し。但し今日は先づ是にて退かん云々。又曰、予は言に責あり。又曰、予は予の願なし。又曰、予は功を身に集めず、功は何人に歸するも可なり。一身は犠牲に到てはじめて我功なり。犠牲に非れば眞の功にあらずと斷言す。知事曰、我々縣民たるもの、ありがたく思はねばなりません。予謹で辭して退く。時に十一時。今日又訪問せんとせしも、屢々

するは不可なりとして、控へて行かず。

○修身の一を挙げば、齊家學がり、治國平天下皆學がらざるを得ず。

◎十月五日。宇都宮出立、茨城に入る。

○法律、人を見ずして條章を見る。

治水家、河水を見ず。

山林家、山を見ずして金を見る。

又、木を見ずして木を伐る。

人を見るものは、木を伐らず。

河を見るものは、河を荒らさず。

人を見るものは、人を虐げず。

虐げるは、人にあらざる也。

○他方は知らず、下野は盜賊の巢窟となり、盜賊の卸賣、仲繼、小賣行商の組織ありて、大に備はれり。

◎十月八日。

○感。我正造の許す傳授事。

一、馬鹿を發明にする事。

一、貧を以て世に立たしむる事。

一、病を無からしむる事。

一、訥を雄辯にする事。

一、無學を學者にする事。

一、立身出世する事。

一、眞の美人となる事。

一、頼られたる世を復する事。

一、費用百分三を要せずして、治水其他の工事をなす事。

一、三年にして有利國債十億以上償還し、經濟の道を立つる事。

一、教育費百分三を要せずして、人物は已往に百倍千倍する事。

一、飢餓困窮を救ふて、世を恨ましめざる事。

一、兵を用ひず、政費は外交の一に重きをいたして、國威國信を海外に厚ふする事。

一、悲觀を樂觀にし、萬民惡事を爲さざる事。

一、有限の富を無限の富たらしむる事。

○治水の名の下に谷中を虐待す。正造十年之に居る。虐待せるものは治水を學ばず。虐待されたるものは治水を

學べり。

◎十月十日。

逆境に忍べば、研究成。

順境に忍べば、怠慢成。

故に逆境却て本境なり。

○日本信用回復願人の一人。

正 造

今の教育は、昇級するに従て人物を小にす。其高等大學を畢るの頃は、殆ど豆大の人となる。少年の頃より教の道を大にす。大にする爲に入口は小なり。入口の狭きを見て、小人物を造る方法なりと思はゞ、誤の大なるもの也。其初め、形は小なりとも無形を害せざれば、無形必ず發育せん。無形必ず宇内に普し。有形の大は愚人を威すに過ぎず。有形は有限なり、無形の大思想を容るゝの餘地なし。小なる袋に小思想を容るゝものと思ふは常なり。道は決して然らず。狭き所眞道あり。眞道は宇宙を貫く。狭きとは何ぞ。一筋に眞直に行くを言ふなり。漠然不縮の大幅道を横行するよりは、狭き眞直の道を行けと言ふ也。

○下野治水要道會。

我下野治水要道會は、下野上野武藏下總常陸の一府五縣の治水なり。即東京群馬栃木埼玉千葉茨城に涉りて、利根川を中心とする治水なり。諸水源の山は數多なり。此河川は、一方銚子港より太平洋に注ぎ、一方は江戸

川に落ちて東京灣に入る。而して諸府縣の利害は一なり。されば諸縣各先づ自國の形勢と他府縣との關係を研究して、而して後はじめて他府縣に通ず。是れ下野治水の區域とす。

然るに日本封建の餘弊は今に甚しく、諸府縣各割據して治水を謀り、諸府縣の郡村亦郡村に割據して私利を謀り、工事を勉強し、相争ふて庭前普請と唱ふるものに餘念なく、終に今日の無要有害の土木に工費を濫費するに至れり。

夫流水は一流なり、一貫なり、何れに厚く何れを薄くするの理なし。其形勢、五州の山々より流れて海灣に行くものなり。然るに諸府縣各封建の態度を固守して防禦工事に務め、或は關門を造り、或は高堤を築き、或は官民黨派境界を守らんとして、他方を害して毫も憚らず、終には痛く流水を妨げたり。甚しい哉、人生必用の水を敵視して、各々正當防衛の感情となり、權謀術數を以て互に水と戦ふもの、如し。あゝ、流水會て人を害さずして、人先づ流水を害す。故に人多く材多ければ害必ず増々多し。策士多くして工費多端なり。人造水害の多き、豈反響に非ずや。今にして早く其非を悔ひ其弊を改めずんば、悲惨止まる所を知らずして、關東五州皆まさに水底に滅亡せん。是れ治水改革の急務たる所以なり。

試に水源の山々を見よ。群馬栃木の濫伐は、單に栃木群馬を害するのみならず、直に茨城千葉東京府下を害するに非ずや。而して之に對する防禦と唱ふる最大の惡工事は、即ち河川流勢の妨害なり。此妨害や、關宿及其附近に横はり、栃木群馬埼玉を迂回して、東京茨城を害す。可笑、千葉茨城の妨害工事は、千葉茨城自身を害

したるにあらずや。山河の痛痒すべて此の如くなれば、治水の最も忌むべきは封建的愛憎偏頗なり、私慾私利我利我慾なり。誠に關係諸府縣同心協力を最要とす。特に栃木縣の治水は無用なり。群馬の封建的治水は有害なり。茨城埼玉東京亦然り。偏重偏愛は、其偏重偏愛せらるゝものに取りて、眼前幸福の如しと雖も、偏重偏愛はもと是れ永久のものに非ず。眼前の幸福は必ず他年の不幸を免れず。而して一朝、災の時たらんか、其災や終局にして之を救ふの術なき也。終局の災は、救ふの人なく術なき也。今の時は切迫也。區々の技術談を止めよ。流水は技術を要せず。治水の大義要道は大活眼に在り。大なる公益は大なる理想に在り。

◎十月十三日。

鹽原感。

箒川水源伐木せり。去三十五年にも洪水出で、字機織宿屋三軒の大屋、床上二尺五寸、乘水流勢強く家材流亡せりと。左れば若し尙ほ三尺高く出水せば家流れん。足尾銅山の三十五年、利根川カブラ川の四十年、第一回洪水の如く水量俄然一丈内外の高さを以てせば、流失家屋、鹽原にて數十戸に及びしや必せり。其時は人畜亦流失を免れず。予は胸中塞がり、役場に至り、鹽原村々長に面して右の次第を告げたり。歸途、車夫に告げられて紅葉を見る。紅葉は色鮮やかにして、天地と共に正氣盛なり。下野の國や、人はあれども紅葉のごときもの無し。紅葉は正直なり。紅くなる時紅葉の真相を現はせり。紅葉は正直なれど、人は不正なり。赤くな

るべき時に赤くならず。赤くなるべき時に赤くなる人を笑ふて、正直を學ぶの心を失ひ、赤くなるべきに赤くならざるを耻とせず。人として草木にだに及ばざるは、是れ下野の人民なり。予は深く下野の爲に耻づ、爾來また此紅葉に對する能はざるなり。

人生大道あり。草木氣節あり。人にして道を履まざれば、草木にして氣節なきと同一なり。農學者にして田地植物に恥づるなきか。林學士にして山林に耻づるなきか。醫にして病に耻ぢざるか。馬に乗る人は馬よりもおとり、犬を養ふもの父母を養はず。人にして禽獸に及ばざる萬々、而も之を人と言ふ。何を以て人と言ふ。直立歩行言語を通ずるのみ。禽獸にして物言はゞ、草木にして物言はゞ、人に優るもの多々ならん。あゝ草木なる哉、禽獸なる哉。故に予は禽獸を愛し草木を愛するなり。然り而して人を愛するや難し。予は先づ己れを愛し、また己を責む。己を責め且つ愛す。己を責むる甚しからざるものは、己を愛する亦甚しからず。己を愛すること甚しからざれば、人を愛すること厚からず。人を愛すること厚からずして、人を責むる權利なし。曾子曰、我れ日に三度我身を省みると。よい哉、己を省みるを以て人生の修養とす、修養の第一歩とす。省みるの一事、未だ徹底にはあらず也。

○日本人の氣風は、下より起らず、上よりす。民權も官よりす。日本の民權は、民人より發揚せるにはあらずなり。憲法すら上よりせり。あゝ、一種不思議の氣風なり。日本今ま君主專制國の如く、又立憲の如く、盜賊國の如し。危しく。

○正造は政治と云ふものに關せず。政治に關せず、只日本を一の家庭と見るのみ。夫れ治水は雨露の如し、流毒は衛生除害の如し。世の人誤りて、予を見て政治屋とせば、是れ家庭の自然的秩序を知らざるもの也。

◎二十一日。縣議諸氏の中、足利下都賀を丸治屋に訪ふ。夜九時。諸氏は不在なり、芝居見に行かれたりとは、下女の答なり。諸氏、下野を如何に樂觀せしか、悲觀せしか、態度毫しもわからず。下野將に亡びんとして、縣議員は此の如し。國家の亡ぶるも大厦の倒ると同じ、一木の以て支へ得べきにあらず。然れども人道に於ては、一木以て之を支へんとするもの也。人道は時の勝敗、人の多少、勢力の大小に論なし。人道は正理なり、正義なり。眞理は百萬人の頭腦に在らずして、一人の精神に存在する事多きものなれば也。

○亡國の人は眞理を外にし、學者は眞理を悟りて放棄し、愚者は眞理を知らず。宗教家亦直角に眞理を述べず、感覺を忘れたる人の如くして、敢て社會の興廢存亡に頓着なし。徒らに惡魔盜賊の意のまゝに働かせて、之を傍觀坐視するに似たり。學者仁人は退ひて口を開かず。偶々開くものは書冊にす。書冊は制度法律の取締る所にして、眞理の發揚など思ひもよらざる也。茲に於て盜賊は手を伸ばし、惡魔は白晝横行して、良民の財産を奪ひ、又は其肉を食ふ。是れ亡國の亡國たる所以也。

○正造曰く、人の家に食する時は、先づ飯の中のアラを見よ。アラあらば取去るべし。又其の家にアラあるを見れば、其飯を口に入る、前に、其主人及主婦にアラあることを告げよ。而して後に飯を食ふべし。若し飯のアラも家庭のアラも、去らず、去らんとせすして食ふは、獸心なり、厄介なる信友のよし無し。(三十日)。

○河川の流勢を妨ぐる勿れ。

洪水の滯留休泊所を造る勿れ。

洪水は地勢の自然に順ふ。

泥棒よ、山河の神仙を汚がすなかれ。

汝もし之を汚がさば、山は荒れ河は破るゝのみ。

○
世の中は、とまれかくまれ、まれ年の、まれのほまれの、年のまれく。

明治四十四年十一月三日書、七十歳

正 造

〔十一月三日は田中の誕生日〕

老ひてまた足腰立たぬ、人々が、立てよと叫ぶ、時迫まり來つ。

義に進め、あの山伏の法螺ふきて、草ふみわけよ、道ふみわけよ。

○或人に綿入を贈りたれば寒し。而も其趣味甘く且うれし。此寒きは寒きに非ず。人を愛せる報酬なり。天の賜ふ所なり。天の道は大なり、身心を透ふして明なり。天の與ふる報酬は四時の如し。一を以て盡くすべきにあ

らず、即ち遠く明なり。

○正造言ふ。予は餘りに記録的記憶を缺けり。人の名、年月、地名、鳥獸、草木の名をわする。若し正造をして少しく學文せしめば、早く何かに用ひられしならん。若し用ひられしならば、今日の幸は得られざる也。予の幸は、捨てらるゝにあり。捨てられて始めて、人事の何たるかを少しく知れり。若し學文ありて用ひられしならば、或は今日の人情は知らざるべき也。凡庸にして早く採用せらるれば、人情を知る由なければなり。人情に通ぜざるは金力の邪魔なり。學文の爲め、人物不相當に登庸せらるれば、金持よりも一層甚敷盲目となり、知らず／＼他人に残忍の行爲をなす也。

○治水の元は山澤より起るなり。下流人民は即ち被害人民にして、水害防衛の境遇の爲め、公平々坦の知識を失ふ。之に反して山中に住む者は、出水の原因を詳にす。已に基本を知る。本を知る者は學ばずして末を知る。

◎十二月二十六日。

○夫れ國家に美術あり、國華あり。然れども皮相的學術にあらず。真理の實地研究の結果にあり。謹で之を用ひば富み、之を知らざれば失ふ。日本の負債償却は此一方にあり。徒らに實業獎勵人民救済の爲に多くの財本を失ふと雖も、一の公益を復するを見ず。貧は益々貧に、負債ますます／＼山をなす。之を復するの法他にあらず。本に回るにあり。本に回る。美自ら其内に存し、實自ら其内に含む。

○予が育せる人々にして、予の名を賣り、實を賣り、或は身肉を賣つて食ふもの多し。是れ天地の大成なり。見よ、親の身肉を食はざるの子なければなり。

○谷中滅亡今日に至る原因。

もろみ澤山。

踊り。

無教育。

偶々字を知る者村長となる。忽ち驕慢、人民を奴隸禽獸視す。又時々の水害あれば、却て魚蕃殖す。耕作十二分、工費降る。

周圍池沼河川をめぐりて、他人來往稀なり。村中溝堀は毎戸の宅地をめぐりて、要塞の如くして、盜賊の來るなし。實に泰平無事、豊饒天産に生命をまかせたる別天地なり。故に人造水害も、田畑の無收穫も、官吏の虐待も、租税も村費も、他の言ふまゝに出し、災到れば、又天災なりと唱へて恨むなし。

此の如き地方は天下殆ど稀ならん。若し夫れ此富饒安樂の人民を導くに正しき教あらば、いかに宜しかるべきに、徳川の政略、下民は智識なきを得策として、農民は教育せぬをよしとし、此弊獨り谷中のみに非ざるも、他の村々は水害なければ收穫限りあり、勞力に非ざれば衣食するを得ざれば、ふだ樂の暴飲暴食に夢見るひまなしと雖も、谷中は天産力多く、堤内年々、金にして二十五萬圓以上を得て、租税極めて低く、交際極めて少

なく、土質肥へて勞力少なく、用水亦村中より湧き出で、用水路の普請更に無し。薪は庭前の葭茅にて餘りあり。屋根葺替又同斷。魚あり、野菜甘く、菅草を刈り、宅地の篠竹を以て笠に編みて之を賣り、葭茅の餘れるをば簾としアジロとす。坐つたまゝに働けて、金錢流れ入る。冬季は水鳥多く來れども、之を取るの法を知らず。鳶飛んで天に到り、魚淵に躍るの實況は、此地にありき。

人民は所謂山歌村笛の達人。遊藝樂器、踊りの衣裳、鼓、尺八、太鼓皆な備はれり。而して生活日用の算盤筆硯の備あるものは、百戸に付一戸に足らず。富者も剛は破れ、木屐草履は少なし。土藏あれども、もろみ桶のみ。叔俵は却て軒下に積重ねてあり。土人曰く、宵越しの錢なしと。以てほこりとなせり。

○明治十五年の頃、國事犯陸奥宗光氏出獄して地方漫遊の途、下野の日光に到りて、山川の光景を見て語りて曰く、下野の山川は光景美なり。然れども風景は經濟に要なし。山は高きを以て尊しとはせざればなり云々と。當時の縣會議員鹽谷道博、小峯新八郎の兩氏語られたり。

後十五年、明治三十年は下野の山川荒廢して、一つの光景だもなきまでに變りたり。

今年四十四年は、去十五年以來の山賊及河川泥棒、罪惡のすべて露顯せる昨四十三年八月の洪水を以て、關東の光景ますく殺伐なり。

陸奥氏は足尾銅山の親戚なり。陸奥氏大臣となり、足尾銅山は盛大に到りしも、關東の廣野は永久不毛に化せり。

是より先き、明治十年の戰爭には、足尾銅山に經濟的山岳ありとて、樹木伐採をはじめたり。陸奥氏の日光に來りしは、銅山調査の爲ならん。陸奥氏は井上外務卿によりて無任所公使となり、後ち農商務大臣となる。二十三年は陸奥氏農商務大臣たるの時なり。一方には井上氏を以てし、一方には銅山を以てして、勢漸く盛なるの時、銅山暴横を極め、鑛毒放流、沿岸荒廢、病人多く、洪水また舊時の比にあらず。人民漸く驚き、諸般の運動を始む。

二十四年十二月、衆議院内に鑛毒の聲揚る。陸奥氏は百方防禦につとむ。終に沿岸人民を撫するが爲に、兩毛の野に金拾萬圓を投ず。人民愚にして、腰を折るもの多し。時に日清戰爭起る。國民、内地を顧みるの餘地なし。議員田中正造等は年々足尾鑛業停止の質問をなすものなりしも、戰爭中兄弟の紛紜を控へんとて、二十七年質問を止む。廣島に臨時議會を開き、軍費を議決す。大山將軍出軍するの時なり。議員が鑛毒質問を見合はせ内地の一致を期せしは、德義なるべきに、古河市兵衛の末流は足尾の深山に入り、反別七千三百町悉く盜伐せり。時に火多く起り、枯損木拂下を名とせしは此時なり。

此間二十五年。衆議院解散、選舉大干渉は、松方内閣、内務品川彌次郎なりき。二十九年の大洪水は、鑛毒多量もたらし、被害亦非常。人民蜂起す。

回顧。陸奥始めて日光に來りて山川を評せし語、今は却て經濟の山ならざるを覺知す。

明治四十五年(大正元年)

日記

(明治四十五年一月—(改元、大正)十二月)

◎明治四十五年一月五日。

○人として、食充ち力充つるも、獸類と戦ふの力なり、神靈の力には非ざるなり。人は人の力を得て神に背けるものと戦ふべき也。人にして最強の力を得る如何。斷食なり、斷食より得たる力也。長き斷食の力は深し。短き斷食の力は浅し。斷食して祈りせざるものは、未だ力を得るの由なきものなり、力あるものに食はるゝは當然なり。獸と人とを選ばずして、他物に食はるゝなり。是れ自然なり、故に天命には非ざる也。天命は天理より來るもの、即ち人の得て學ぶべき教なり。天命は神より來るもの、人にして天命を樂むに至らざる、未だ完全の人には非ざるなり。天父が人に備へし力を得ざれば、是れ天力を自棄するものにして、天命を樂むの境を距る遠く、造物の自然にまかせん事を怖るゝなり。造物の自然にまかせんか、人と禽獸と區別なし。今の世は自然にして、天命に非ず。天命に死するもの少なく、天命に生まるゝもの稀なり。生まるゝも獸生なり。

死するも獸死なり。其教は獸心猛育なり。看よ、人となりて、蛇慾奪賊ならざるは稀なり。人にして、神を離れず聖を離れざるは殆ど稀なり。昔しキリストに於てのみ存す。其の別かるゝ所の本は、食をのみ生命とする動物と、天地の生命を食物とする人物との別なり。此理を解すると解せざるとの別なり。キリスト曰、人はパンのみを以て生くるものに非すと。中庸は誠めて曰、人心これ危くして、道心これ微なりと。

○或人、予に問ふ、今の政治奈何。答。今の政治は數百年以前の戰國時代の如し。政治家の思想は一に人頭勢力にありて、政治の得失にあらず。強弱の争にして、公益の争にはあらざるなり。人を左右するの智謀あるものの上となるのみ、國家の爲不爲にはあらざるなり。廉耻を遠ざけ不義に近寄るなり。數を以て勝とす、品質の良否にあらず。三四百年以前の戰國時代の如し。而も戰國には武士道あり、今は是れなし、恰も猛獸の嚙合の如し。若し今の政治家に、人道や神の道を含めんとせば危ふし、山犬に金玉を擲ち與ふるに同じ。與ふるものを憎み、且つ恨みて、之を嚙み破らん。而して飾るに文明を楯とし、辯は諫を防ぐに足り、智は悪事を働くに善美の口實を作るに足る。財産家の子孫を愚弄籠絡して、金品を欺き奪ひ、名稱を利用して私慾を逞ふするに足り、奸才以て租税を誅求するに足り、一般良民の耳目を眩まし、公盜を働きつゝ、逃辭と賄賂を以て世人を惑はすに足る。是れ高等學校の設ある所以なり。

○陸及び溝堀の蛙は蛇及鳥に觸るゝ事あれども、井の内の蛙は蛇及び鳥にふれずして、白晝星天を見るの神となる。

流行の新聞紙を多く見るもの、諸物諸事に觸るゝ事多くして、却て本然に遠くなる弊多し。新聞紙上に於ては神を發見すること無し、斷じて是れ無き也。

○政治家は組織的記憶を要す。

宗教家は、單一、強堅、高尚なれ。

○今の政治今の國民を見る、恰も下野の岩船山の如し。岩船山は奇景の獨立山なり。此山より石材出づ。全山皆な岩石なり。營業者争ふて石材を伐る、山の風致を破るに頓着なし。政治亦然り。争つて天然に疵つけ、又人心を破る。曰法律、曰租稅、曰兵役、曰學文。皆な國其物を破りて其物を造ると言ふ。本末を誤りて憚からざるは、政治關係の通弊たる當世の大惡事なり。國家社會人類の生命を永續せんとせば、斷じて此の大誤を根柢より改め、天然の良能を發起せしむるの外なし。果して是を實行斷決するに於ては、憲法々律教育の渾てを全廢して、更に天神を基とする方法、即ち廣き憲法を設くべし。誠に天則によらば、即ち憲法の天にかなふを言ふなり。眞理を中心とする憲法なり。今の如きは、岩船山を崩して、千萬年の天然力をこぼちて、一時の利を争ふに過ぎず。人生の惑、茲に至て極まれり。

○岡田正坐を學ぶ二年に涉りて、此間僅か十數回其席に列するのみ。之より先き、正造二十歳以前十七八歳、政治に傾きてより殆ど五十餘年。此五十餘年は罪人の研究なり。熱心最高し。其れの爲めに一方、人心道義靈動などの信念は無かりき。

○予、去二十八年、滋賀縣近江の唐崎の松を見し時、老ひて衰へたり。同行せる土地の有志に告げて曰、此松の根の周圍土古く、年を経て養分に乏し。今新たな肥へたる土と入れ代ふる必要あり。但し其入代へも過激にせず、其道の人に問ふて根を痛めるなかれと。實行せしや否を知らず。

同年、相州逗子の海邊に靜養す。徳富老人隱居屋の側に松五本あり、何れも二百年以上の大樹なり。老人が草竹を刈拂ひて根方を綺麗にせるを見れば、予は驚き、是の如く綺麗に根土を顯はさば、本年夏もし早ばつにて長く雨降らざれば、五本の松或は悉く枯れんと。老人怖れて、之を助くる法なきやと問ふ。予答、早く松の根に草を植ふべし、然らざれば早く麥を蒔くべしと。老人直に麥を蒔けり。然るに麥種足らず、蒔かざるもの二本ありしに、果して三本は無事にて、二本は枯れたりと後に聞けり。

○支那の山々濫伐して造林せざる數千年、肉落ち骨露はるゝ不毛山多し。僧侶の頭の如し。髮剃り數十年の後、禿けて肉落ち、老ひて骨現はれたり。長髮時代の野蠻、天然時代に及ばざる遠し。

文明の弊。惡政の下。此の二つより來る災は、實に僧侶の頭の如し、支那の山岳の如し。鳥獸を殺すは野蠻なり。人を殺すは野蠻なり。他人の國、他人の土地を奪ふ、野蠻なり。

但し守る者なき物は天物なり。天物は之を收むるを禁ぜず。

野蠻にして野蠻の行動を爲すは可なり。文明の力文明の利器を以て野蠻の行動をなす、其害辛酷なり。故に野蠻の害は小なり、文明の害は大なり。

谷中村、十一ヶ年耕作をなさしめず、天物を空ふせり。即ち文明の技能を暴用して、野蠻の行動を爲したるなり。

○天國は何れに在るや。天國は此世に在り。此世の外、別に天國なし。若し好んで地獄に落ちば、之を奈何ともすべからざるのみ。陥らざる者は皆天國に居るなり。皆と言へば、多くの人の皆か。否な、少しの人の皆である。眞に天國に行く人の皆である。眞に極めて少數の皆である。

○二月六日。

○亡びは俄然に来るにあらず。原因甚だ遠し。而も漸次なり。故に人々之を解せずして亡ぶ。亡びて尙ほ其理を知らず。此説長くして複雑なり。一例を示さば藤岡町の如し。又栃木宇都宮の如し。亡びつゝあるものを以て繁榮となす。眞の繁榮に非ずして、未來必ず此繁榮より亡ぶるなり。否、正に亡びつゝあるなり。汝の手足を切り、汝の肉を食ふて飽く。飽くは死の道なり。死の道を得て喜ぶ。死を喜ぶに同じ。亡びに喜び、死に喜ぶに同じ。然れども其因を明にするもの無し。其迷は皆慾より起りて、人道を忘れ、天を恐れず、人を見ず、私慾の外また樂みなきに到りて、此に陥りし也。

○日本は立憲の實力なし。たとひ學術上の知識經驗ありとするも、氣力精神に缺乏す。立憲の力を有するもの、果して幾人かある。氣力は獨り軍人にありと言ふと誰も、是れ立憲の理想に背戻す、寧ろ撞着す。日本、立憲の心あり力あるもの、殆ど少數のみ。清國亦然り。彼の共和、條理に於て可し、實に於て反す。

○予は神を悪魔界に於て見るなり。

天にのみ神在るに非ず。清き處にのみ神居るに非ず。悪しき處、汚がれ處、悪魔の左右にも必ず居る也。悪魔と戦ふは、神の力によらざるを得ず。此時神は必ず神を見る也。人の我を譽むる時は、神は去つて人に任す。我を責め、我を虐げ、故なく我を殺し、我生命を奪ふ時は、神必ず我傍に來り救ふなり。然れども若し救はれんとするの心無ければ、神強ひては救はざるなり。又た殺さるゝ方社會の救となれば、神亦殺さしむ。キリストの、殺されて一般を救ふの大なるありて、殺されたり。キリストにして始めて此任に當る。神亦當らしむ。故に恨みず、逃けず、自若として殺さる。進退、神と合す。

○三十四年の冬、大出喜平氏囚人の身を以て、泣いて國家の志士社會の仁人を呼起す。志士仁人皆動き、鑛毒視察に來りたり。氏が一滴の涙、能く數萬の被害民をうるほせり。

未決囚野口春藏氏、判事辯護士の多數を船に載せて對岸に移る時、誤つて船傾き、乗者皆な溺れたり。野口氏此失策を謝さんには、口以てすべからず、行以てすべしと思詰めてや、寒風骨身裂くるが如き時、野口一人濡れたる衣のまゝ、田畑臨檢の案内をなせり。夕に及んで、野口忽ち發熱起つ能はず。判事辯護士等皆な袂をうるほす。

大出氏、謠歌を作り、歌はしめて、數萬人民の精神振ふ。

二月、警官船橋を撤す。春藏氏利根川へ躍り込みて船を集む。警官恐怖、爲に船を春藏氏に貸す。大出氏の大事を擧ぐるや、必ず室に入りて病めり。

野口氏の大事を擧ぐる、必ず馬に乗りて遠く走り、大勢を集む。而も大出氏の一室に在りて案すると、功勞相均し。

○清國動亂を以て大問題とするは、汝の眼小にして入り難きが爲のみ、問題の形全部が見へざれば也。谷中を小なりとするは、形小なるが爲なり。形小なれば小なりとす。形や、大なれば大なりとするのみ。

○明治三十六年春か、夏か、三月か、四月か、又三十七年か、忘る。神田青年會館に於て、諸學校入校生三千人を招待して、學生の心得を演説す。辯士黒岩周六氏と予と二人なり。予は東洋久しく聖人出でず。今度は東洋に聖者出づ。然れども日本一度亡びて後、聖人は日本に生まる。此間危し。此間は各自専門の聖の一角を修養すべしと述べたり。翌日、學生黒澤酉藏氏來訪、予を難詰して言ふ、何を證據にして昨夜の如き事を公言せしやと。予の答、予の理想は茲に至るのみ。具體的證とするもの無しと雖も、何ものか予の口を以て言はしめたりと。

○去三十五年、アクビ事件刑期四十一日を畢りて出づ。廣島縣尾道町に至り、病痾を愈やす。滯留十五日、花井卓藏氏の議員候補の選舉を助けて勝たしむ。演説して曰、今日の議員たるものは、布哇の癩病院へ行く醫師たらずんば、主義を貫くべからず。

○三十六年、静岡縣掛川在南鄉村に到る。同郡の有志一百人某樓に會す。此時正造は、政治思想を捨て政界を脱したり。然れども強ひて言はしめば、世界海陸軍を全廢すべし。此他は言はず。

○三十七年春、日露交戦開け、臨時議會あり。予また掛川町に演説せり。曰く、議員は五億圓を以て多しとす。然れども事は見込の三倍なり。十五億の軍費を以てするも、而も尙足らざらんを怖るゝなり。其後は如何にするか。凡金錢は盡きるも、盡きざるものを修養せば可ならん。人類間の謙讓道義心、之を以て互に欺かず、正直に上下一致せば、十の露百の露來るも怖るゝ處なし云々。一百の露といへども、天地と戦ふを得ず。人民、天然の形勢により、天地の如き心を以てせば、毫末恐るゝ所なし。只此の心を修養するの厚薄にあるのみと演ぜり。

○眞善美、相同じ。

○三十四年の頃、新井奥遠氏、予を見て神経病なりとして、之をさとせり。依りて精神落付きたり。然れども當時何のために落付きたるやをば知らざりしなり。初め新井先生が、病院へ行け、診察料も藥價も無謝にてよろし、氣隨に參るべしと言はれしも、當時此の難有き言葉をありがたしとはせず、却て新井先生の不明を心よからずとはせり。然るに精神の寧靜に歸したるは、即ち新井先生の御蔭たるは、他年漸くさとりしなり。此の如く高尚の救はさとりに難く、多年に涉りて漸く知るべきも、當時には會得し能はざること多し。神の恩に至りては、終生恩をうけて、終生わからず。大なる哉、神徳。大なる哉、救濟。大なる哉、境遇。大なる哉、教育衛

生。萬事萬般、皆神徳に非ざるはなし。

○あゝ、此邦家を奈何。國家は己に業に亡び盡したり。

○艱難を共にせし人を忘るゝ勿れ。一度共にせし人は、二度共にする人なり。一度義に勇みし人は、二度また義に勇むの人なり。

○人を見る、物を交ゆべからず。人を見るは、人のみを見るべし。物を見るは、人を交ゆべからず、物は物のみを見るべし。故に人を見るは、他物の關係を見るべからず。人は物に動くなり。其の動きし時に見れば、形備らず。人を見んとせば人のみを見るべし。人を交へば、物に厚薄有無を生じ、千變萬化して物亦一定せず。

○予未だ艱難を共にせる人を忘れず。然れども是に交はるの道を盡くさず。思ふて盡くさず。盡くさるは心の至らざるなり、知足らざるが爲なり、又徳足らざるが爲なり。人は徳の厚薄によりて定まる。徳即修身の外なし。

◎二月二十二日。

○正造もと繪畫に興味薄し。殊に山水を見るを知らず、花鳥を見るを知らず。後ち眞の山水を愛して、山水の畫を見る。而も見てよしあし分ならず。海老瀬村松本氏奥の客室の額面に、佐久間象山の物せし山水あり。之を見ること、一年二三回行きて十年。而して未だ其山水の出來の面白味なし。昨夜また獨り數刻閑居、額面を見る。燈暗くして分明ならず。終に立つて直下より仰ぎ見る。忽ち雲間の月を見出せり。月小にして、十年是を見落したり。山水の夜色たるを知り、又一段の風光を發見せり。茲に於て始めて此畫の善美なるを覺へたり。

正造一畫十年を経て、其眞味を覺へたり、可笑かな。

之を人の交際にたとふべし。社會人類にたとふべし。國家の狀態にたとふべし。ウカ／＼として人を見れば、其人の善惡はわからぬ。人は全體の中に必ず眞あり。其人の眞を見ずして、徒らに形の上より其人格を判する、必ず粗忽極まるものなり。たとひ我は愚にして彼は智、師弟の如き差ありとも、十年師弟の交をなせば、未だ師匠の眞を見る能はざるも、其一部を察するを得るなり。師は一目にして子弟の才不才を見極るとも、日月淺からんには、未だ子弟の徳不徳の眞髓を見破るを得ざる點あり。況んや子弟の愚にして、師が高遠の底を見るを得んや。而も十年一日の如くせば、終には其一端を自覺するものなり。予の愚、多年、人に於ては聊か經驗ありしも、畫に於ては始めて之を得たり。形ある畫にして其難きこと此の如し。無形の眞理に於て見難しと言ふもの、是れ凡人の常、毫も無理ならぬ次第なり。然れども能く近く比喻を取るは、仁に導くの法なり。何事も難しとせば彌々難し。法に従へば得らるゝもの也。夜行く。我影の地にあるを見れば、天に月のあるを知る。萬物の形を見れば、天に神あるを證すべし。我心、神にして、天の神に合するに到りて、見へざるものなし。

海老瀬村、松本氏方にて。

○偶 感。

○酒の力をかりて精神を快くす。或は酔ふて踊る。或は謠ふ。是れ天心なり。靜坐、修養、呼吸態度の至善より

して、精神の快樂を得て發す。其表に顯はるゝ、或は動き、或は踊り叫ぶ。皆天心に出づ。此一事、酒の力を假らざるも酒と同じ。酒や過ぐれば亂る。靜坐の道は過ぐるなし。

○艱難を共にせる人の中に於て、其最は父母なり。

近年に及で父母を見る。我今に於て山川を見る、尙ほ父母を見るが如し。

○凡治水は流水の心を以てす。雨水、山より出で、海灣へ行く。自ら選んで必ず低地による。即ち水の心なり。若し山を切り高臺を切斷せば、水理に背き、其遠近に及ぼす影響大なり。治水は地勢に従ふを順法とす。之に反せば天性に反し人道に反する也。

◎二月二十五日。

○古河町の井上河岸及三國橋の船着きは、地理上古河町の富源たり。恰も湊港の如きなり。此富源を失はゞ、古河町西部の直接損害を奈何。予、今夕、井上氏を訪ふて涙流る。主人は却て憂ふるの色なし。是れ此天形地理は井上氏の所有にあらざればなり。されば古河町民は如何。即町民亦憂ふるの色なし。此憂なきは、町民の所有にあらざればなり。公共心に乏しき、天下凡此の如し。日本人の公共心に乏しき此の如し。

然るに思ふ、此の狭き古河町に一人あり。尙狭き谷中村に一人あり。此二人の外に島田榮藏氏あり、氣慨の人なり。其力の量目よりせば、予正造等の及ばざる遠し。然れども高田仙次郎、田中助次の信仰に及ばず。島田榮藏氏は政治家なり。政治家としては、又た正造の及ばざる點多し。此人聾して聞くことなしと雖も、耳あ

る者の及ばざる點頗る多し。

予が見て其人とする者は、古河町は田中助次氏なり。谷中は高田仙次郎氏なり。此二人は神に入るの道に進みつゝあり。二人互に日常の生活を異にす。其の行亦同じからずと雖も、歸する所は誠意のみ。而して二人共に意志堅し。難有々々。二人は敬神の人なり。其神の名其類の何たるを問はず、誠心に一歸するもの也。此二人は誠に宗教中の大學士の一角を得て確實なり。

高田仙次郎氏によりて、正造は四十餘年の長夢を醒ましたり。夫れ他を見て己を見ず。いかに己を見るの短にして、他を見るに長せんとせしか。而も他の人を見るの一個條すらも未だ明かならず。其の明かならざるは、己を見るの明かならざるにあり。故に人生、己を見ること明かにして始めて人を見ること明か也。未だ少しも己を學ばずして、妄りに他を學ぶ、百年河清を待つものなり。己は水源なり、他は下流なり。己は内なり本なり、他は外なり末なり。其の本と内と明かならずして、而も俄に外と他とを見んとす、是れ木に縁りて魚を求むるの類のみ。高田氏は毫も他を見ず、己一方を見る人なり、己れ一方を研究する人なり。故に幼にして一字だも學ばず、普通の禮節をも知らず、毫も文明の諸具諸藝を知らず。然れ共人道法律國體神靈の何たるを知り、家業をはけみ家政を整へ、家庭圓滿にして人と争はず、普通の義務を缺くことなし。以て道を曲けず、富貴を怖れず、貧者を侮らず、直言明確、片言人に詔はず。慈愛にして勇あり。無慾にして物を欲しがらず惜しからず。傲慢、怒り、もとより無く。ほこり、高慢なし。人の言行として缺所なし。以上は正造が淺く見たる

高田氏なり。深く探ぐるを得ば、ますます深遠にして高尚ならん。

○予常に下情に通ぜんとして、未だ通ぜず。十ヶ年、谷中に入りて居住せしは之れが爲めなり。然れども予は谷中の人情に通ぜずして、殆ど苦學す。苦學して得ず。時に高田氏の事あり。九ヶ年を経て高田氏を見たるは尙早し。他の劣れる人の情を知るは幾年の後なるべきか。斯く通ぜざるは何の故か。己を知らざるが爲ならざるはなし。下情を見んとするよりは、寧ろ身を以て下情に置くべし。下界に身を置かずして、いかにして下情に通ずるを得ん。魚を漁るもの、魚の心を知る。下民と共にするは、下民と情を同ふするにあり。情を同ふするは、同ふするにあり。近寄るは近寄るのみ。近は近きのみ。未だ同じからず、同じからざれば同じからず。己れ未だ同じからず。同じからずして同情すと云ふと雖も、假りの同情に過ぎずして、未だ眞の同情にあらず。眞に到らざるものは眞なし。眞なければ、百年同居同栖するも、同情に到らざるなり。宜なり、谷中人民の我に同情せざるに非ずして、先づ我の同情せざるなり。終に此誤を發見せり。

右二月廿六日、古河町旅舎紙屋に於て。

○案するに、足尾銅山の陰謀奇計、政府の面をかぶりての働きは、悉く法律無視なり。人民此の祕を知らずして政府を恨み、官吏を誹る。此行違を解せざれば、國家は一會社の犠牲に陥るなり。否陥りたる也。

○予、數十年、石を愛して其の愛する道を知らず。予は只石の形を愛せり。是れ山川の形を愛するよりして、終に石の形を愛せしものか。然るに今回、黒羽より大中石二個を猪熊氏に送る。其石、形はよろしけれども、質悪るし。質と性とを愛さずして形に偏するものは、予の石の如し。予は茲に於て斷然形のみの價なきをさとるぬ。人に於て之をさとる既に久し。石に於て遅かりし。

○人生、死すとも悪るい事をなすべからず。悪るい事せば直に死するなり。よい事して死するは、直に死せず、死するまで餘るあり。悪るい事しては、すぐに死して又死す。二回死す。第一回は直に死を免かれず、第二回は肉體まで。よい事して死せば、一回にして、肉體のみの死にして、永久の生命は死せず。故に死すとも悪るい事すべからず。

○正造、泥棒はせず、又悪るい事はせず、八年尾行巡査、毎日々々二人を以てし、又一人を以てす。何の必要かある。是れ或は汝の罪を發かれん事を怖れてならんも、正造は人の罪を發くを業とせず、己の罪を發くを業とす。正造は己の罪を發くに於て日夜苦心するも、近年、他人の罪となるべき事をあばくの悪事たるを知るものなり。

○今ま此地方人民を見る。徳川氏の溫和的壓制に慣れ、二百餘年の遺傳性となり、一に畏敬、二に恐懼、三に畏怖、四に謹慎、五に卑屈、六に堪忍、七に忍辱、八に依頼、九に官尊等の文字より生ずる消極的謙遜、形容的禮節、偽善的忠義、吝嗇的節儉等、似て非なる性となりて、終に無精神となり、三百年の餘弊は、四十五年を経てますます甚しく、而も此弊より發する惡徳を指して道德と誤解するに至れり。此時に當りては、斷じて古きを捨て、新鮮なる宗教を以てするの外、此國民を救出すべき道なし。キリスト曰、一切を棄て、我に従へよ

と。今の日本は尋常無力の宗教を以て救ふべからざる也。

◎三月五日。

○キリスト今ま何處にあるか。

◎三月十日。

海空を、我家とせば、何もなし。何もなければ、みんな我が物。

人は皆、山を枕に、野の草と、ともに眠れば、朝日に目ざめ。

松の上に、鶴のあたまは、眞赤なり。我が髯白し、これみよの春。

此春も、鶴の來て鳴く、松の上。

○入るものは、外より來る神。出づるものは、内より出る神なり。天地の呼吸は、人として無きものなし。宗教の現實是れなり。信なければ空穴のみ。山岳空穴、尙ほ天地陰陽の呼吸あり。呼吸なきは死なり。只生者にして天地萬物の呼吸あり。神息の吞吐自から明かなり。而も誰か神なしとして神を疑ふか。或は曰く、自然なり

と。自然にして、神なしとせば、死は何の事か。死は死の事にして、神の事に非ざるなり。神は生を司どるものなり。死は神の事に非ず。人死して生靈存するとは、生の死せざるを言ふなり。アーメン。

三月二十九日

正 造

○正造よりも國家或は早く斃れん。正造は天地と共にするもの也。老ひて死するも、靈死せず。國家の死は、精神死して後に死す。

○水防妨害を憂ふるなかれ。天に盡すものは、必ず天より食を賜ふなり、其賜ふや、汝の働よりも大なり。たとひ小善を働くとも、天の報は小ならずして必ず大善なり。憂ふるなかれ。信じて疑ふなかれ。

◎四月十六日。昨日、谷中裁判終局。來二十日申渡。

今十六日、町内處々禮廻り。谷中人民、前に村を出た人々も、残つた人々も、大分は小屋になり、大半は乞食同様となれり。

◎四月二十三日。

○天に登る事を教ゆるは安全なり。樹に登る事を教ゆるは危ふし。

○神の上に神を加ふべからず。

○人生、水を知らざれば天理に通ぜず。

水は天理天則を守れり。

水の方圓の器に従ふは憲法なり。人の憲法々律を守るは、水の方圓に於けるが如し。水の方圓に従ふ、恰も死水の如し。而も一旦方圓の器を離れば、忽ち天理に従ふものなり。流動は天理の一方に歸するものなり。天理の向ふ所敵なし。

法は動かす、水の方圓器に於ける如し。

天理の大なるは洪水の如し、海洋の如し。

人生、水を學ばざるべからず。而も水に及ぶもの少なし。水は聖なり、神聖なり、人として水に及ばざるの小徳を以て、大徳を治めんとす。治めんとせば愈々理に反す。

◎六月一日。日暮里本行寺に到る。先生曰く、杖を拂ひしと共に、心の杖を拂ひ得べしと。

◎六月十五日。

○死したる人民、三度の飯を食ふ、是れ國の困窮する所以なり。

強盜來りて生きてる人民の血肉を食ふ。死したるものは只飯を食ふのみ。

○馬の價一萬圓なるを見たり。二千圓位の品多し。

普通農民も四五百圓位のものを持ちたり。

之に反し、人の價のやすきは何ぞ。

人、不正直なればなり。

人、正直なれば、馬よりも調法なれば、價亦馬よりも高し。

○予は近來すべての黨派心を去れり。喜憂亦然り。たとへば谷中に居れば谷中は中心となり、栃木に古河に、至る處を中心とするの心を生ぜり。足利、宇都宮に至る、即ち同じ。東京府然り。求めて然るにあらず、自然と心中に此中心點を得るなり。苟も中心點を得て、而して心は四方に傳ふ。其遠近繁閑も亦自然なり。強ひて傳ふにあらず。長く居れば厚く、短ければ薄し。皆自然。

◎七月二十四日。昨日、途に五色の小石を拾ふ。

◎大正一年、八月二十二日。朝五時二十分、日暮里乗車。七時何分、古河町に着。田中屋より人力車を得て、猿島郡新郷村に入り、渡良瀬川を西に越へて、川邊村本郷稻村氏方に至り、晝食を乞ふ、車夫と二人分。此日、茨城猿島郡の排水樋門、及び北埼玉川邊村東方の排水樋門より、堤内シゴミ水の自然的排水せるを見る。排水

器は此地方に必要なし。必要なるは、關宿妨害滯水逆流等の被害を知らざるにあり。

○足尾銅山黨の勢力は廣大なり。東西數十里、數十ヶ町村を擧げて、一言半句言ふものなし。

○天の力に對して人力の勝は、勝にあらず。

人力は假りの力なり。

天力は千萬年の後に朽ちざるなり。

◎八月二十三日。一昨二十一日、東京日暮里聖坐集會に於て、岡田先生、汗水浴の話あり。海水浴の類に非ず。汗水は天人の行、海水浴は人事の奢侈。

◎八月二十四日。館林町、荒井清三郎氏の厄介となり、泊す。夜半、電燈の消へたるを知らず、小便に眠さめて起ち、東西を誤り、行く處を失ふて隣室を呼ぶ。此家の老母、驚き起きて又た東西を忘れ、暗中遠く東西に聲あり。下婢を呼ぶ。一家中騒動となる。燈火の來る、また甚だ遅し。小便殆ど漏る。思ふに此失敗は、心に燈なき爲めなり。又油斷心。又心に燈に依頼せし爲め、燈を失へば忽にして暗黒となれるものなり。人常に心の燈を消さざるを以て、禪者の所謂常の禪と云ふべし。

○大に人生を救ふものは、救はざるが如し。救ふの法の多くは殺すものなり。

○愚を愚とせば、久きに耐へて、而して愚にあらざるに到る。

○聖書はツンボの耳を経て綴りたる書なり。茲にツンボの人と談話する人、必ず要點のみを述べ告げて、言葉以

外の趣味に到らざるを常とす。聖書はツンボの耳を借りて傳へ來る話の如し。聞くもの深く味ふて始めて眞に入るべしと雖も、キリストの門弟、未だキリストの説を聞くの耳あるもの稀なり。偶々ありと雖も、キリストより見ればツンボの人の如し。

○天地を得んとせば、必ず得らる。若夫れ一点の私あれば、一塵をも得ず。

○死したるものは、其死を知らず。死を知るは生きたる人なり。

○人は天地に生れ、天地と共にす。些の誤なし。安心も立命も皆此天地の間に充てり。喜び樂み又限なし。之を行ふは即ち愛なり、仁なり。之を實にす、之を義とす。而して智徳は其美なるものなり。又曰、美は和を得るの要。和は天地を合す。

○我二十年、君子を求めて得ず、行つて得。

君子の道は求むるにあらず、行ふにあり。求めばますます難く、行へば得る事易し。

予の二十年、君子を求めて得ざるは理なり。予大に之を怖れ、近年行はんとしてより、君子を見るに至る。

○悔改は、全く悔改を明白に言盡くせば、其餘は言はずして足る。若し悔改めて盡くさざれば、悔改とならず。

若夫れ悔改を表示し、第二の名譽を回復せんとせば、名譽と耻辱と併發するものにて、二者共に無効となる。

○二十四日、夜半。

孔子曰、門を出て、は大賓を見るが如し云々。

正造曰、人を見る、尙如見神。

○我は蛙に生まる、汚物を怖れざる也。已に汚がる。今にして河鹿を學ぶ、甚だ難し。河鹿は死物を食はず、汚れたる土砂を嫌ふ。彼れの好みは、山間溪谷の清水の邊に棲みて、大聲を發す。其聲、下腹より出で、美也。蛙の大聲なるも濁音聞くに堪へざるとは大に異れり。河鹿は此種の聖なるものなり。蛙は普通の農工商の類なり、下流の藝人なり。人物にも亦此差別等級あり。之を天差、天別、天級とも可申。區々人々の造れる規定細則、之を奈何ともすべからず。

○山を治むるものは、其心、山の如くなるべし。
水を治むるものは、其心、水の如くなるべし。

○十二月四日。赤麻沼岩瀬樓にて、朝飯の膳に鮓と云ふ魚を焼て、醬油をかけ、大根のからみ、其味のみまきこ
と、生まれて始めてたべた。

○按摩は足をさするをもて賤まる。醫師は賤まれず。人、人に近寄れば賤まる。醫師按摩と其用何れか分ちがたし。正造、人に近寄ると多き爲に賤まる。人の正造を見る、按摩を見るが如し。此間は久しく當方に見へぬ、笛の音もなしとして、藪醫ほどにも思はぬなり。僅かに按摩と見るなり。

○太陽はありがたしで、人に見らる。故に無形の神に及ばざるなり。

○人の己を知らざるを憂ひず、また君子ならずやとは、ソロ／＼人に近きものなり。神の心は尙ほ遠しとす。神は、人の知ると知らざるには、少しも顧着なければなり。唯だ人を知らざるを憂ふと云ふに至りて、始めて君子とも言ひ、又は聖人とも言ふべし。

○十二月廿九日。今朝、川邊氏の話中、牛の事あり。狭き山路、互に荷を負ふて出逢ふ。牛却て人を避けて通せりと。此牛の心は、今人の心よりも遙に優れり云々。今人は人を倒して通れり。

大正二年

日記

(大正二年一月—八月)

◎大正二年、丑。正月一日、二日。横濱根岸。

◎三日。芝口、越中屋。

○富益克巳、貧彌樂天。

毎日悔改、毎日懺悔。

○人はパンのみを以て生くるものに非ず。夫れパンは外より入る。心は内にあり。心を以てパンを造る。パンを以て心を造らず。神之を司どる。之れとは兩者也。兩者とは内外なり。内外の宜しきを得る、之を中と言ふ。内外のよろしきは、自然に無理なくして無爲なり。無爲は虚心なり。無爲虚心にして、萬物皆我物なり。是れ天國の天國、天國の至妙に達す。

◎正月十五日。

○才に相談せず、智に相談せよ。智に安心せずば神に聞け。書冊に相談せず、臍に相談せよ。臍にて安心ならざれば神に聞け。其の神に聞くや、初めより神に聞けばイヨク厚し。後に末に聞けば薄し。初より聞けば、多し。末に聞けば、少なし。

◎正月二十一日。

○十年二十年以前に述べ語りし事、皆當時行はれずして、今は常となれり。彼の聖人が、既に數千年の已前に於て述べ語りし事、今行はれつゝあり。十年二十年の淺き年月の豫言は、豫言の淺薄なるものなり。予が言の行はれざる、固より其處なり。努むべし。

◎正月二十二日。降雪中、古河町に歸り、田中屋に宿す。

此夕、手紙を小中へ遣はし、正造の財産の一切を、小中の農教會に寄附す。尤も金二百圓づゝ、蓼沼丈吉、島田雄三郎兩氏の舊債を、村方より返し呉れることを、篠崎、石關、白石三氏に頼み遣はせり。

○智に向て智を求むるは順なり。愚に向つて智を求めんとす、是れ逆なり。然れ共順より得るの智は人智に過ぎず。愚より得るものは人智にあらず、寧ろ天智なり。古語に曰、下學上達すと云ふに合す。下民細民貧窮者は智識に乏し。故に文學上に愚なり。當世人事に適せず。逆にして時機を知らず。坐して生命を奪はる。是れ愚なり。此愚人や、衆多なり。夫れ天に口なし、人を以て言はしむるは、此衆愚の口より發するの聲なり。天理は智人にあらず、愚人衆愚の輿論に發す。案するに、人智は人にあらず。衆愚は、人に愚にして、天に愚なら

ず。下學を重んぜば天に合す。上智を速かにせば、人智に速にして、天理に遅くなり。予は言ふ、上學下達せず、之に反して、下學必ず上達す矣。

大正二年正月二十三日、古河町田中屋にて記す。

○下野國は、大正二年丑歲正月、全く亡びたり。其故悉はしきを聞かんと欲せば、予が前に來り、其亡びたる所以を知るべし。

日本亦た下野と大差なし。是亦其實を聞かんと欲せば、予が前に來り、謹で予が告ぐる所を聞け。但し謹で聞かんと欲するものは無し。無き爲に、今日の亡びに判りし也。

○蜜柑一つにも形あり。色赤ければ人之を喜ぶ。色も香も形もなく目にも見へざるの徳を喜ぶ、少なし。

○日本、今人物漸く空し。今よりして樂觀するものは、固より取るに足らず。唯之を憂ふるもの少なし。心誠に憂ふるものを見ず。されば之より日本亡國の地獄に惱みて、誰一人、國を憂ふるの真人なきまでに至るなり。口には憂國家を見るも、心には見るべからざるなり。然れ共此時運の逆境久しきに涉りて、其間必ず有爲の聖賢を出す。されど之を用ふるもの無きなり。たゞ聖賢の言葉の、數百年の後に傳はりて、後の人をして天國に到らしめん。嗚呼此聖人の出づるは、今より數十年の後なりとせば、此の數十年は、飼ふものなき綿羊の如き人民たらん。(二十八日)

○正月二十九日。逸見氏方泊。今朝、靜坐に參す。

○二月十四日。

○人生、正しきに働く程の福はなし。我爲め、人の爲めを問はず、樂しきなり。そは正しき命を長くするの初なれば也。

○今日は大臣の椅子の問題にあらず。日本の存亡問題なり。輿論希望の所在問題なり。國民全部誠實有無の問題なり。

○三月十八日。東京より古河町に來る。判事の一行に答禮を述べ、辯護士に亦同斷。村澤に行きて泊す。

○三月十九日。昨夜來雨降る、今朝尙降りつゞく。判事書記の一行、九時の汽車にて東京に。辯護士、十時の汽車にて東京に。谷中の人民、皆停車場に送る。正造疲勞漸く回復す、而も未だ雨を厭ふて出でず。

○三月二十一日。梅の枝を水に挿すと、花は却て常よりも早く開くを見たり。其根を失へるを忘れて悲まず、唯一時、水の多きを喜ぶ者に似たり。愚昧の人々、百姓にして土地を失ふも、金を得れば、一時早計に喜び。其心、草木に同じ。

○渡良瀬川、鑛毒に犯されて、明治十三年には既に亡びたりしも、當時より二十三年頃まで、沿岸の繁昌は非常なりと覺へたり。是は、他の富未だ亡びざりし爲め、毒の事にて俄に貧するも、表には見へざりしものと知ら

る。今や日本亡びたりとて、即ち諸般は未だに繁昌す。故に世人尙十四年後に到らざれば、飢へず凍へざるなり。飢凍へるの日到らんか、是れ悔ひて間に合はざるの時なりとす。思ふて茲に至る、満身の粟なり。

◎三月二十五日。古河町にて、島田針谷二氏に別れて、東京日暮里逸見氏に厄介となる。

◎三月二十六日。

○心志は高尚ならざるべからず。言行は平凡にして可。

◎三月二十八日。品川の舊友二三を訪ふ。路頭、小石一二拾ふて行く。時に語あり、「早く報を得る者は限あり。天よりせる報は無限なり。又報の遅速とはなし。」

◎三月三十一日。

○日本で、古來の風教及既往の物造りを輕視するは、眉毛を剃る婦人の如し。自ら天美を失ふものなり。

○キリストまた何も無し。只だ後人の爲せる、聖書と云ふて、端書を集めた物のみ残り。キリストの萬分の一か、幾萬億分の一を存せるのみ。其の一と言ふものも亦影のみ、實體を見るものは少なし。

○海陸軍全廢。

○世界海陸軍全廢は、正造、神の攝理によりて、去三十五年入獄四十一日、此時聖書を通讀するの時、軍備の不可なるを確信してより、静岡東京栃木等一府二縣に於て、五回に及んで同一確信を述べたり。

◎四月二十一日。足利にて。

我宿の、朽ち木糞土の垣根まで、同じゆかりの春風ぞ吹く。

高利貸、税取立ても、盜人も、正直なれや、正直となれ。

○山川を愛するものは、深く水源地に入る。
人を愛するものは、人道に入る。
共に深きを要す。

○桐生町、桐生川及其山川の天美、及佳良の清流を度外視して、別に公園を造り、佐野町も亦、佐野川の水源及水流を愛せずして、故らに公園を造るとて、古松を枯らすまで、下草を刈る。足利の公園、躑躅の花多し。藝妓の頭は躑躅よりも花やかなり。天籟の松の聲は聞く人なくして、園中の高樓に響ける三絃の音は、水車や汽車の音よりもかまびすし。

○予は靜坐によりて天下の大道を知る。即ち自然の治水を悟る。國家現在の河川は、健全法を知らず。是れ靜坐を知らざるによる。満身破れたゞれ、膏藥ばりの工事のみ。

○現今、山川を愛するもの無し。其の山に樹を植ゆるも、愛心にあらず。樹を早く賣らんと欲するのみ。見よ、庭園に樹を育つるもの、誰か早く薪にする事を思はんや。是れ誠に樹を愛するもの也。庭園に植ゆると山に植

ゆると、形を同ぐして其心は此の如き大差あり。今の植林は愛にあらず、慾のみ。たとへ水源に樹を植ゆるとも、愛より出でざれば涵養の道にあらず。

◎四月二十七日。佐野町、眼病院にて、朝。

常盤木に、櫻の花の、降りしきて、雪のあしたの林なりける。

◎五月三日。夜、田名網氏と恵下野より来る途、雨降り來りて、已むなく部屋の石山氏に泊す。此家の娘十二三歳のとめ子に、小石十五六貫ふ。海邊の浪すれ石の綺麗なる事、人とすれば精神なり。精神は、浪すれして残るものなり。

◎五月八日。桐生町停車場より、高津戸橋視察一行の諸氏に同行。

◎五月十一日。佐野より小羽田に至る。

◎五月十二日。佐野より田沼、三好、其れより葛生に至る。

◎五月十八日。犬伏町、富士入に入る潜水池を見る。本年の湯水にも、未だ樋門開かずして、澤水十分。

◎五月廿一日。新合村より戸奈良、上石塚、小見、吉水。堀米より小中、中堀を見て小中に泊す。

◎五月二十二日。山下村かしま辨天。松田川、十年此方少々、水を増して、各水車の廻り可ろしくなりたり。是澤々に杉を植ゆるもの多き爲ならん云々。目出度々々々。

上多田の天水堀。三四十年は魚上りたりしに、今は上ほり少なし。原因は渡良瀬川及秋山川水盡き、水縁絶へたればなり。

◎五月二十四日。足利より猿田、神明、和泉、中里に來る。

堀越長平氏は足利郡五十部村の人なり。同郡松田村山林を有せり。もと空林を買入れて植林を努めたるは、村民の知る所。既に一旦荒廢せる山林及松田川の水涵養の實舉りて、十年前には用水不足、水車業春冬二期休業となりしも、八九年前より追々水量増加し來りて、現在は用水十分、田畑は勿論、水車業者の幸福を増進せりと云ふ。

◎五月二十七日。昨夜、小山宿に泊。午後古河町より出京。

汽車中、植野村の機業者なりと云ふ人の話に、近年利根川にも鑛毒被害を見る。其原因、足尾鑛業所の脱硫酸より、鑛毒を電車にて西方の峯の外に放棄す、是れ利根川の一水源地也。されば下流に其害を見る當然なり。可憐、群馬縣人未だ被害の何たるを知らず、今年々々又明年、今より二十年の後に始めて自覺せん。此時騒動せん。而も災鬼既に去るの後とはなるべし。

◎五月二十八日。昨夜、日暮里逸見氏に泊し、今朝靜坐の主たる岡田先生に到る。木下逸見兩兄既に三年に及び正造も二年半に及びたり。此朝、逸見氏の少年、籠の小鳥に逃げられて、あはて、鳥もちを買入れて、竹の竿頭にぬりつける。其間に、鳥は遠く逃げ去りたり。

◎五月三十一日。龜井戸出立、古河町に歸る。下宮、高田氏に來り泊。

◎六月一日。下宮高田氏出立。北埼玉郡利島、川邊に到り、飯塚伊平氏を訪ふて問ふ。同人答。埼玉縣知事大久保利武氏、去四十年八月の洪水除防に盡力されて、空俵一萬俵を自費にて寄附し、且曰、舊政府此村々を開拓せり、今人之を守るは當然のみ云々。四十一年早春、臨時土木の件に付、兩村利根川堤二百餘間破壊の復舊工事費十一萬六千圓也。當時縣會は兩村を遊水池とせんの見込なり、依て復舊費の支出を拒まんとす。知事は復舊に決心して、若し縣會が支出を爲さざれば、知事は自費にても築かんの意氣込なりし。縣會も知事の氣焔に怖れ、滿場一致本案を可決したる由。然れ共知事を陰密に排斥するの運動をなして終に之を追出したり、足尾銅山黨の魔力は甚大なり云々。

○この夜、石橋宿に泊す。

○予の書を見るべからず。予の議論を聽くの要なし。行はざれば論を用ゆ。行ふものは論の用なし。故に予の論に用は無し。唯予の行ひを見るときも聞くとするを、可しとす。

◎六月二日。石橋宿、扇橋亭に待てり。谷中の人々來る。予、病を押し、車にて同行。壬生の東方、黒川の西岸の茶屋に立寄る。此家は四十三年冬、四十四年の夏、二回訪ふて、四十三年の洪水は既往の大水に比して深さ一尺餘低しとの答を得てより、今に三回に及び、三回とも答同じ。

同日、小倉川の西岸某茶店に至る。是亦前後三回、答相同じ。同行者、晝食にうどんを食ふ。

同日、栃木町に同行す。予及島田榮藏老人二人は、金半と申す旅舎に投宿す。

○予近來岡田氏の靜坐により、萬事の發展力を得たり。新井翁の聖言によりて、日に三度省みるの心を失はず。逸見君により、日進月歩の思あり。木下君によりて、舊套を捨つる、猶弊履の如きを學べり。

◎六月三日。栃木にて九人と別れ、中里に至り、としま屋に泊す。

○三無教會。(六月二日感)。

無慾

無價

無文學

是れ予正造既往今來の宗教なり。更に歩を進めば、其宗名も亦改まるべし。

◎六月六日。昨夜は生井より來り、惠下野の島田氏に泊す。

今朝、島田家の老婆、雛の群に餌をまき與ふ。中に強勢な雄鶏あり、餌を專有して他に食はしめざるのみならず、衆鳥を壓すること甚だし。老婆曰、強きは隣りの鶏なり。隣りの鶏却て我家の鶏を逐へり。尙甚しきは雌鶏を奪ふ。雌鶏、夜、隣りの巢に眠る。實に憎むべし。然れ共目下家事多忙、養蠶繁く、庭前家禽を制するの寸暇さへなし云々。